目指すは最高の料理人！！

@T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
目指すは最高の料理人！！

【Ｎコード】
Ｎ８６５４Ｑ

【作者名】
@T

【あらすじ】
なんと！俺は転生したようだ。まあ転生しようがしまいが俺が目指すものは１つ。そう、俺は最高の料理人になる！！
この作品は作者がのりといきおいで書いている小説です。よって亀より遅い更新、駄文、構成がおかしいなどの凄い事になると思います。
それでも読んでくれる優しい方は・・・ゆっくり読んで行ってね♪

プロローグ（前書き）

どうも@Tと言います
このような駄文を見に来ていただきありがとうございます
なにぶん自分は文才が無いもので、御見苦しい文になるかもしれません
ご容赦下さい

プロローグ

はて?俺はなんでこうも真っ白い空間に佇んでいるのかね?

確かふぐの毒に当たった気がするんだが・・・まあ今は状況確認だ

見渡す限り真っ白々、そして目の前には土下座した幼女

・・・幼女?

はて、さっきはこんな子居なかったと思ったんだけどな・・・どうするか

1幼女に何故土下座をしているか聞く

2明日に向かって走り出す

3叫ぶ

ふむ・・・まともな選択肢が無いな。よし

「あまーーーーーーーーい!!」

答えは2.5。つまりは、走りながら叫ぶ

「へ？ちょ、ちょっと待ってくださーい！！」

む、幼女がなんか言っているな・・・だが断る！！

「あまーーーーーーーーーい！！」

「ま、待ってーーー」

ふはははは、止まらんよ。我は爆走者なり！！

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

ふむ、まだ追って来るか幼女よ

「と、止まって・・・」

ふふふ、そう言って止まってくれる者など・・・

「ここに居るぞ！！」

「キャーーーー！！」

おっと、車は急に止まれない物だったな（笑）

「はあはあ。わ、私は車じゃありません・・・」

ん？なんで俺が考えていることが分かるんだ？

「はあはあ。それは私がか「分かったぞ！！」な、なにがですか？」

ふふふ、幼女よ貴様の正体は

「神だな！！」

「へ？そ、そうですけど・・・」

ふはははは、やはり神だったか！！

「で、なんで俺此処に居んの？」

「キャラ変わってません？」

だってそりゃ

「こんな真っ白な空間じゃ性格も変わるって」

「そ、そうなんですか・・・すみません」

まあ、あやまんなよ

「で、どうして？」

「それはですね・・・」

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

幼女いわく

・俺死んだ
・親父の身代わり
・神のミス
・ごめんなさい
・転生させます
との事だ。要するに・・・

「俺は親父の代わりにふぐの毒にあたって死んで、でもそれは神のミスで本当は死ぬのは親父で、そんなミスをしてしまったのでお詫びに転生させます。って事か！！」

「はい、そういうことです・・・」

そうかそうか・・・

「親父は後どれぐらいで死ぬ事になった？」

「え～っと、あなたが代わりに死んでしまったので、あなたの人生、後４０年は生きる事になっています」

そうか、そうか良かった

「へ？なんで良かったんですか？」

なんでかって？

「そりゃ、親父が毒に当たって死ぬのはやだからな。それに俺の分まで生きてくれんだろ？」

だったら

「俺が代わりに死んでも良かったかなって」

「・・・珍しい人ですね」

そうか？あ、でも心残りは・・・

「自分の店を開きたかったな・・・」

「・・・できますよ！！」

何？それは本当か！！

「本当です！！なぜなら・・・あなたは転生するからです！！」

幼女の後ろに言葉のババーンって文字がある・・・何故に？

「てか、転生したら記憶も無くなるんじゃねーの？」

幼女が無い胸を張る・・・ふむ。将来に期待

「今回は異例の事態なので記憶の消去は無しです。しかも！あなたが求む物を３つもあげちゃいます！！」

ふむ、例えば？

「はい！例えば、異能を打ち消せる右腕が欲しいとか、どこからでも取り出し可能な倉庫がほしいとか」

それは便利そうだな・・・良し

「それは才能とかでもおk？」

「はい！可能です。あと、転生先で生き残るための力や身体はこちらで用意します」

ふむふむならば

「1つ目は道具を上手く使える才能、2つ目はひらめきの才能」

「道具を上手く使える才能とひらめきの才能ですね」

そして

「最後に料理の才能」

「料理の才能ですね・・・へ？」

何を驚いているんだ？

「生前は料理の才能が皆無だったからな、菓子と違って」

なぜか和菓子とか菓子類を作る才能はあったんだよな・・・

「え～っと。本当にそれで良いんですか？」

大丈夫だ問題ない

「一番良い装備を頼む」

体は正直だ・・・

「分かりました!!一番良い物を用意します!!」

おｋ頼んだ

「それでは行ってらっしゃい」

・・・ん?

「此処は下に穴が開くものじゃないのか?」

「へ?そうなんですか?」

まあ良いや

「で、どうやって行くの?」

「もうすぐ来ますよ」

ん?もうすぐ来る?それってな（ブーン）

「おべらーーー!!」

「行ってらっしゃ～い!!」

おｋ。まさか死んでからトラックに撥ねられるとは思ってなかったよ・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

気づいたら俺は転生してました。

まさか、魔法や気ましてや陰陽術がある世界とは・・・ＹＯ☆ＳＯ☆Ｕ☆ＧＡ☆Ｉ

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

面白い人でしたね

あんな風に親を思える人が世界に溢れれば戦争は無くなるんじゃないでしょうか？

まあ、人間界の事は私の知ったことじゃありませんが

そうだ！あの人のために一番良い能力を渡さなきゃ

道具を上手く操る才能→道具と考えたモノを上手く操る事ができる
ひらめきの才能→相手の攻撃を数分完全に避ける事ができる（スパロボ風に）
料理の才能→食べられない物でもおいしく料理することができる

こんなところでしょうか？あ、そろそろ宿題しなきゃおじ様に怒られちゃう

プロローグ（後書き）

主「おーい！！俺の名前が出てきてないぞ！！」

@「あ、ホントだ。まあいいか」

主「良くなーい！！今すぐ考えろ！！」

@「ok、ok。今度考えておくよ」

主「今度って何時だーーー！！」

@「今度だよ」

@「ということで皆様よろしくお願いします」

主「よろしくな」

よくある主人公の紹介（前書き）

@「ということで、お前の名前を考えてやった」

主「流石作者だ。のりといきおいがある！！」

@「考えたのは僅か一分！！それがこれだ！！」

主「いいぞいいぞ！！・・・へ？一分？」

よくある主人公の紹介

名前：青木（あおき）　亮（りょう）

年齢：２２歳（原作開始時）

出身：京都

魔力：木乃香位

気：ラカン位

能力１：道具を上手く操る才能（道具と考えるものを上手く操れる）

能力２：ヒラメキの才能（考えを思いつく他に、スパロボのなんでも避ける能力あり）

能力３：料理の才能（おま、これは無理だろって材料からも料理ができる）

@「まあ、このぐらいか？」

亮「おま、ないわｗｗｗ。俺は普通に料理がしたいだけなのに・・・」

@「大丈夫だ、普通の料理もできる。ただ、サバイバル能力が高くなるだけだ」

亮「例えば？」

@「毒きのこを料理に使用」

亮「それは・・・死ぬ」

@「毒を逆に調味料とする。言うだろ？薬も間違えれば毒になると」

亮「関係がわからねーーー！！」

@「じゃ、頑張って生きろよ」

亮「ちょ、おま。これは生き残れるのか？」

@「神も言ってただろ？生き残れる身体にしたと」

亮「例えるなら？」

@「炎を纏いながら自転車で数十キロ走る事ができる」

亮「ｏｒｚ例えがわからん」

@「考えるな・・・感じろ」

亮「人間は考える生き物だってじっちゃんは言ってた！！」

@「勝てば官軍」

亮「負ければ奴隷」

@亮「「それが、人生～♪」」

よくある主人公の紹介（後書き）

亮「で、結局何が言いたかったんだ？」

@「死にはしないけど重傷いっぱい」

亮「まじで？」

さあ、生き残れ我が羊よ

さあ、原作に向かってＧＯ！（前書き）

@「題名の通り、今回は原作に向かうまでの準備期間だ」

亮「ｏｋ。だが、することってあんのか？」

@「おま。原作で木乃香が狙われたんだから、それと同等の魔力持ってるお前が狙われないわけないじゃん」

亮「・・・もしかして、俺ってフラグ立ってね？」

@「おう、特大の死亡フラグだ（笑）」

亮「ｏｒｚ」

さあ、原作に向かってＧＯ！

おはこんにちこんばんは青木　亮で～す

ん？なんで俺達（画面の前の貴方！）に話しかけてるかって？

それは簡単。分かってるからですよ

いや～実は、この世界の神（さくしゃ）と更新できるようになってね～

こんな風に

ちわ～っす神様

（お前、頭丸かじり）

ね？分かるでしょ？

今はなんか機嫌が悪いようだから、後で酒でも神棚に置いておこう

（でっていう）

うわ、うざい

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

まあ、あの後転生したは良いんだけどなんか生まれるとこ間違えたっぽいｗｗｗ

なにせ、母親が一流陰陽師、父親は英雄に引けをとらない剣士だってｗｗｗ

ｏｒｚやってらんねーー！！

なんで転生先が普通の家系じゃねーーんだよ！！

（運命は・・・変えられないので（笑））

あんたのせいか！！

もう良い！！家系なんて関係ねー！！

俺は料理人を目指すんだ！！

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「そう・・・亮は裏の人間としてではなく、表の人間として生きたいわけね」

「はい」

言ったぞ。さあ、どうなる！

「私は賛成よ」

あれ～（ ゜◇ ゜）

「亮には普通に生きてもらいたいしね」

母さん・・・貴女は神か！！

「俺は反対だ」

親父・・・あんたって人は！！

「俺も、表で生きてもらいたい。だが、お前の気と魔力の量は利用されかねない」

ですよね～やっぱり無理ですよね～

「だから俺はお前を鍛える！！」

は？

「気や魔力を封印してても利用されないぐらい強くしてみせる」

「いや、待てよおや「その通りね」母さん！！」

「強くなりましょ三人で。亮の力を悪用されないために・・・亮のために」

ｏｒｚなんてこった、これは自分で特大の死亡フラグを立てちまったのか？

（まあ・・・頑張れ）

理不尽だーーーーーー！！

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

やあ皆さん、元気でしたか？

へ？どうしたかって？

そりゃ、地獄を思わせる特訓をさせられましたよ

これでもまだ、十一歳ですよまったく・・・

「このちゃん！！」

「せっちゃん！！」

へ？今は何をやってるかって？

そりゃ、山のキノコとりですよ。後、魚も欲しいな

「だ、だれかたすけ・・・」

おｋ。俺は河で溺れてる少女を助けなければいけない運命らしい

（それが・・・運命だから）

神よ。あんた・・・ベートーヴェン好きか？

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

助けてから分かった事だが・・・少女の一人は俺と同等の魔力を持ってる

もう一人の少女は・・・多分、妖怪とのハーフだ

何故分かるかって？・・・修行（じごく）の成果とでも言っておこう

さて、助けたは良いがどうしようか？

「亮、こんな所で何やって・・・」

ん？親父か、丁度良いところに来たな

「亮・・・お前って奴は！！」

「へ？うお！！アブね！！」

いきなり刀を向けるなよ！！

「もう性欲に目覚めてしまったのか！！」

は？・・・待て、状況確認だ

俺の横には水も滴る良い少女。そして俺は、和服だったせいか少し着崩れしている。少女もしかり

・・・ＯＵ。俺は傍から見たら変態だ

「待て親父話せば分かる」

「罪を犯したやつはたいていそう言うんだよーーー！！」

ちょ、おま息子に対魔様の刀使うな。あべし！！

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

目が覚めたら・・・

「ｏｋ。少女よ顔が近い。いったん離れろ」

少女の顔が目の前にあったよｏｒｚ名台詞言えねーー！！

「おとうーさん。兄ちゃん起きたえ」

少女が父親を呼びに行ったようだ

さて、あれからどれくらいたった？

「その様子じゃ大丈夫のようですね」

声の方を向くとあら不思議目の前には

英雄と呼ばれてる『近衛　詠春』さんが居ましたよ

おい神よ、これがあんたの言ってた運命ってやつかい？

さあ、原作に向かってGO！（後書き）

亮「次は原作突入だな」

@「・・・」

亮「どうした、作者？」

@「ミスった。まだ続きそう」

亮「ちょ！どうすんのさ！！」

@「今日中の更新は無理明日も・・・」

亮「なんか用事か？」

@「友との約束が・・・」

亮「ｏｋ。作者、歯食いしばれ！！」

@「甘いな「甘いのはどっちだ！！」何！！」

亮「俺は、親父と母さんの修行で一般人の枠からはみ出たんだ！！」

@「くそ、しまった！！」

亮「喰らえ！！睦月！！」

@「ちょ。おま、作中で出てきてないのに剣技使うな！！」

亮「知るか！！きさら「やれやれだな」何！！」

@「此処は俺の仮想空間だ。よって、支配権は俺にある」

亮「な、何！！」

@「君はいい友人だったよ。さようなら」

亮「く、くそーー！！」

@「沈め。地獄の火炎」

亮「待てーー！！それも作中で出て無い・・・あべし！！」

何やってんだろ・・・自分は

へ？まだやんの？（前書き）

@「まさかの連続投稿？」

亮「一応同じ日に更新してるから、いんじゃね？」

@「ならいいか（笑）」

亮「てか、タグの亀よりも遅い更新はどうした？」

@「のりが止まらね～（笑）」

てな感じで←どうぞ

へ？まだやんの？

おｋ。まずは落ち着こう。深呼吸、深呼吸。

で、なんで英雄とあろう者が目の前に居るんだ？

「娘が世話になりました」

なるほど把握。俺が助けた少女のどっちかが英雄さんの娘だったってわけね・・・

確認・・・助ける→親父誤解→英雄に伝わる→娘が世話になった→俺＼（＾０＾）／

あれ？俺死んだ？

「娘をたすけ「私は何もしていません、それは全て親父のごかいです、私は善良な少年です、娘さんに手を出していません」ど、どうしたんですか？」

「死にたくないです。死にたくないです。死にたくないです。親父死ね。死にたくないです。死にたくないです死にたくないでう・・・」

（おまｗｗｗ餅つけ）

ぺったんぺったん（つる）ぺったんっておい！！

（うは、バカだこいつ（笑））

神め謀ったな！！

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「落ち着きましたか？」

「はい、大丈夫です」

誤解されてなかったのか・・・よかった～

「それでは。娘を助けていただきありがとうございました」

「いえいえ。それほどでも」

成り行きだしね

「それにしても・・・真にこんな大きな子供さんが居たとは」

「親父を知っているんですか？」

そういや、英雄に引けをとらないって自負してたし。戦った事でもあんのか？

「中学の同級生ですよ」

さいですか

で、少女はなしてちらちらと襖から覗いてんだ？

「ははは。木乃香、こちらにきて挨拶しなさい」

少女が部屋に入って来た

「このえ　このかいいます。よろしゅう、おねがいします」

おっと、これはご丁寧に

「青木　亮と言います。よろしく、お願いします」

あれ、言葉がおかしい？

「ははは。そういえば、亮君は何故あそこで倒れてたのかな？」

あれ？親父が運んでくれたんじゃねーの？

「りょー兄はかわに、あたまつっこんでたおれてたんよ」

おｋ。親父、家に帰ったらＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしようか

「その様子だと・・・何かあったのかな？」

「いえ、なんでもありません」

ただ親子喧嘩するだけですから・・・

「そうかい、それじゃあ木乃香はあっちに行っていなさい」

「またな～。りょー兄」

ふむ、元気のいい子だ

「いい娘さんですね」

「ははは。自慢の娘です」

さてさて

「それで、俺に何か用ですか？」

「用ではなく頼み事ですね」

頼み事？

はてさて、魔力と気を封印してる俺にできることですかね？

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

詠春さんいわく

・木乃香ちゃんの魔力すごい
・護衛が必要
・護衛を頼みたい

ですと

ん～

「すいません。お断りさせていただきます」

「そうですか・・・」

こちとら、表で生きたいものでね・・・

「それなら、木乃香と仲良くしてくれませんか？」

なにぶん、ここら辺には子供が少ないのでと言う

「いいですよ。でも、こちらも修行中なので、あまり相手できるとは思いませんが・・・」

かまいませんと詠春さん。分かりましたと俺が言う

「そう言えば、真は元気ですか？この頃会っていないので」

「元気ですよ」

息子を殺しかける位にね・・・

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「死ねや！親父！」

「なんの！息子にはまだ負けんぞ！」

家に帰り、親父に殺されかけた恨みと奇襲を仕掛けたが帰りうちにあった

ちくせう。なんで、目の前から人が消えるんだよ・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

修行（じごく）の合間で木乃香ちゃん達の遊び相手をしている

「りょー兄、せっちゃん。こっち、こっち！」

「おいおい。ちょっと待てよ」

「りょう兄、このちゃん待ってーー！！」

上から木乃香ちゃん、俺、刹那ちゃん（助けたもう一人の少女）

よく三人で山を探索している

「りょー兄、これなんてキノコなん？」

「それは、ベニテングタケっていってな、食べると下痢や幻覚を見ることができるぞ」

「おいしいんかな？」

「調理方法を間違えなければおk」

「って！食べたことあるん！」

はっはっは

「山篭りをさせられた時にな・・・」

「ハ～ドやな～」

「このちゃん、わらっちゃだめや！」

はっはっは。他にもドクツルタケとか、カエンタケとかも食べたぞ・・・中々いけたな

みんなは真似しちゃ駄目だぞ♪

（うは、きもい）

今頃出てきたか神よ！！

（何時までも、平和な日常が続くと思うな）

・・・なんかあるのか？

（まあ、ギャグだし）

ちょ、おま。メタ発言すんなよ

（ひゃっはーーーーー）

あーーー！！頭いてーーー！！

へ？まだやんの？（後書き）

亮「って！！こんな中途半端で終らすのかよ！！」

@「色々とあるんですよ俺には」

亮「なんという・・・で、最後のはフラグか？」

@「フラグですよ。まあ、原作がどうだったか覚えてませんが、木乃香ちゃんには十歳で麻帆良に行ってもらう予定です」

亮「で、今俺は何歳？」

@「１７歳」

亮「ｏｒｚまさか６年も経っているとは・・・」

@「てか、お前は中学卒業には修行終ってるし」

亮「何！！修行（じごく）が終ってたのか！！」

@「今、お前は京都の老舗料理店で働いてる設定だ」

亮「ひゃっはーー！！最高にハイってやつか！！」

@「まあ、どうなるかは俺の気分次第だがな」

亮「料理長に俺はなる！！」

@「（ｗｗｗこいつ逝ってやがる（笑））」

フラグは回収するもの（前書き）

@「気づいたら１０００ユニークいってた・・・」

亮「なんでこんな駄文をそんなに沢山の人が読んでるのか理解に苦しむな」

@「ホントだな。作者はのりといきおいで書いているからな」

亮「は～。で、何時になったら原作に行くんだ？」

@「のりといきおいに任せて書いているから未定だ」

亮「そうか・・・急げよ」

@「更新のいきおいがもう止まりそうだけどな（笑）」

フラグは回収するもの

ちわ～す皆様

現在、俺は山を駆けております

（うは、まさかのフラグ回収（笑））

笑えねーよまったく・・・木乃香ちゃんが誘拐されるなんてよ・・・

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「ん？刹那ちゃん、どうした？そんな荒い息して？」

（なんか軽くエロスを感じるな（笑））

ど～でもいい～

「はあはあ。このちゃんがこのちゃんが！」

「落ち着け、木乃香ちゃんに何かあったのか？」

刹那ちゃんいわく

・このちゃんが変な人に誘拐された
だと

・・・へ？何それ、助けに逝けと？

（今の刹那じゃ勝てない相手だＺ☆Ｅ）

ｏｒｚこれが前回言ってたフラグか・・・

（ついで、速く行かないと木乃香が大変な事になるよ）

マジカ・・・神はからかいはしても嘘は言わないからな・・・

（うは、俺信用されてる♪）

・・・さて、親父や詠春さん達は今日、遠くに行ってるから直ぐには助けに来ない・・・急ぐか

「刹那ちゃんは親父と詠春さんに連絡。俺は木乃香ちゃんを追う」

「でも、このちゃんの居る場所、わかるん？」

はっはっは

「こんな事があるんじゃないかと思って、前にあげた髪飾りには発信器っぽいものを付けといたんだ」

神に言われたあの後にな

「分かったわ。無理したらあかんよ」

そう言い刹那ちゃんは走っていった

・・・ごめんな刹那ちゃん

「知り合いが危ないと聞いて無理しない程、俺はまだ腐っちゃいない」

さて、逝くか

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

（で、かっこ良く出て来たは良いけれど～）

・・・

（髪飾りは途中でふり落とされてて～）

・・・ち

（場所がわからな～い）

「ちくしょうめーー！！」

ああ、これがギャグなのか・・・頼むから別の機会にしてくれよ・・・

other side

ヘッヘッヘ。ちょろいもんだぜ

英雄が居ないけりゃザルな警備だったな

「ん～ん～」

おっとお嬢様、そんなに暴れないで下さいよ

もう直ぐに着きますから

「んーーー！」

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「さて、着きましたよお嬢様」

これで、悲願が果たされる

関東の西洋魔法使いを駆逐し我等が関西呪術協会が日本を牛耳るのだ

「ふはははは。我等が同士の悲願は果たされる！」

（うは。いるよね～こんな雑魚キャラ）

ん?今、幻聴のようなものが・・・

「そういう奴は主人公によって倒されるもんだよな!!」

「な!つけられていたのか!!」

「んーー!!」

「木乃香ちゃんは返してもらうぜおっさん」

後ろを向くと居たのは青年

なんだ、青木の落ちこぼれか

「これはこれは、青木家の落ちこぼれがわざわざと」

「ん?俺ってそんな風に言われてんの?」

ふん。親は最高の陰陽師と剣士なのに子は落ちこぼれ

まったく気も魔力も無い

「私はこれから儀式に忙しくなるので邪魔しないでもらえますか?」

「身内が儀式に使用されるのを黙って見てろってか?」

ふん。才能もなければ、聞き分けもない。・・・餓鬼が!!

「貴様は黙って見ていればいいのだよ!!」

お嬢様の魔力を糧に出でよ鬼ども!!

大量の鬼がお嬢様の魔力を糧に召喚される

「おいおい。１対１００ってひどくね？」

鬼どもに貴様は蹂躙されていろ

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ホントこれはないだろ・・・

（うは、これこそ正に四面楚歌）

こちとら魔力と気が封印されてて、一般人のそれと同じなんだぞ!!

（しかも、封印は１分しか開放できないって言うｗｗｗ）

そう。俺の封印は母さんがかけてくれた封印で、解くためには首にかかってるネックレスを握り潰さなければならない

だけど、１分後に再生してまた封印されてしまう

（その後はどう頑張っても１日後まで開放できない（笑））

笑えね～。まじで、死亡フラグじゃね～か・・・

（回収ガンバ）

したくね～

「すまないな、兄ちゃん。俺らも呼ばれてる立場だ、容赦はできねえ」

「は～。お気遣いありがとう」

「んじゃ。殺ろうか」

そして、俺と鬼達の戦いが始まった

（一般人ね～。・・・あの能力はお前が考えているよりも凶悪なんだけどな～・・・）

フラグは回収するもの（後書き）

亮「・・・俺死亡？」

@「まあまあ。頑張ってみなさいよ」

亮「嫌、死ぬだろこれ・・・てか、俺の武器はなんなんだよ！！」

亮武器：木刀（鞘つき）

亮「鬼が木刀で切れるかーー！！」

@「おまｗｗｗお前能力使えよｗｗｗ」

亮「道具を操る能力でどう戦えと！！武器しか所持してねえし」

@「は～。お前はひらめきの才能を貰ってる筈なんだが・・・」

亮「あれは、新しい技とか、料理を考えつくための才能だろ！！」

@「（うは、色々と忘れてるようだけど、俺には関係ないか）まあ、頑張れ」

亮「も→～だ→～め←だ→～」

@「笑える～（爆）」

フラグは叩き折るもの！（前書き）

@「うは、1時に更新するつもりが起きたらもう朝だったぜ（笑）」

亮「そうかいｗｗｗどんまいｗｗｗ」

@「どうした？壊れたか？」

亮「これから死ぬかもしれないってのに正気で居られるか～（泣）」

@「おっと、これはやばいな。完全に死んだ魚の目をしてやがる（笑）」

亮「笑えるか～（泣）」

前から後ろから棍棒やら薙刀やら拳やらが飛んでくる

「鬼は正々堂々と戦うって聞いたが、嘘だったみたいだな！！」

「すまんのう。呼び出された手前、命令には逆らえんのじゃ」

まったく、いくら俺が親父達の修行（じごく）を受けてるからって、避けるにも限界があるんだぞ！！

って、うお！危ねえ！

（何やってんだよ～さっさと反撃しろよ～）

んな事言っても、木刀じゃ鬼を傷つける事もできやしねーー！！

（能力使えよ～）

何もひらめかねーー！！

（そっちじゃないんだけどな・・・）

んじゃ料理か？！こいつらを料理せよと？！うわ！

（ん～まぁ頑張れ）

っち！おっさんは儀式を始めてるっぽいし速くしないと・・・

封印を解くか・・・イヤ、今解いても誰も助けに来れないし、木乃香ちゃんまで辿りつけない！

「んーー！！」

っち！考えろ！何かこの鬼達に対抗する方法を！

（人間は思い込みをする生き物であ～る）

神よこんな時にふざけないでくれ！

（色眼鏡を外したら世界が変わるかもよ）

だから何言って・・・色眼鏡？

（思い込みのことですけど、それが何か？）

・・・思い込み・・・俺の能力は”道具”を上手く操る・・・

なら・・・木刀は？

・・・ひらめいた！

「兄ちゃん終いや」

鬼達に完全に囲まれた・・・逃げ場は無いな

「堪忍してくれや兄ちゃん。ワシ達も仕事やさかい」

そう言うと、数十の鬼が一斉に攻撃してきた。

・・・やるしかねーー！！

俺は武器を道具と思い込み木刀を鞘から抜いた

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

終ったな。そう私は思い儀式を再開する

「んーー！んーー！」

お嬢様が落ちこぼれの方を泣きながら見ているが関係ない

あいつは死んだ。武器も何もないあの状況なら例え英雄だとしても生きてはいまい

それにあいつは一般人。生きてる可能性は０だ

（世界に絶対という言葉は存在しない。あるのは人が必ず死ぬと言うことだけだ・・・まあ、不老不死じゃなければだけどな（笑））

ふー。疲れているのか・・・また幻聴が聞こえた

「あべし！」

ん？なんだ・・・

「ぷげら！」

「おぶは！」

「べらぽ！」

「きゃいーん！」

「ぶらあああああ！」

・・・どういう事だ？

何故鬼達が空を飛んでいる？

「な、なんなんや兄ちゃん！さっきまでと別人やないか！」

「すまねえな。色眼鏡を外すのに時間がかかった」

「何を言って・・・あばば！」

馬鹿な・・・何故木刀などで鬼が還せる、何故気や魔力が無いのにそのような人外の動きができる

「ラストー！！」

最後の鬼が還された・・・何故だ

「アンタの疑問に答えてやろうか？」

落ちこぼれはニヤニヤとした笑いをしながら此方に向かってくる

「まず最初に、木刀じゃ鬼を傷つけるのは無理じゃない・・・使い方が悪かったんだ」

鬼を還した木刀が月の光に照らされ不気味に光る

「気を使って強化するのが普通だが、そんな事をしなくても最高の振り方をすれば木刀は傷つかないし、真刀と同じくらいの切れ味をもつ」

馬鹿な・・・

「二つ目に、人はそもそも何時も全力を出せる訳じゃない。脳でブレーキをかけられる、ならばブレーキをかけなければどうなるか・・・」

ありえ・・・

「もう分かるよな?」

落ちこぼれが私の目の前まで来た

「最後に・・・おっさんは俺を見くびりすぎた」

落ちこぼれが首のネックレスを握り潰すと辺りに魔力が満ちる

「まさか・・・隠していたと言うのか・・・」

「おっさんみたいな人に利用されないためにな」

ふはははは。まさか・・・こんな事が

「おっさん、覚悟は良いな？」

落ちこぼれは木刀を私に向ける

「ククククク」

「何を笑ってんだ？」

遅すぎたんだよお前は

「儀式はもう完成したは！！」

「何！！」

ふはははは。見えるだろう私の後の闇が

「これで、私の勝ちだ！」

私がそう言った瞬間

（あ、死亡フラグ）

幻聴が聞こえ、私は闇に飲み込まれた

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

（あ、死亡フラグ）

神がそう呟いた瞬間、おっさんの後の闇がおっさんに覆い被さった

「な、なんだ！暗い！此処は何処だアァァァァァ」

闇からおっさんの声が聞こえる、俺は木乃香ちゃんを抱えて距離をとった

「アアアアァァァァァァァァァ」

闇からはおっさんの叫びが聞こえ、数分すると止んだ

やがて闇は姿を変えた

（・・・これは予想外だな・・・）

神も予想外だったらしい

闇は幼女に姿を変えた・・・だが威圧感は凄まじい

「・・・」

幼女は此方に近づいて来る。大方、魔力の供給源の木乃香ちゃんを喰う気だろう

どうするか・・・さっき封印を解いたから親父に場所が伝わっただろうが・・・

いくら親父でもこいつには勝てないよな・・・多分

「・・・」

ヤバイ、どうする・・・今の俺はまた封印されてて反撃しようにも一瞬で片付けられるだろう

「・・・」

いちかばちかだが、方法はこれしか無いよな・・・

「・・・」

幼女が俺の前に来た・・・よし

「・・・そ「嬢ちゃん、俺と取引しないか?」・・・?」

さ~て死亡フラグを叩き折りますか

フラグは叩き折るもの！（後書き）

亮「・・・」

@「どうした？」

亮「死亡フラグを俺は折る！！」

@「うは、どうやって折る気だ？」

亮「それは・・・」

@「それは？」

亮「次回を期待してくれ！！」

@「まあ、ろくでもない物だろうけどな」

亮「ろくでもなくない！！」

@「うは（笑）」

亮「にぱ～」

@「うほ。いい男」

亮「あーーー！！」

@・亮「「俺達、何やってんだろ・・・」」

感想待って折ります（笑）

良薬は苦し。なら、良い料理は・・・苦くはないな（前書き）

@「さあ、やってきましたよ」

亮「やってきましたね」

@「さあ、亮は生き残る事ができるのか！そして、取引は成立したのか！！」

亮「しなきゃ死ぬだけだけどな」

@「Ｇｏｏｄ　ｌｕｃｋ」

亮「幸運をじゃねーーー！！」

良薬は苦し。なら、良い料理は・・・苦くはないな

おす。皆様、お元気でお過ごしでしょうか？

現在、俺は家におります

あの後、木乃香ちゃんの記憶処理やらおっさんの同胞の殲滅など色々やっていたようですが

俺の死闘はこれから始まります

（おいおい、速くしなくて良いのか？嬢ちゃんが待ちくたびれてるぞｗｗｗ）

では逝ってきます

皆様は俺の無事でも祈っていて下さい

ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

我がこの世に呼び出されたのは何時ぶりだろうか・・・

前呼び出されたのは戦乱の時代だったか・・・まあいい

久しぶりに見た人間。その人間がまさか我に臆さずあんな事を言って来るとはな・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「嬢ちゃん、俺と取引しないか？」

何を言っているんだ？この男は・・・

「取引とは互いの利益が一致して初めて成立するものだ。貴様は我に何を提示する？」

男は我の目をじっと見つめる。男の片目は透き通った水色をしていた

「俺は君に最高の料理を提供しよう」

「ほう」

我はこれでも暴食と呼ばれた身だ

「貴様に我を満足させられる料理が作れると？
どんな物を食べても満足出来ずあらゆる物を食べ続け暴食と呼ばれる様になった我を」

男は笑みを崩さず言う

「これでも最高の料理人を目指している身だ。君が満足できるような最高の料理を提供しよう」

面白い！！

「我が貴様の料理に満足したら、我は貴様を殺さない。だが、満足出来なかった場合は・・・」

「それじゃあ、場所を移動しよう。流石に此処じゃ料理も出来ないし、材料もない」

そう言うと男は腕に抱えた女を抱え直し歩き出した

・・・我を満足させる料理か

・・・そんな物を作れるなら

・・・我はこの身を捧げよう

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

待たされること半刻。男は我にどんな物が食いたいと聞いてきた

我はなんでも構わないのだが・・・

「辛いもの」

舌を刺激できる物が目覚めには良いだろう

「了解した」

そう言い、男は台所に入っていった・・・さて

「いい加減出てきたらどうだ？」

（あらら。ばれてたか）

ふむ。神といったところか？

「何故、あの男を見ているのだ？」

（何故かって言われてもね～・・・私用？）

我に聞かれても分からん

「ふむ。何故貴様の様な存在があの男だけを見ているのか・・・」

あの男には何かあるのか？

「あの男は貴様の家系か何かか？」

（さてね、それは答えられないね～）

ふむ。口を割る気はないか・・・

（そう言う君もなんでこんなとこに居るんだい？
あの術式じゃ君の様な高位な存在は呼び出せないはずだよ・・・魔王さん）

「ふ。暇つぶしだ」

（ふ～。暇つぶしで俺の世界に入って来ないで欲しいね）

ふん。別にいいだろう

（まぁ。別にいいけどね）

む。料理が出来たのか？

男は皿を持って此方に来た

見るに・・・スープか

「これは俺が考えた最初のポイズンクッキング。マグマスープだ」

真っ赤に染まった毒々しいスープだった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

（うは！まさかのポイズンクッキング！殺す気満々じゃね～か（笑））

何言ってんだ。俺が作れば毒さえも調味料と化す。それがこのポイズンクッキングだ！！

「ほう。毒入りと公言するか・・・こんな毒程度で我を殺せるとでも？」

「ベースはトマトを中心としたトマトスープだ。

普通と違うのは、調味料としてカエンタケやらニトロダケなどを入

れて辛味を格段に強くした」

実際、辛いもの好きなら止まらなくなるぞ

「ふむ。そこまで言うなら戴こうか」

幼女がスープを口に入れる

「・・・」

・・・無言。ただ幼女は手を動かしスープを口に入れる

「・・・」

そして、最後の一滴まで飲み干した

「・・・ふ～」

幼女は一息吐くと爆発した

「うまーーーーーーーーーーーい！！！」

・・・目から光って出るものだっけ？後、口から

（ミスター味っ子来たーー！！）

騒ぐな神よそして幼女よ

「料理長を呼べ！！」

残念、そんな者は居ない

「・・・すまない。はしゃぎ過ぎた」

「で・・・結果は?」

幼女は一息吐くと言う

「美味しかった。満足だ」

その言葉を聞くと俺は眠気に負け、後に倒れた

倒れる寸前に

(今日はよく頑張ったな。まぁ疲れたろゆっくり休め)

神らしくない優しい声が聞こえた

良薬は苦し。なら、良い料理は・・・苦くはないな（後書き）

@「と言うことで今回は終わりだ」

亮「・・・」

@「どうした？」

亮「なんで今回はこんなに優しいんだ？」

@「まあ、やりすぎた感があるし。一応神もキャラの一人だって皆さんに分ってもらうため」

亮「ふ～ん」

@「まあそれより。今回は亮の封印について詳しく説明しようと思う」

亮「そういや、本文で軽く説明したぐらいだからな・・・」

@「で、まあ能力なんだけど、対象の魔力と気の封印」

亮「まあ、それは封印だからな」

@「まあ、気は少しは使えるぞ。ただし軽く出しただけで枯渇する仕様だがな」

亮「だから気は使わないし使えないな」

@「で、この封印の怖い所は何度でも再生するって事だ」

亮「そういやどうやって再生してるんだ？」

@「実は対象の魔力を使って施す呪術なんだあれ。まず、ネックレスに血で対象とラインを繋ぐ、そしたらネックレスに施された呪術発動。対象の魔力を使って何度でも再生する」

亮「ん？んじゃ、なんで俺は簡単に破壊できるんだ？」

@「それは、亮専用の封印で一回だけなら破壊可能になってる仕様だ」

亮「なる・・・んじゃ母さんが本気をだしたら？」

@「お前一生魔力を使えなくなる（笑）しかも、この封印はナギでも解くのは難しい（笑）」

亮「難しい？ならできなくはないのか？」

@「まあな（笑）でも、仲間が居なきゃ無理だぞ。全魔力放出後、アル辺りに術式破壊してもらうって感じにな」

亮「英雄なら力技でどうにかなんじゃねーの？」

@「魔力で術式を破壊しようとする→対象の魔力で即座に再生→魔力（ｒｙの無限ループ（笑）で対象の魔力が尽きる」

亮「んじゃ気で・・・」

@「気も吸収可能（笑）」

亮「・・・うん。無理だ」

@「もしかしたら、お前の母さんが最強かもな（笑）」

亮「それガチじゃね？」

始まりと終わり（前書き）

@「今回はまあ、原作に向かって旅立とうって回だな」

亮「てか、始まりは分かるが終わりってなんだ？」

@「まあ、最後まで読んでくれたら分かるよ」

亮「ふ～ん。で、原作には次回で行くのか？」

@「そのつもりだ。まあ、原作より少し前にお前は麻帆良入りさせる予定だがな」

亮「なる」

@「ついでに、木乃香と刹那は原作と違って麻帆良に一緒に行く事になってる」

亮「何故に？」

@「刹那がハーフだと気づく→木乃香に教える→見せて→見せる→天使みたいや→仲良好みたいな」

亮「適当すぎね？」

@「まあ、いいじゃん。お前も原作みたいな木乃香達を見たくないだろ？」

亮「・・・まあな」

@「それじゃどうぞ←」

始まりと終わり

どうもです

気付いたら布団の中に居ました

・・・これであの名言を言える

「知って（はいはいバロスバロス）神！！」

何故俺の邪魔をする！！

（うは。お前は今の状況を見てから物言えや（笑））

今の状況？・・・腕が動かん

（マジリア充死ねや（怒））

右には木乃香ちゃん、左には刹那ちゃんか・・・

（両手に花とかマジ死んでくれ）

おいおい、この子達はまだ小学生だぞ

なんで神はそんなに怒っているんだ？

（うは。将来美人になる子二人にフラグ建てといてそれかよ（笑））

まぁ二人とも確かに美人になるな・・・で、なんで二人に死亡フラ

グが建ってんだ！

（もういいや。頑張れ）

あ、待て神！なんでフラグが建ったか教えろ！俺がそんなフラグ、叩き折る！

（フラグが死亡以外あるのを知らない奴に教えるか）

神！・・・ん？死亡以外にフラグってあんの？

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

その後、木乃香ちゃん達が起きて軽く泣かれた

なんでも一週間も寝てたようだ

あ、後。木乃香ちゃんは出来事を夢の事だと記憶処理されたらしい

・・・そろそろ教えても良いんじゃないのかな～？

「木乃香を助けていただき本当に有難う御座います」

で、今は詠春さんの所に来ている

「いえ、俺が好きでやった事ですから」

「あれから、警備を見直しましたからもうこの様な事は無いとは思

いますが・・・」

絶対ではないと

「おじさんから木乃香をあちらの小等部に転入させないかと言われました」

「それで・・・了承したんですか？」

詠春さんは暗い顔でうなずく

「無いとは言っても絶対ではありません。ちゃんと統率できるまで木乃香には東に行ってもらいます」

それを俺に話すと言うことは・・・

「前に断られましたが、もう一度頼みます。木乃香の護衛をしてくれませんか？」

「・・・すみません」

「・・・そうですか」

それに、と俺は付け足す

「木乃香ちゃんには刹那ちゃんが居るじゃないですか」

刹那ちゃんも普通に強くなってるしな

今回は相手が悪かった

「まぁ確かにそうですね」

「それに、木乃香ちゃん達が危険になったら俺が直ぐさま駆けつけますから」

それは心強いと詠春さんが言い。部屋に笑いが溢れた

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「りょー兄は付いてきてくれへんの？」

「ごめんな」

俺にもやりたい事があるからな

「何時か行くからさ」

だからそんなに泣きそうな顔しないでくれ

「絶対やで」

「分かった」

そして、俺は刹那ちゃんだけに聞こえるよう小声で話す

「木乃香ちゃんを頼んだぞ」

「・・・分かっています。絶対にもうあの時の様にはさせはしません」

なんだか気負い過ぎの様な気がするが・・・大丈夫かな～？

「んじゃ。そんな二人にプレゼントだ」

俺は二人に箱を渡す

「開けてもええ？」

「勿論」

二人が箱を開けると驚いた顔をする

「りょー兄と同じや！」

「綺麗・・・」

まぁ俺と同じネックレスだ。母さんに作り方を教わって徹夜して作った

・・・そういや、ネックレスの作り方を教わってる時、母さんが妙に嬉しそうだったけど何かあったのか？

「有難うな～りょー兄」

「あ、有難う御座います」

「気にするな」

実はこのネックレスには木乃香ちゃん達が危険になったら俺が強制的に転移される仕組みになっている

（うは。身内には優しいなホント）

もし、世界中の人間と身内、どちらを助けるかって聞かれたら俺は身内をとるぞ

（うは。良いね、それはお前らしい）

だろ？

「りょー兄」

「ん？なんだ」

「目～瞑ってくれへん？」

ん？なんかあるのか？

「これで良いか？」

「後しゃがんでや～」

言われて、俺は腰を屈める

頬に温かいものが触れる

「こ、このちゃん！」

「ほら、せっちゃんも！」

今度は反対の頬に・・・

「・・・もう、良いか？」

「ええよ」

「あう～」

二人とも顔が赤い

「ありがとうな」

「お返しや♪」

「あう～」

あ。刹那ちゃんが倒れた

「「ぷ、ははははは」」

起きた後、刹那ちゃんは俺の顔を見たら逃げる様に走っていった・・・てか逃げた

（リア充は死んだ方が世のためになるよな・・・）

うは。死ねるかよ！

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「それでは行ってきます」

「体に気お付けてね」

「死ぬなよ」

「分かってるよ」

俺は料理の腕を上げるためにこれから世界中を旅する事にした

「それじゃ」

「行ってらっしゃい」

「何時でも帰ってこい」

・・・ああ。やっぱりここが俺の家なんだな

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

家を出て少し歩くと幼女が居た

「帰ってなかったのか」

「我は貴様に付いて行く事にした」

・・・は？

（うは。要するにお前は気に入られたんだよ）

・・・マジカ

「そういや、君の名前ってなんだ？」

少し考えた後、幼女は言う

「貴様が考えてくれ」

おーケー適当だな・・・

「色（しき）で良いか？」

「・・・構わない」

まぁ構わないならいいか・・・

「んじゃ、行こうか」

「ふむ」

歩き出そうとした時

（んじゃ、俺もちょいとばかし旅行に行ってくるは（笑））

とか、神が言いだした

てか、神も旅行ってするんだな・・・

（まあな（笑）。んじゃ二人で楽しんで旅してこい）

オーケー。楽しんでくるは

（じゃな～）

俺と色は歩きだした

（・・・さて、俺も行くか）

ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

俺は断罪者

神に造られた神造人間だ

造られた理由は転生と言う愚行を犯した神と人間の排除

この世界の神もまたその愚行を犯したようだな・・・

『どもども。こんにちは断罪者さん』

まさか、自分から来るとはな

「神が自らお出迎えとはな」

声の方を向くとそこには見た目２０代の青年がいた

『はっはっは。俺は優しいからな』

「・・・お前、本当に神か？」

見たところ神の威厳が感じられないが・・・

「ん？神だよ一応。この世界の」

なら、探す手間が省かれた

『ん？』

神の四肢を鎖で拘束し槍を放つ

「ふん！」

『ぐ！！』

・・・始末完了。後は人間を片付ければ此処での任務は終わる

『おいおい酷いな。いきなり殺すとか（笑）』

・・・可笑しい。俺が放った槍は不死殺しも付加されている。例え神でも再生は不可能な筈だ

「何故生きている？」

『そりゃ。此処は俺の世界だからな～』

・・・成る程。世界そのものが奴の存在と言う事か

ならば・・・

「我、創造神の力を借りて今新たに世界を此処に造らん」

『はい？』

ふ。遅すぎだ

「天地創造」

世界を造り俺の色に染める

『おいおい。マジかよ』

これで貴様の逃げ道は無くなった

「さあ、死ね」

先ずは手足を吹き飛ばす

『うは』

その次に頭を吹き飛ばし心臓に槍を突き刺す

「仕上げだ！」

俺が創造された時貰った能力は一つ。それは空想の産物を現実に変える能力

「約束された勝利の剣（エクスカリバー）！！」

・・・塵すらも残らないか

よし、後は人間を『うは』な・・・に

『ん？どうした？そんな変な顔して？』

何故だ！何故こいつはここに居る！あたかも最初からそこに在った様に！！

『ん～まぁ考え方は悪くなかったんだけどな』

くそ！

「突き穿つ死翔の槍（ゲイボルグ）！」

槍が奴を貫くが、いつの間にか槍も奴の傷も無くなっている

『まぁ。どんなに君が頑張って俺を傷つけた所で、それはただの妄想だからね』

嘘だ！死ね！

「鉄の処女（アイアンメイデン）！」

鉄の処女が奴を喰らう

「神の鉄槌（トールハンマー）！」

そしてそれを神の鉄槌（トールハンマー）で叩き潰す

・・・が、そこには無傷な奴が立っている

『な、言っただろ。君じゃ俺を殺せないし、俺の世界を覆す事もできない』

奴が指を鳴らすと俺の世界は瞬く間に破壊された

『君は気付いていないと思うけど、此処は俺の世界（ものがたり）だ』

奴は語る

『この世界（ものがたり）に入った時点で君は俺の操り人形（キャラクター）でしかない。君の人生（ものがたり）はもう既に決まってたんだ』

奴は本を出し、それを俺に投げる

本にはｄｅａｄ　ｅｎｄと書かれていた

『君の人生（ものがたり）は此処で終りだ』

奴が指を鳴らすと俺の回りが歪む

何が起こると奴の顔を見ると

『最後は派手に逝きたいよな？（笑）』

奴の顔は最高に輝いていた

『超新星爆発（ビッグバン）』

俺の意識は光に沈んでいった・・・最後に聞いた奴の言葉、

『暇だったら、次は君の物語を書いてやるよ』と言う言葉を考えながら

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

イヤ～、キツかったな

まさか、あそこまで反撃されるとは・・・いったい何回死んだだろうか

まあ俺は神って言うより”書き手”って感じだからね

俺がいる限り俺の世界(ものがたり)は壊れたりしないし、世界(ものがたり)がある限り俺は存在する

『おっとヤバイ。速く新しい話を更新しないと』

皆さんが待ってくれて・・・る・・・から

・・・な

「・・・」

「どうした?」

「イヤ。何でも無い」

なんだ・・・今の感覚は・・・

「なら・・・何故涙を流しているんだ?」

「へ?!」

顔に手を当てると確かに俺は泣いていた

「すまん。俺にも良く分からない」

ただ・・・

「何か大切なモノを遠くに忘れてしまった」

そんな感じがしたんだ・・・

始まりと終わり（後書き）

亮「・・・」

色「・・・」

亮「ん？」

色「どうした？」

亮「なんで色が居んの？」

色「作者から頼まれた」

亮「・・・そうか」

色「どうした？」

亮「いや、旅行ってどこに行ったんだろうなと思ってさ」

色「・・・そうか」

亮「で、その紙は作者が？」

色「ああ。なんでも、私に言って欲しいらしい」

亮「どれどれ・・・ぶ！」

色「どうした？」

亮「と、とりあえず。言ってみろ。ぷぷぷ」

色「?分かった
感想待ってます♪何時でも書きに来てね。お兄ちゃん♪
これでいいか?」

亮「もう・・・無理だははははははははははは。げほっ、げほっ」

色「大丈夫か?」

亮「作者ナイス」

修行風景はキンクリされました（前書き）

亮「・・・」

色「・・・」

亮「・・・で、今回も作者は来ないのか」

色「『うおーー！！テストが近い！！勉強してない！！』って嘆いていたぞ」

亮「うん。ばかだ」

色「まあそう言うな。あいつも頑張って生きている・・・多分」

亮「頑張れ作者。超頑張れ」

修行風景はキンクリされました

お久しぶりです皆様

へ？あれから何年経ったかって？

実はあれから三年経ちました！

一年は日本を回り

半月は中国で本場の中華を学び

一年半はヨーロッパに渡ってイタリア料理やイギリス料理などの洋食を学びました

で、今は料理介入をしております

そのお陰で名もけっこう売れております

・・・裏の世界で

へ？料理介入とは何ぞやと？・・・まぁ料理で紛争に介入するだけです

今、けっこう流行ってるんですよ・・・多分

で、神が三年間音沙汰なしです

「亮」

あ！そういえば、色が名前で呼んでくれるようになりました
苦節、二年・・・長かったな～
「本当に行くのか？」
ついでに俺は今、紛争地帯のど真ん中に居ます
「当たり前だろ？じゃなきゃ此処まで来ないだろ」
で、今は片方の勢力のリーダーの所に向かっています
「我が介入すれば直ぐに終わるぞ」
確かに色が介入したら直ぐに終わるだろうな・・・被害が凄いだろうがな
「それじゃあ意味ないだろ・・・」
俺がするのは交渉。ただ戦いの虚しさを知ってもらうだけだ
「そうか・・・なら我は手出しせん」
「聞き分けの言い子は好きだぜ♪」
ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

で、来ましたよ。リーダーの前に

「貴様が”戦場料理人”か？」

「はい、そうです」

何回か介入してたらそう言われる様になった

「ふん。料理で紛争を止めるなど・・・」

「なら、料理を食べてみませんか？」

さあ。料理（せんとう）の始まりだ！！

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

まず何を作るかだ

半端な料理じゃ相手の心は打てないからな・・・ならあえて意外性で

「どうぞ」

「なんだ・・・これは？」

俺が出したのは・・・

「米です」

そう、日本の米。ちゃんと炊いてあるぞ

「ククク。こんな物で俺の心を打てると思っているのか？」

「どうぞ召し上がり下さい」

御託は食った後言え

「良いだろう！」

・・・無言。俺の渾身の飯を食べると大体の奴は無言になる

「・・・なんだと」

・・・来たか

「こんなの料理とは言えん。なのに・・・」

食い終わると心が叫びをあげ、絶対に言う言葉

「うまーーーーーーーーーーーーーーい！」

・・・勝った！

こうなれば俺の勝ちだ

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

使ったのは普通の米

だが、俺の道具を上手く操る能力と料理の才能が合わさって普通では無くなる

それに昔風に釜炊きをしてみた

お焦げって・・・美味いよな～

「ありがとう、直ぐに此方は停戦命令を出しておく・・・店を出すようなら連絡をしてくれ」

「喜んで」

こうやって俺は紛争を止める一方、上客を増やしてるってわけだ

さて・・・もう片方の所にも行くか

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

ふ～。疲れた

紛争を止めるのにも慣れてきたは良いが・・・

「亮、足りないぞ」

色の食う量には慣れそうにないな・・・

なんだよ、一食十五人分じゃ足りないって

「うまうま」

紛争を止めて貰った報酬金もこいつの飯代に消えてくしな～・・・

ん？慈善事業じゃないのかって？一応仕事だよ

だけど、戦いの虚しさを知ってもらいたいためにやってるから、まぁついでって感じだけど

「ん・・・満足」

は～。やっと満足したか・・・今日は二十二人分か

まったく、金がいくら有っても足りない

「どうした亮？」

こいつは～

「お前の飯代のせいで今日の宿代が無くなった」

てか、そんな宿に泊まる余裕がねえ

「ふむ。それならばちょうど良い。魔法世界に行ってみぬか？」

「魔法世界？」

なんでそんな所に行きたがるんだ？

「あちらの竜の肉が中々美味なんでな、我も時々食べに行くんだ」

それに沢山の見た事が無い食材があるぞと色は付け足す

・・・竜の肉・・・料理して～てか、レシピに入れて～

「良し。行こうか」

「うむ」

と言うことで魔法世界に行ってきます

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

色と俺は無事、関門を抜けて竜が居ると言われている山に来ている

へ？どうやって抜けて来たかって？

ふふふ。人間、聞かない方が良いこともあるよ・・・

「ギャャャーーーー！！」

で・・・これって竜か？

聞いていたより二回りほど大きいんだが

「ふむ。これは珍しい、古龍に出会えるとはな」

「なんだ？古龍って？」

「五百年以上生きている竜の事をそう呼ぶんだ」

ふ～ん・・・

「で、味は？」

「中々美味いぞ」

なら、答えは一つ！

「覚悟！！」

「ギャ！！」

戦闘（ちょうり）開始！

ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

私達は今、山で暴れている古龍の討伐を命令されて山に入った

古龍は危険な種とそうでない種があるが今回は前者だ

古龍がいくら強いといってもこの大人数では勝てないだろ・・・

「報告します！」

「む。で、古龍は発見できたか？」

「は！発見は出来ました・・・しかし」

む、何かあったのか？

「既に討伐された後で、それを二人の男女が食べております」

は？どういう事だ？

「・・・とりあえず、その男女に会おう」

「は！」

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

そこには少女と青年が肉を焼いていた。後には討伐された古龍

「♪～～～♪～～～～♪」

青年が肉を焼き少女がそれを待っている

「ちょっとはな「ウルトラ上手に焼けましたーー！」ちょっと良いか？」

「ん？団体さん？アンタ達も竜を食べに来たのか？」

なんなんだこの青年は・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

気付いたら大人数の人に囲まれてた

「聞こう。貴方がこの竜を討伐したのか」

とリーダーっぽい人が古龍を指して言う

「まぁそうですね・・・駄目でしたか？」

「嫌、有難い。お陰で誰一人欠けず任務が終われた」

それは良かったですね

ん？

「亮。おかわり」

オーケー

「すいません。妹が五月蝿いので」

「我は亮の妹じゃな」

まあまあ。そうゆう設定にしてあんだから、異議を立てるな

「む～」

ほいほい。新しい肉をやるから黙ってろ

そういや、この肉焼き機どこから持ってきたんだ?

「うまうま」

さて・・・

「用はそれだけですか?」

そんな訳ないよな・・・

ああ、嫌な予感しかしね～

修行風景はキンクリされました（後書き）

亮「・・・」

@「・・・」

亮「いくらのりと勢いだけで書いてるにしても急展開過ぎるだろ！！」

@「しょうがないだろ！！こちとら、通学の電車の中で執筆してんだから！！」

亮「色々と問題があるだろ！！」

@「どこに？」

亮「読者さんの期待」

@「ｏｒｚそれは考えていなかった・・・てか、原作に早く行きたいのになんか変な方向に話が行ってしまう」

亮「それは作者に文才が無いだけだ」

@「そうか！！やっぱり俺には文才が無いのか！！」

亮「嬉しそうに言うな！！」

@「この頃テンションが可笑しい（笑）（笑）」

亮「とりあえず読者様がたに謝れ」

@「どうも、すみませんでした（キリ」

亮「響ｗｗｗ」

@「どうも、すみませんでした（笑）」

亮「もういいわ。・・・こんな作者ですが、生暖かい目で見守っていて下さい」

@「あ、テスト一週間きってた（笑）」

亮「現実逃避すんなよ～」

主人公の紹介2回目！（前書き）

亮「へ？またやんの？」

@「色の紹介もしたいし、お前が世界を旅して身に付いたのも紹介したいからな」

亮「で、実際のところは？」

@「のりだ」

亮「何時もの作者でした」

@「言い忘れてましたが、ネタばれを含む可能性もあります」

主人公の紹介2回目！

@「とゆうことで、まずはお前の紹介から」

亮「実際あんま変わってないだろ？」

@「いや、そうでもないんだこれが・・・まあどうぞ←」

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

名前：青木　亮

年齢：２０（原作開始は２２の予定）

魔力：木乃香以上

気：ラカン以上

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

亮「変わってなくね？」

@「まあ、少し違うんだよ。だが本番はこれからだ！次は才能←」

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

料理の才能→至高の料理を作る才能

ひらめきの才能→ひらめきの才能ａｎｄ避ける才能

道具を上手く操る才能→道具の力を最大限に引き出す才能

＊追加←

リミッターの解除

妖刀『紅桜』

真理の瞳

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

@「んな感じになった」

亮「ほうほう・・・でどう違うんだ?」

@「まず至高の料理とは、食べた者にほぼ確実に美味いと言わせる料理の事だ」

亮「ああ、俺が料理介入に使ってる料理の事か」

@「この料理を食べると戦意の喪失の他、殺意や悪意などの負の要素が吹っ飛ばされる」

亮「おう。まるで、精神操作じゃないか・・・」

@「まあ、例外もあるがな。舌の肥えた美食家には効果が薄いんだ」

亮「へ～。で、次は？」

@「ひらめきの才能が普通とスパロボ風に分かれた。これによって避けられる率が上昇した。ってか、避ける事が不可能な攻撃も避けれるようになった」

亮「うは。それ最強じゃね？」

@「嫌、欠点はある。その回避不可の攻撃を避けると大量の体力が持ってかれて動けなくなる」

亮「まあ、死なないだけましじゃね？」

@「まあな。で、次の才能だが・・・まあ、強化されただけだ」

亮「要するに、中の中から中の上になったって事か？」

@「まあ、そう言う事だ。まあ、これも凄い事だがな・普通は才能の進化なんて無理」

亮「んじゃ、何故俺はできたんだ？」

@「まあ、それは秘密だ。で次は才能じゃないが・・・リミッターの解除だ」

亮「封印の解除って意味じゃないのか？」

@「違う。これは自分の体を道具と思い込んで無理やり体のリミッターを外すって事だ。要するに限界突破」

亮「ああ。俺が鬼を蹴散らす時に使った奴か」

@「あの時使ってたのは２００％。今お前は３００％まで出せる」

亮「だけど普通そんな力出したら体が持たなくね？」

@「ロリ神に感謝しろ。じゃなきゃお前は修行時点で体が吹っ飛んでいる」

亮「要するに、無意識に使っていたわけか・・・オーケー。それ以上言うな。体の振るえが止まらない」

@「んじゃ次だな。・・・まあお前の武器だ」

亮「おう。父さん母さん、貴方は息子になんて物を渡しているんですか・・・」

@「てか、妖刀って知らなかったんか？」

亮「ほとんど使っていないからな（笑）」

@「（妖刀なむ）で、こいつの能力は吸収」

亮「どゆこと？」

@「なんでも吸収します（笑）」

亮「魔力は？」

@「いけます」

亮「気は？」

@「いけます」

亮「衝撃は？」

@「いけます」

亮「・・・強くね？」

@「それに、吸収したものは溜めて放てます」

亮「・・・今どんだけ溜まってるんだ？」

@「・・・Ｆ１マシーンが突撃してきた位かな（笑）」

亮「ｏｋ。俺はもうこいつを使わん」

@「懸命な判断だ。で、最後に真理の瞳。まあ、これは誰しもが瞳の裏に持っているものだ」

亮「？別に特別じゃないってことか？」

@「まあ、色眼鏡を外したって事だ。本物と偽物の判別から食材の良し悪しまで分かる」

亮「てか、大体はそっちだな（笑）」

@「まあ、こんなものかな・・・次は色の方にいってみよう」

亮「ゴーゴー」

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

名前：色

年齢：不明

魔力：不明

気：不明

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

亮「分かってない事ばっかだな」

@「まあ、魔力量とかは関係ないからな色にとって。んじゃ次能力」

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

影を操る能力

喰らう能力

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

亮「影ってあの影か？」

@「ああ。自分の影だけじゃなく全部の影が操れるからたちが悪い」

亮「喰らうも名の通りか？」

@「まあな。なお喰われたら最後、戻ってこれません（笑）」

亮「影の能力は俺の影を倉庫にしてもらったからわかるが喰らうは知らんかった」

@「影から喰えるからな・・・」

亮「勝ち目無しですね俺には（笑）」

@「うん。まあ、この世界最強だ。ついでだが、概念も喰えるぞ」

亮「ｏｈ」

@「ここから先は俺が考えたよくわからなさそうな技の数々だ。まあ、使うかどうかは亮しだい、俺しだいだ」

亮「なるべくなら使わない事を願う」

咸卦砲：気と魔力の合成をわざと失敗して体外に放出する技。手から出す。威力は・・・まあ、地面は簡単に陥没するんじゃないでしょうか？

五行属咸卦法：咸卦法の強化バージョン。右手に魔力、左手に気ではなく、右手の指に魔力の五属性、左手の指に気の五行を溜めて合成する技。気の五行は普通、土・火・木・水・金ですが、魔力の五属性に合わせるため、土・火・風・水・雷としています。咸卦法よりも二段階ほど強化され、土火風水雷の魔法、気は無力化される

@「まあ、少ないがこんなとこ。あんまし、亮に戦わせる事はしないと思うけどな」

亮「まあ、作者ののりと勢いで書かれてるから保障は無い」

主人公の紹介2回目！（後書き）

@「今回は亮の変わりに色が来たぞ」

色「それで、何故我を呼んだ？」

@「之読んで♪」

色「・・・べ、別に感想くれなんて考えてないんだから勘違いしないでよね！そ、それは確かに欲しい事は欲しいけど・・・あ～もう。良いから感想を書きなさい！！・・・これで良い？」

@「と、ゆうことで今回はツンデレ風です。それではまた」

色「・・・ばいばい」

なんやかんやで巻き込まれる（前書き）

@「そういえば今まで言ってなかったが。俺はネギま！の記憶はほとんど忘れている」

亮「なん・・・だと・・・ならばどうやって・・・」

@「のりと勢い、そして根性があればなんでもできる！」

亮「んじゃやってみせろよ」

@「・・・さーせんした（泣）」

亮「諦めんなよ！！」

なんやかんやで巻き込まれる

ういっす皆さん

今、俺は古都に来ております

・・・どうしてこうなった？

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「聞こう。君達は旧世界から来たのかな？」

「ええまぁ、はい」

「実はここ数日に不法侵入した輩が居るみたいなんだ」

あ、それ俺達だ

「君達ではないよね？」

「はは、まさか。不法侵入した人がこんな所で竜を食べてる訳が無いでしょ？」

「ふむ。それもそうだな・・・」

良し、そのまま信用してくれ・・・

「なら、下山の手伝いをしてくれないか？古龍を討伐した実力なら構わないだろ？」

「イヤ～、それだけ人が居れば大丈夫じゃないですか？」

うわ～。この人、完璧に疑ってるは（笑）

「嫌、旧世界では備えあれば憂いなしと言う言葉があるそうじゃないか」

ぐ、そうきたか。此処で断ったら怪しいよな・・・

「分かりましたよ。下山の手伝い、させてもらいます」

とりあえず、下山を終えたら即分かれよう

「うむ。助かった」

は～。やな予感しかしね～な・・・

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

てな感じで俺は下山の手伝いをしただけの筈だ・・・何故古都に居る？

「亮？」

「イヤ、なんで俺達は古都に居るんだ？」

まさかのキンクリですか？

「亮が此処に来たいと言い出した」

へ？俺が？・・・記憶ね～

「青木殿」

「は、はい！」

先程の隊の隊長が話かけてきた・・・どうする俺！どうするよ！

（1．逃げる
2．白状する
3．投げ槍になる
4．諦めって大切だよね（笑））

くそ！ライフカードにろくな選択肢が無い！

・・・ん？今、何処からカードが出てきた？

「すまなかった！貴方達の事を疑ってしまい」

「えーっと・・・どうかしたんですか？」

「実は・・・不法侵入した犯人はもう捕まっていたんだ」

・・・あれ？んじゃ、あの作戦は成功してたのか？

「そうでしたか」

「本当にすまなかった」

そう言い、隊長は何処かに行ってしまった

・・・それより、さっきのカードは・・・

（うは（笑）。久しぶり）

やはり貴方（かみ）か！

（うんうん。中々面白い事してんじゃんか）

それより・・・旅は終わったのか？

（ん？・・・ああ、終わったよ）

で、何故今頃戻ってきたし？

（ククク。また予言だよ、主人公。今度は面白い事が起こるよ）

主人公？・・・まぁいいや

で、面白い事とは？

（まぁ起きたら分かるよ（笑））

いったい何が起こるってゆうんだ・・・

「亮、これ・・・」

ん?これはさっき配られてた紙だな・・・

「なになに。ゴールデンミート坏開催!強者求む!金色に輝く肉が君達を待っている!」

な~にこれ?

「ゴールデンミート・・・１００年に一度産まれるか分からない金火竜の肉・・・我も食べた回数が三桁いっていない珍しい肉」

へ~そりゃまた珍しい肉だな・・・でも手にいれるには大会で勝たなきゃいけないと・・・

うん、それ無理♪てか嫌

「亮。出て」

「Ｗｈｙ?」

何故ですか?

「我が出ても良いけど・・・」

オーケー。出なきゃ被害が他の人に出るってわけですね分かります

「了解。まぁやるだけやってみるよ」

まあ、色が食いたそうにしてるしな・・・ん？これが神が言ってた面白い事か？

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

三年前と違い封印を解放しなくてもそこそこ戦える様になったが・・・

「逃げるんじゃないでごわす！」

「そう言われて止まる奴が居るか！」

流石に一筋縄にはいかない様だ

「うんむ～どすこい！」

てか、あんた旧世界から来たのかい？

「って危ねえ！」

「むむ。気や魔力が無いのに良くそこまで動けるでごわすな～」

張り手で衝撃波を出せるあんたも十分凄いがな・・・

「けっこう修羅場潜ってるんでね！」

紛争地帯で囲まれて銃を乱射された時は死んだと思ったけどな

（うは。前より良い動きになったじゃないか（笑））

能力を前より上手く使える様になったからな

さて・・・やるか

「食らえ！」

口の中にシュートイン！

「ムグ！」

・・・成功

「ムグムグ・・・んまーーーい！」

良し！これで戦意喪失してくれれば・・・

あ、ついでに投げ入れたのは先程狩った古龍の肉な

「ク、美味いでごわす・・・けどゴールデンミートを食べるために負けられないのでごわす！」

しまった・・・この人、美食家か！

こうゆう人にはあまりしたくはなかったんだがな～・・・

「それ！」

「ムグ！んまーーーい！」

そして・・・

「天国と地獄（ゴートゥザヘブン）！」

「ごわす！」

・・・戦いは虚しい

（叫んでる相手にアッパーとか外道だな・・・）

ああ、虚しい

（無視ですか（笑））

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

なんやかんやで決勝まで来たな・・・美食家が多くて困った

最後の相手は・・・

「気お付けて亮。敵は英雄と呼ばれた奴」

英雄？んじゃ詠春さんレベルかな？・・・キツいな

「オーケー。んじゃ行ってくる」

願わくば美食家で無いことを祈る

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

珍しい肉が出るって聞いたから遊びで出た大会だったが・・・

「勝者。ＡＯＫＩ　亮！」

なんだいなんだい、強い奴が居るじゃねえか。しかも気や魔力を使ってないであの強さ！

決勝が楽しみだな

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「決勝戦を始めます！東方。気無し、魔力無し！だが強さは本物だ！料理で敵を粉砕する！ＡＯＫＩ　亮！」

なんで姓が英語っぽくなってんだよ・・・

「続いて、なんと！これまでの試合を片腕のみで勝ち上がってきたこの男！西方。ザック・ラカン！」

どう考えても偽名ですありがとう御座いました

・・・あ～詠春さんに聞いた事があんな・・・ジャック・ラカン。詠春さんと同じ紅の翼にいて、確か筋肉馬鹿でバグキャラだったっけ？

・・・って本物の英雄かよ！

「楽しい勝負しようぜ！」

お断りします。イヤ、ガチで

なんやかんやで巻き込まれる（後書き）

@「結局試合にでた亮！そして、亮はラカンに勝って肉を手に入れる事ができるのか！！」

亮「やる気しね～」

@「とゆうことで、次回はガチバトルになるかも・・・バトルを期待してない人も・・・一応見てね♪」

亮「・・・」

@「そんな目で見るな。恥ずかしい」

亮「・・・死ね」

@「うお！いきなり紅桜抜くな！斬ろうとするな！」

亮「戦いは虚しい・・・戦いは戦いしか生まない」

@「なら、お前が止めて見せろ。その戦いの連鎖を料理（たたかい）で」

亮「・・・そうか、俺は料理で世界を救いたかったんだ・・・」

@「なら、超えなくてはいけないラカン（絶対的壁）を」

亮「ああ、超えてやる！超えてやるさ！」

@「・・・人の為と書いて偽りと読むんだぜ（笑）」

料理人ＶＳ英雄（前書き）

@「やっとテストが終った～～～～」

亮「乙。で、結果は？」

@「・・・（泣）」

亮「分った。聞かんからいきなり泣き出すな」

@「もうどうでもいいとです」

亮「は～。まあ頑張れ」

@「んな事より！今回は亮とラカンが戦うわけだが・・・」

亮「何か問題が？」

@「・・・実際、ラカンの力を見誤ってた」

亮「まあ、バグチートキャラって原作じゃ言われてるしな」

@「いやマジで、雷の速さに反応可能とか速すぎだろ・・・」

亮「・・・俺、勝てなくない？」

@「人間は限界で時速６４ｋｍまで出せるらしいが亮は時速４０ｋｍを基準にして考えてる。だから３００％だと時速４００ｋｍまでしか亮は出せない（笑）」

亮「おい・・・ラカンさんは”秒”速１５０ｋｍに反応できんだぞ・・・」

@「うん、無理。避ける能力で逃げ続けるしかできないな」

亮「ｏｒｚ」

料理人ＶＳ英雄

英雄に正攻法で行っても勝てるわけがない。なら、先手必勝！

「食らえ！」

リミッター解放９０％

秒速１０００ｍで肉を投げる！

「おっと危ねえ」

「は？！」

手で止めるなんてありか！？

「これを食ったらお前の思う壺だからな。後で食わせてもらうぜ」

そう言いラカンさんは肉を懐にしまう

・・・肉のストックは残り３個

他の料理も用意しときゃよかった（泣）

「次はこっちから行くぜ！」

ラカンさんが体を気で強化して殴りかかってくる

・・・って速すぎだろこの人！隙をついて口の中に肉入れようって考えてたけど避けるので精一杯だ！

リミット解放１２０％！

うお！もっと上げなきゃ当たる！

「どうした！避けてるだけじゃ勝てねえぞ！」

言われなくても分かってますって・・・

リミット解放２１０％！

「ふん！」

隙を作る為に殴りにいってみたけど・・・簡単に避けられた（笑）

（亮、後ろ後ろ）

な～に？って！

「おら！」

「うお！」

いつの間に後ろへ回ったんだよ・・・能力なきゃ当たってたな

「おらおらおら！」

「く！」

能力のお陰で完全に避けられてるけど、このままじゃ体力が直ぐに無くなる！

「でりゃあ！」

「おっと」

２４０％の拳も避けるか普通・・・しょうがない、３００％！

「うお！お前、また速くなったか？」

「どうでしょう・・・ね！」

これも追いつかれるか・・・

は～。武器は使いたくなかったんだけどな・・・奥の手の一つだし

「うおらーー！！」

まぁしょうがないか・・・

ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

いきなりアイツは地面を殴って砂ぼこりの中に隠れやがった

「なんだ？もう終わりか？」

こっちはやっと体が温まってきたってのに。まあ、気や魔力が無くてあんだけ動けんだから化け物だな

「すいませんね。これはあまり人に見られたくなかったので」

砂ぼこりが収まるとアイツは変な色の刀を持っていた

「待たせました。さぁやりましょうか？」

「武器も使えたのか？ならなんで最初から使ってこなかったんだ？」

「こいつを人目に晒したくなかったんですよ」

妖刀の類いか？まぁ俺様には関係ないが

「そっちが武器を使うってんなら此方も使わせてもらうぜ。来れ（アデアット）！」

「アーティファクトですか・・・」

さて、小手調べにこいつだ！

「そら！」

幾つもの剣をアイツに向かって放つ

「はあ！」

・・・軽くいなしやがったな

なら・・・これはどうだ?

「斬艦剣!」

いなせるような大きさじゃねえぞ!

「・・・」

・・・まさか、俺様の剣を真っ正面から受け止めやがるとはな

「この刀は”力”を吸収します。今は貴方の剣の威”力”を吸収させてもらいました」

おいおい。なんて馬鹿げた武器持ってやがんだよ

「次は此方から行きます!」

そう言いアイツは突っ込んできた

「・・・青木流第壱の太刀・睦月!」

見たところただの居合い、これなら受けても問題は・・・!

「うお!危ね!」

アイツの剣が俺の剣に触れるとバターの様に俺の剣が切られた

「良く避けましたね。さっき言いましたがこの刀は”力”を吸収する能力があります。魔力で形成されている剣なんて無意味です」

本当に反則だなおい！

「なら肉弾戦だ！」

「睦月！」

また居合いをしてきたな

だがそんなんじゃ俺には当たらないぜ！

「青木流第弐の太刀・如月！」

「な！」

おいおい、竜巻も出せるのかよ

「青木流第参の太刀・弥生！」

たく、いくら俺様が本気出してないからって気や魔力を使わないで俺様の速さについてこれるか普通？

・・・少しぐらいなら本気出していいよな？

「喜べ、今から俺様の本気を少しだけ見せてやる」

さて、死ぬんじゃないぞ青年

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

右から来たと思ったら即左から攻撃がくる

・・・無理。キツい

「おら！」

「うお！」

さっきまでとは桁違いの速さです。はい

（諦めんなよ！）

やっぱ英雄は違うね、うん。気で強化しただけで音速入るとか

（いや、封印解けばお前も出来るだろ・・・）

封印解くにしてもこんなとこで使いたくないな。変な人に目つけられるかも知れないし・・・

（そうかそうか・・・なら先ずはお前のその幻想をぶち壊す！）

はいはい。バロスバロス

（まぁ聞け。お前はその能力を半分も使いこなせていない）

は？これでまだ半分以下？冗談きついだろ・・・

（そもそも能力を引き出しているのは腕や足などの全体パーツだ。それじゃあ部分的なパーツの力を最大限まで引き出せてない）

・・・要するに筋肉繊維の一つ一つから力を引き出せと？

（Ｔｈａｔ　ｒｉｇｈｔ！それだけで何時もの何倍も速く動ける様になる）

この現状でか？

「何考え事してんだ？」

「グ！」

くそ！能力でもカバーできなくなってきたか！

（頭を使え頭を。何故人は熱い物を触った時速く動けるんだ？）

脳からの電気信号でなく、脊髄が即座に反応して逃げる様にするから・・・！まさか！

（やってみろよ（笑）出来なきゃ痛い目見ることになるがな）

父さん達のお陰で痛いのにはもう慣れた！

（軽口は良いからはよやれや）

ちくしょー！

腹くくるか！

（強くなってくれなきゃな～世界の為に。俺の為に）

料理人ＶＳ英雄（後書き）

亮「・・・あれ？作者がいね～」

色「なんでも、今回は亮が使う剣術の青木流の説明ヨロって言って逃げた」

亮「なんでだ・・・まあいいか。まず青木流は本々、対人戦用の剣術なんだ。が・・・父さんが母さんの父親に認めてもらう為に無理やり対魔戦用に改造にしたのが今、俺が使っている剣術だ」

色「それじゃあ、本当の青木流は？」

亮「・・・父さんが作った方が強すぎたせいでこっちが本家っぽくなってるから俺は知らん」

色「・・・」

亮「んじゃ、次は剣技の説明な。先ず第壱の太刀・睦月。まあ、本当は気を使って使う居合いなんだ」

色「亮は今、気と魔力が封印されてるから本来の威力に及ばない？」

亮「まあな。本来だったら気で武器を強化して振るうから軽く鎌鼬が出る」

色「・・・次」

亮「第弐の太刀・如月。まあこれは睦月の後、敵を牽制する為の技

だ。睦月の反動を利用してそのまま回転し竜巻を起こすって技だ」

色「本来の威力は？」

亮「父さんが使ったら、１ｋｍは離れていた俺を空の旅に招待させた」

色「・・・」

亮「最後に弥生だな。これは本編じゃ描写されて無かったからな・・・。まあ、武器を振り落とすだけだ」

色「・・・それだけ？」

亮「まあ俺が使うと地面が裂けるだけなんだがな・・・」

色「本来は？」

亮「剣が何本も見えるは剣が伸びた様に見えるはｅｔｃ」

色「亮が封印してい無い状態ですると？」

亮「・・・一度、山を割っちゃった。てへ♪」

色「・・・キモイ」

亮「ぐふ！」

亮に精神的ダメージ１０００００（ｒｙ

亮「・・・俺は死んだ」

色「・・・・」

亮「・・・すまん、遊びすぎた。まあ今回はここで終了で。読者さんも分ってると思うけど、作者は月を技名にしてるから後８個技があります」

色「？・・・後９個じゃないの？」

亮「最後の１２月は歩法なんだ。・・・まあ、めんどくさいから言っちゃうか。青木流剣術第拾弐の太刀・歩法師走」

色「歩法なのに剣術？」

亮「突っ込みはうけつけません。この歩法は瞬動より遅いが、瞬動みたいに直線的じゃなく空中も移動可能」

色「要するに？」

亮「速くないけど、敵に行動が見切られにくい。瞬動は速いけど見切られやすいからな・・・」

色「へ～」

亮「と言う事で次回もよろしく！」

@「まあ、俺が適当に考えた事なんで本気の突っ込みはやめてくださいね（泣）」

色「よしよし。次回も暇なら見て」

@「よろしく、お願いします。後、弥生以降を出す予定は今のところありません」

人の夢と書いて儚いと読むんだぜ・・・（前書き）

亮「おい、作者。題名はないだろ」

@「本当のことだ・・・違うか？」

亮「口に十と書いて叶うって読むんだ。口にすれば叶うかもしれないだろ？」

@「・・・まあ、そうだな」

亮「どうした？何かあったのか？」

@「いや、なんか祖母がさっきから五月蝿いんだよ」

亮「なんで？」

@「学校ないからってパソコンばっかするなって・・・」

亮「作者・・・勉強しろ」

@「人生はこんなはずじゃ無かったって事ばかりだよーーー！！！」

亮「あ、作者親父のバイクで走りだした」

人の夢と書いて儚いと読むんだぜ・・・

ラカンｓｉｄｅ

ん?いきなりスピードが遅くなったな・・・

「どうした?限界か?」

「・・・全・・・3」

なんか呟いているな・・・何企んでるんだか

「・・・全・・・胞・・・58%」

ん?速さが・・・上がってるのか?

「・・・筋・・・細・・・328%」

おいおい、さっき剣を出した時より速くなってねえか!

「・・・肉・・・可・・・1485%」

くそ!まだ速くなるのかよ!

「・・・全・・・動・・・率0.1638849%」

・・・は?待て、まだ1%もいってないのか?

「おら!」

「・・・全筋肉細胞・・・可動率0.38446%」

俺様の事を見てないだ?!なんでそれで避けられるんだ!

「・・・全筋肉細胞可動率0.63666%」

「グ!」

くそ、見えねえ!俺様の知覚速度を超えたか!

「全筋肉細胞可動率1.00000%!」

魔力や気を使わないでこれかよ・・・本当に人間か?

「・・・」

止まった?!これはヤバイ、気合いガード!

「睦月!」

おいおい。さっきとは桁違いの速さと威力かよ・・・

side out

決まったか？

一応、峰打ちなんだけど・・・

（居合いに峰打ちとか無いだろ・・・）

あるんだよ。確か・・・

（へ～。で、まだまだ向こうはやる気だけど・・・どうする？）

「最初からそれぐらい出せよ」

マジかよ・・・もうシンドイですこれ

これ以上上げたら体がぶっ飛ぶ・・・

（まあ、神に作られた身体じゃなければ１００％超えた時点で飛んでるけどな（笑））

「行くぜ！」

「ふ！」

電気信号操って動きを全て条件反射並の速さにしたから、対応は楽だけどさ・・・

「おらおらおら！」

これ以上やってもこの人なんか倒れない気がするんだよな・・・

（まあ、バグキャラだから仕方ない（笑））

・・・んじゃ、俺はなんなんだ？

（・・・所有、神キャラ？）

・・・まあ、今は目の前の人を倒すとするか

「・・・青木流」

「！気合いガー「捻り込み！」ムグ！」

ん？剣術はどうしたかって？いや、そもそもこの人にあんまし効いてなさそうだし・・・

（はい。今肉が口に入りました）

どう考えてもこっちの方が凶悪だろ？

「グ！クソッタレがー・・・」

・・・凄いなけっこう耐えてるよ

美食家や食通でもないのにな・・・

「く・・・くそＵＭＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ」

でも、この衝動に抗うのは無理と

（はい、叫び入りました（笑）魂がこもった叫びです）

「逝ってらっしゃい。天国（ゴートゥザヘブン）と地獄！」

「ＭＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥグエ」

（頭から逝ったーー！！）

勝負あり・・・かね？

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

結局、ラカンさんはそのまま夢の中

俺と色はゴールデンミートを貰って即座に古都を離れた

で、今は山の中で料理中

「おかわり」

今日の夕食は貰ったゴールデンミートを早速使い、ビーフシチューを作ってみた

それにしても・・・肉が美味い！美味すぎる！

「おかわり」

・・・現実逃避は止めるか

「色、自重しろ」

「嫌」

はあ～。明日の朝飯も考えなきゃな・・・

それで・・・

「何時までそこに隠れてるんだ？」

隠れてる・・・イヤ、観察してるってとこか？

「やはり、バレていたか」

見た目１５にいってなさそうな白髪の少年が草むらから出てきた

・・・さてどうするかな？

（1．なぎ払う
2．追い払う
3．斬り払う
4．や・ら・な・い・か（男））

とりあえず

「飯食うか？」

話し合いから始めようか？

???side

可笑しな男だ

自分を観察していた奴に料理を出すとは

「ああ。毒は入っていないから心配すんな」

一口食べる・・・美味い、今まで食べたビーフシチューの中で一番の味だ

「おきにめして良かった・・・で、なんで俺なんか見てたんだ」

・・・読めない。この男が何を考えているのか

「・・・」

「・・・えーっと、んじゃ名前は？」

「フェイト・アーウェルンクス」

男は少し考えて言葉を出す

「・・・フェイトで良いか？」

「別に」

「そうか。・・・で、用は？」

「・・・仲間にならないか？」

気や魔力を使わずに英雄を倒した実力。敵になったら厄介だ

「・・・ごめん。俺にはやりたい事があるから」

「やりたい事？」

彼は空を見上げながら言う

「ああ、俺は店を出したいんだ。来ているお客が全員笑顔でいる・・・そんな店を」

お客全員が笑顔か・・・

「その客が犯罪者だとしても？」

「勿論。もし、そんな人が俺の飯を食べて自分から自首してくれたら・・・最高だと思わないか？」

犯罪者も改心させる料理か・・・

「まあ、犯罪者が俺の店なんかに来るとは思えないけどな」

「・・・分かった。さっきの事は忘れてくれ」

「ん、そうか・・・珈琲でも飲むか？」

「いただこうかな」

彼が出した珈琲を飲む・・・本当に美味しい

「・・・それじゃあ」

あの娘達にもこの料理を食べさせたかったな・・・

「・・・そうだ！」

立ち去る僕に彼は紙を投げてきた

「俺が店を出したらそこに住所が浮かび上がる筈だから、暇な時でも来てくれ」

・・・犯罪者も客扱い・・・か

「・・・楽しみにしてるよ」

・・・久々に普通に笑う事ができたな

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「良かったの亮？」

「何がだ？」

フェイトが居なくなってから色が話かけてきた

「あの男から血生臭い臭いがした」

「・・・」

「だから亮は料理を食べさせた。違う？」

まぁそうなんだけどな・・・

「俺の料理を食べてもあんまり笑わなかったからな・・・」

最後に少しだけ笑ってくれたけど

夢は少し遠いかな・・・誰もが食べたら笑顔になる料理

まぁ、諦める気は無いけどな

（青春してるね～（笑））

「貴方は五月蝿い」

あれ？色って神様の声聞けるのか？

（この人は最初から聞けてるぜ～笑笑）

へ～まぁ別に関係ないか

（それより、これからどうする気だ？）

ん？そんなの決まってるだろ

この世界の珍しい食材を探し出す！

そして、店を出した時のメニューを考えるんだ！次こそフェイトを笑わせてみせるぜ！

人の夢と書いて儚いと読むんだぜ・・・（後書き）

@「盗んだバイクで走り出す～」

亮「戻ってこい」

@「まあ、それより。今回の亮の言っている数字は殆ど適当です」

亮「考えるのがだるくなっただけだろ？」

@「そうとも言う。てか、筋肉細胞って色々あるから何個か調べてもわかんね～んだもん」

亮「でも１％じゃきついんじゃね？」

@「いやいや。人間の細胞は６０兆個あるんだし。筋肉細胞だって３０億個はあるんじゃねーの？」

亮「まあ、そんだけありゃあな・・・」

@「まあ、大丈夫だろ。この作品のあらすじにも書いてあるだろ？」

亮「ん？・・・この作品は作者がのりと勢いのみで書いております ってとこか？」

@「おう。しかも、駄文って書いてあるしな」

亮「ついでに、作者は馬鹿とつけたしとけよ」

@「ははは、そうだな。まあ、次回は麻帆良学園に入るから・・・楽しめよ」

亮「何をだ?」

@「忘れてしまった大切なものだ・・・」

亮「は?・・・まあ、分った」

@「（そう、大切な者をな。修羅場が楽しみだ）」

外伝1　色と料理と時々・・・俺？（前書き）

@「とゆうことで外伝だ」

亮「製作時間は？」

@「知らん。だって即興だもん」

亮「・・・って事は行き当たりばったりか！」

@「そのとおり！！」

外伝1　色と料理と時々・・・俺？

サプライズ。そうそれは突然に来るもの

まあ、当然だなサプライズだし

そう・・・突然だった。色があんな言葉を言うなんてな

「亮。我も料理をしてみたい」

「ゑ？」

もうな・・・本当にびっくりしたよ。あんな言葉を色から聞けるなんて

「そ、そうか・・・んじゃ、何を作る？」

色は少し考えて言った

「一人で作ってみようと思う」

もう・・・なんだろ・・・うん。巣立つ小鳥みたいな、そんな感じだ

「分った。とりあえず、材料と道具を用意しとく」

「ありがとう」

そう、あんなモノが出てくるなんてな・・・

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

なんでも作れるように色々な食材を用意した

そして、色がキッチンに入って1時間後、それは出てきた

「・・・できた」

テーブルの上にそれは置かれる

白い皿にのっかっている分、”それ”は奇妙に見えた

「・・・何を作ったんだ?」

「・・・ハンバーグ」

俺が用意した材料の中には肉も勿論入っていた

だから、ハンバーグを作ろうと思えば普通に作れる

「・・・召し上がれ?」

「・・・いただこう」

皿の上にあるのは・・・アバター(黒い玉)そう。邪神と呼ぶべき黒い玉だ

（・・・なんだそれは？）

神も引くほど、それは立派な球だ。逆にどうやって作ったか聞きたいほどに・・・

「食べないの？」

「あ、ああ」

・・・まずは、フォークとナイフを使ってみよう

・・・はじかれた。フォークが刺さらない

ナイフも・・・はじかれた

（いったい・・・なんなんだそれは・・・）

俺が聞きたい

・・・こうなったら

（手掴み！！）

一口齧る・・・！

口の中で味が混ざる！！マンゴー、苺、プリン、洋ナシ、ブドウｅｔｃ

口に入れただけでこの味の多さだと！

化け物か！

（ニュータイプ・・・だと）

飲み込む・・・！

更なる味の昇華！！カレー、オムライス、シチュー、うどん、ｅｔｃ

そう、それは・・・食の玉手箱、口から食道を通過しただけで５０種類もの味が楽しめる！

そして胃に入り・・・爆発

（へ？なんで！どうして？！）

これはやばい。封印解除！そして、全魔力を胃の強化。そして、気を回復に回す！

嘘だろ！まだ、爆発するか！気での回復が間に合わない！

（へ？どんな兵器だ？）

・・・なんとか、押さえつけた・・・しんどい

「色。いったいどんな材料を使ったんだ？」

「魔界の爆破牛って言われている”バリミアス”の肉を使った。他に魔界のフルーツをいくつか」

「・・・俺の用意した食材は使わなかったのか？」

「・・・亮の料理が食べたくて使わなかった」

・・・なるほどな

「・・・まずかった？」

「・・・・」

ここでまずいと言ったら男が廃る！

「いや、美味しかったよ。次はもっと美味しく作れるように、一緒に作ろうな」

「・・・うん」

さて・・・まだ一口しか食べてないわけだが・・・

「まだ、あるからね」

「・・・全てもらおうか」

封印が戻るまで後1分。それまでに、方をつける！！

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

（・・・で、大丈夫か？）

胃の修復はぎりぎり間に合った。だが、気を全て使い切った

（乙）

マジで死ぬかと思った。ゲームとかで飯まずを食っている主人公達はこんなものを食べているのか？

（・・・いや、あれはないだろ）

だと良いが・・・

（てか、なんで全部食う気になるんだ？捨てればいいだろ）

分ってないな神は。どんな奴だってな

”作ったものを美味しいって言ってもらいたいんだよ”

色の日記

今日は料理をしてみた
亮の様に作るはずが何かわけのわからない物が出来上がった
とりあえず、亮に食べさせてみたが・・・まずかったようだ
封印を解いてまで食べてくれたが・・・少し凹んだ
次の時までにはまともな料理が作れるよう努力しようと思う
それにはまず・・・亮の料理を食べなくては
今日もいい天気だった

（・・・普通、胃の中で爆発したら死なね？と俺はつぶやく）

外伝１　色と料理と時々・・・俺？（後書き）

@「製作時間は・・・４０分もかかってしまった」

亮「いや、計るなよ！何かのタイムアタックか！！」

@「まあ、良いじゃないか。外伝だし。俺の暇つぶしだし」

亮「今ぶっちゃけた！こいつぶっちゃけたよ！」

@「はっはっは。何のことかな？」

亮「白々しいな。おい！」

@「まあ、こんな感じで外伝は俺が暇な時にでも書いていくつもりだ」

亮「あまりにも適当すぎるでしょ・・・」

@「１０万ＰＶにつき一個、書いてく予定だ」

亮「ん？今は２０万行ったっけか？」

@「いや、まだだ。後３万ＰＶだ」

亮「へ～。で、次の外伝は？」

@「勿論・・・考えてなどいない！」

亮「ですよね～！！」

@「と言う事で。もし外伝で他のアニメの世界などに亮を放り込みたいというリクエストがあったら、容赦なく感想版に書き込んでくれ！俺の気分が乗ったら書く」

亮「いや作者何言っちゃってんの！！てか、俺に拒否権無し！」

@「と言う事でよろしく！次回も楽しみにな！」

亮「ちょ、おま。まｔ」

@「まあそんな感じで、もし外伝に書いて欲しい内容があったら、感想版に書いてくれ。なるべくなら俺は全員のリクエストを叶えるつもりだ。まあ、リクエストなんてする人は居無いだろうがな・・・

んじゃ次回もよろしく」

展開が速すぎるのは仕様だ　ｂｙ作者（前書き）

亮「前から言おうと思ってたが・・・」

@「なんだ？」

亮「展開が適当すぎるは！！」

@「嫌、お前の修行風景とか見てても楽しくないと思って」

亮「んじゃ何故いきなり新キャラ入れた！！」

@「・・・お前に従者っぽい人をつけてやりたかったんだ・・・」

亮「嘘だ！！」

@「嘘さ！！」

亮「ぶっちゃけやがった！」

@「ていうよりさ～。ずっと思ってたけど、作者に向かってその口はないんじゃね～の？」

亮「お前がまともに書いてくれればこんな事言わねえよ」

@「反抗的な奴は・・・こうだ！！」

亮「何をしｔ（ｒｙ」

亮「んじゃこら！」

@「以下略の呪いだ。お前はこれからうまく喋れない」

亮「なんてｋ（ｒｙ」

亮「ぬおおおおｏｏｏｏｏ（ｒｙ」

@「ふ、無様だな」

亮「てｍ（ｒｙ」

@「次にはもう喋れなくなるだろう」

亮「・（ｒｙ」

@「ふはははは、諦めろ。次からは色と俺で前書きをする」

亮「（ｒｙ」

@「何心配するな。お前より色を入れて視聴者ｕｐだ」

亮「（ｒｙ」

@「さて、本編開ｓ「Ｇ・Ｐ・Ｄ！（ジャイアント・パンダ・デストロイ）」プゲラ！」

@「な、何故貴様がそれを使える！その技はワンピ○スのあの人しか使えない筈だぞ！」

亮「あんたは失念していた。この小説の特異性を」

@「何を言って・・・まさか！」

亮「そう、この小説は”ギャグ”小説だ。ならギャグ補正もつくだろ？」

@「まさか・・・ニコニコのフリーダムなあの方のネタか！」

亮「そうだ。ギャグである限りあんたはこれを防ぐ事ができない」

@「う、嘘だーー！！」

亮「喰らえ！無双〇印・菊！」

@「ぐほ。それは・・・知ってる人しか知らんから駄目やろ・・・」

亮「大丈夫だ。ネタだし伏字付きだ」

@「あ、ありえない・・・」

亮「あ、氏んだ」

展開が速すぎるのは仕様だ　ｂｙ作者

あの戦いから一年半

ついに魔法世界の全食材を食破したぜ！

（ホント。ようやったよお前は）

ふはははは。この知識を糧に新しい料理を作り、世界を征服するのだ！

（お前・・・それで良いのか？）

「主よ。頼まれていたのはこの茸で良かったか？」

「ん？おお！それそれ。よく採ってきてくれたな」

ん？今のは誰かって？

今のは俺のペットの白。狼で食材を採ってきてくれる賢い子

（狼（笑）。その狼は太陽や月を飲み込むぞ）

今は普通の大型犬だから大丈夫だろ？

「主よ。考え事か？」

「ん。まぁそんなとこだ」

そういや白には神の声が聞こえないんだったな

（そんなことよりお前・・・何か重大な事を忘れてないか？）

ん？何かってなんだ？

（いや・・・え～っと、なんだっけかな？）

？なんだっけか「亮～ご飯～」あ～あれか

「はいはい。今、白が材料採ってきてくれたから直ぐに作るよ」

・・・てか、あまりにも変わりすぎでしょ。ツンデレで言うデレ真っ盛りだよ

（完全に今はクーデレだな）

「主よ・・・私は色殿が何かする事を見たことがないのだが・・・」

「ん～。まぁやる時にはやる子だよ」

もう魔王の影も形無いけどな

（あ、思い出した）

ん？何を？

（さっき良い損ねた事。お前・・・妹分の事忘れてないよな？）

・・・

身体中に電撃が走る

全ての歯車が回りだし、今ここで合致したこの感覚！

そう、これは・・・

（すっかり忘れてた・・・と）

・・・イヤ、ワスレテタワケジャナイヨ。ホント

（はいはい。今頃、お前の妹分達は何を思ってるのかね～）

「・・・色！飯は後だ！今すぐ旧世界に帰るぞ！」

「む。我の飯を後にするのか？」

「急がないとヤバイ気がする」

そう、寒気じゃなく悪寒

凄いヤバイ気がする。嫌な予感が止まりません

「主よ。私は・・・」

「勿論ついてきてくれるだろ？」

「・・・御意」

さて、急げ！！

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

で、此処が麻帆良学園か・・・

（場所、忘れたからって京都に戻るとこは笑えたは（笑））

うるへ～。そもそも麻帆良なんて地名は前世じゃ無かったんだよ・・・

（そうかそうか（笑）で、どうすんだ？）

まぁ先ずは学園長に挨拶だろ・・・此処が俺の店の場所になるからな

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

さて、学園長室前に来たわけだが・・・

（此処はドーンといくべきだろ）

なるほど・・・ドーンか・・・

「失礼しまーす！」

学園長ｓｉｄｅ

ふむ。婿殿から礼儀正しい子だと聞いたのじゃが・・・

「詠春さんから連絡がいってると思いますが、今日からお世話になる青木　亮と言います」

ドアを蹴り破ってくるもんじゃろうか？

「・・・あ！ドアは後で修理しておきます」

「そうしてくれるとありがたいのう」

さて、此処に来てくれたという事は

「木乃香を貰ってくれるという事かの～」

「寝言は寝ている時にお願いします」

ホッホッホッ。笑いながら断られたわい

「此処には店を開けたくて来ました」

「ホッ？店かのう？」

「はい」

ふむ、そう言えば婿殿も夢の為に断られたと言っておったかのう

「ふむ。それなら・・・森の近くに一軒、空き家があったかのう」

「それを売ってもらえますか？」

ふむ・・・

「イヤ。ただで良いぞ」

「・・・交換条件は？」

ふむ。中々分かっておるのう

「此処の警備をやってもらいたい」

「・・・」

むむ。やはりこれは考えるかのう・・・

「・・・出撃毎に給料はもらえますか？」

「うむ。勿論じゃ」

「それなら分かりました」

ふむ。戦いは嫌いだと婿殿から聞いておったのじゃがの・・・

「・・・これがその空き家までの地図じゃ」

「有難う御座いました」

そう言い彼は〃ドア〃を開けて出ていきおった

「うむ？」

いつの間にドアは直ったんじゃ？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

イヤ～、学園長さんも太っ腹だな～警備するだけで空き家をくれるなんて

（お前さん戦いは好きじゃないんじゃなかったっけ？）

・・・俺がやるとは一言もいってないぞ

（・・・お主も悪よのう）

いえいえ、お代官様こそ

「・・・亮」

「どした？」

「働きたくない」

・・・鋭いな

「・・・そろそろ働け」

「働いたら負けだと思ってる」

どこでその言葉を・・・

（・・・目指せニートの暮らしかた。全5冊発売中）

アンタのせいかーー!!

「・・・主よ」

「・・・どうした白」

「この様な場所で百面相をしてたら変人扱いにされます」

・・・おう。そういや此処、女子中だったな

「そういや、木乃香ちゃん達って此処に通ってんだよな？」

「私に言われても分かりません」

ですよね～

（通ってるぞ（笑））

まさかの神からの情報！なんで知ってんの！

（それは・・・私が神だからだ）

オーケー把握

んじゃ急いで空き家の確認にいきますか

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

・・・料理店をやるにして少しは狭いな

「・・・亮」

「どうした？深刻な顔して」

まさか、呪われた石仮面でも見つけたか！？

「・・・お腹すいた」

「・・・」

うん。色は絶対働かせよう

「とりあえず、影の中にある食材で何か作るか・・・」

店を作るのもそれからだな

展開が速すぎるのは仕様だ　ｂｙ作者（後書き）

@「ふ～。前書きで死ぬかと思った」

亮「なんか本編の俺、性格変わってないか？」

@「ん・・・まあ、ギャグ補正のせいだろ」

亮「まあ、本編がぶっ壊れなきゃ好きにしていいが・・・」

@「今、本編での補正値はこんな感じだ←」

シリアス：１倍，バトル：１．１倍，ギャグ：１．５倍

亮「ギャグ補正値が結構高いな・・・」

@「まあ、ギャグ中心の予定だし」

亮「まあ、次回は店作りの予定だっけ？」

@「ふふふ。今、俺は面白い事を考えた！」

亮「やな予～感」

@「そう、補正値の変更だ！もしかしたら、ギャグの補正値が下がるかもしれないぞ！」

亮「まあ、適当にやれや」

@「んじゃいくぞ・・・パルプ〇テ！」

亮「ドラク〇！！」

補正値が変更されました。ギャグの補正値が上がりました

亮「は？」

@「ん？」

シリアス：1倍，バトル：1．1倍，ギャグ：3．0倍

亮「→・・・はーーー！！！」

@「・・・これは予想外だ」

亮「ちょおま」

@「んじゃ、次回！」

亮「ちょ待て！これはどういうｋ（ｒｙ」

次回に続く？

作るぜ・・・店を！！ｂｙ亮（前書き）

亮「・・・作者がいないな」

色「・・・宿題で忙しいらしいよ」

亮「そうか・・・なんか言ってたか？」

色「・・・何も言って無かったよ」

亮「そか・・・」

色「・・・」

亮「話すこと無いな」

色「・・・無いね」

亮「・・・本編どうぞ」

色「どうぞ～・・・←」

作るぜ・・・店を！！ｂｙ亮

さて、飯も食べ終わった事だし店作りを始めるか・・・

料理店にしては小さすぎるからな～・・・喫茶店にでもしとくか？

（こうゆう時には魔法を使うのが良いんじゃね？）

ん～。空間拡張の魔法か・・・色は使えたかな？

「空間拡張の魔法使えるか？」

「・・・できる」

「頼めるか？」

「警備に行かなくていいのなら・・・」

「勿論駄目だ」

しょうがない、魔法世界に居た時に見つけた魔法球を解剖して探すか・・・

「・・・働きたくない」

「色殿。諦めた方が良いです」

「う～～～」

はてさて、見つかるだろうか？

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

（現在、魔法球の中に居ま～す）

まったく、色のニートっぷりは治らないものかな？

（あれは一応、魔王だと言う事を忘れるなよ？）

分かってますって・・・

それにしても・・・この魔法球はどういう仕組みなんだ？

（中には家が一つと後は森や山。そして、海が広がっている）

広さは地球レベル？のうえに家の中は大図書館レベルの広さで

大量の魔法関連の本が敷き詰められている

この魔法球を作った人はそうとう力量が高かったんだろうな・・・

この中にそういう本があれば良いが・・・

ーーーー☆ーーーー1週間後ーーーー☆ーーーー

ご都合主義で見つかったは良いんだが・・・

（そうは問屋が下ろさないっと）

俺が魔法を使えないの忘れてたは（笑）

あ～。まぁ喫茶でも良いかな～

ここで一生、店をやるわけでもないし・・・

（てか、何故此処で店をやる事にしたんだ？）

宇宙意思に従いました

（！）

冗談。木乃香ちゃん達の機嫌取りの為です

（ビビらせるなよ。俺以外の電波でも受信したかと思っただろ）

さーせん（笑）

（お前・・・キャラ変わってね？）

気のせいです（笑）

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

魔法球から出たら２０時

魔法球の中の１日がこっち一時間だから七時間はたったのか・・・

「亮。学園長から電話があった・・・」

「なんだって？」

「明後日の１時に世界樹の前に来てくれだって」

他の警備の人との顔合わせかな？まぁ俺には関係無いけどな

明日には店を完成させて明後日に木乃香ちゃん達を呼んでパーティーでもするか・・・

店をオープンするのは明明後日かな・・・

「！美味しい予感がした」

「食い物に関しての直感は予知能力並だな」

「主よ。なんの話をしているのだ？」

「・・・気にするな」

白には苦労をかけそうだな色々と・・・今のうちに謝っておこう。

すまん

ーーーー☆ーーーー次の日ーーーー☆ーーーー

椅子、テーブルの用意良し

厨房の方の用意も完了したな・・・

「亮。魔界から材料持ってきた・・・」

「主よ。魔法世界から言われた材料を採ってきました」

よしよし。材料を倉庫に入れて・・・っと

「良し。サンキューな」

これで店の準備はあらかた完了だな

色や白が材料を採ってきてくれたから大抵の料理は作れるな

後は・・・メニューと店の名前か・・・

「メニューは無くても良いかな？」

頼まれれば大抵の料理は出来るし・・・

「・・・名前は何にするの？」

ふむ・・・

「主よ。無難に亮理店で良いのでは？」

「・・・白。お前中々良いセンスしてるな」

（言葉じゃ分かりにくいな（笑））

「・・・亮」

ん？色も何か考えたのか？

「え～っと・・・”亮の不思議なお店”？」

・・・何か怪しい物を作ってそうな名前だな

（なら、”亮の怪しいお店”でどうだ？（笑））

もはや怪しいのを公開してる！

「イヤ、実は前々から名前は決めてたんだ・・・」

（うは。名前を考えてた意味がない（笑））

「で、主よ。その名前は？」

「”スマイル”。誰でも来たら笑える様になる店だ」

「・・・スマイル」

「スマイル」

（（笑））

イヤ、確かに間違っちゃいないけどさ・・・神が言うとムカつくな

（ひど！俺の心はガラス製なんだから簡単に壊れちゃうよ！）

ガラス製（笑）

「・・・ガラス製（笑）」

（へ！？貴女までんな事いうの！酷いや。うわ～ん！）

「色殿。どうしたのだ？」

「・・・気にするな。我も気にしない」

「まぁ向こうへのメッセージ（いじめ）だよ」

「？・・・はあ」

さて、名前も決まったし看板でも作るか

「ほう。外装は駄目だが内装は悪くないな程度だな」

金髪幼女と耳にアンテナの様な物をつけている女子が入ってきた

「すまないな。開店は明後日からなんだ」

「ほう。ここの店主はせっかく来た客に何も出さないで帰らせるのか」

ふむ。そう言われると弱ったな・・・

てか、この家が店だと知っているって事は学園長の知り合いだよな

「オーケー。まだオープンしてないが君達がこの店の初めての客だどうぞこちらに」

来たからには笑顔で帰ってもらいますよ・・・”お客様”

おまけのネタ。亮の魔法修行

「プラクテ　ビギ・ナル”火よ灯れ”」

「・・・」

不発

「プラクテ　ビギ・ナル”火よ灯れ”」

「・・・」

不発

「プラクテ　ビギ・ナル”火よ灯り下さい”」

「・・・不発」

憐れ

「プラクテ　ビギ・ナル”火よ灯れよおおぉぉぉぉぉ”」

「・・・・」

・・・

「・・・”火点けや！ゴラ！”」

あ、燃えた

「・・・亮、頭が燃えてる」

「なんやて！うお！アチ、あちあち」

のたうち回る～憐れな男～

「歌うな！てか、なんで頭から火が！杖使ってないじゃん！」

「亮、精霊は干渉してない・・・」

「は？」

・・・おめでとう。君は魔法は使えないが超能力は使えるようだ

「はあぁぁぁぁ？！」

そしてオチも無く終わる

作るぜ・・・店を！！ｂｙ亮（後書き）

@「前書きはなんだ！」

亮「いや・・・何って言われても」

@「もっとしゃべれよ！色と二人だけなんだからさ！」

亮「いや、話すことがなくてな」

@「おうふ。なんとつまらない男だ！」

亮「す、すまん」

@「まあ良い。そういや、亮が魔法使えないのを明記してなかったな」

亮「まあ、俺も使う直前まで忘れてたしな。てか、何故俺は魔法が使えないんだ？」

@「精霊に干渉できないんだよ。要するに、タカミチ状態」

亮「なる・・・んじゃ、最後のなに？」

@「はっはっは。お前の特殊な体質だ（笑）」

亮「ど、どうゆう事だ？」

@「お前は・・・魔力を精霊に干渉させないで変化させる事ができ

るんだ！」

亮「な、なんだってーー！！・・・で、どゆ事？」

@「まあ、お前の魔力事自体が雷や火になると考えてもらっていい」

亮「うほ。俺最強！！」

@「まあ、魔法の射手もどきしか使えないだけだけどな」

亮「ｏｒｚ」

@「よし、俺は宿題するから帰る」

亮「あ、待ってくれ～。もうちょい説明を・・・」

@「暇なとき外伝ででも書いてやるから心配するな。じゃな」

亮「待ってくｒ」

作者がログアウトしました

やばい、ネタが浮かばない・・・（前書き）

@「絶賛、スランプ中！！」

亮「勢いがなくなったってところかな」

@「書こうと思っても何を書こうか次の瞬間忘れちまう！！」

亮「それはただの、ど忘れだ！！」

やばい、ネタが浮かばない・・・

とりあえず、カウンター席に案内しとくかな

「・・・お冷や」

ナイスだ色！気が利くじゃないか！

「・・・座らないの？」

色が座らない緑髪の子に聞く

「私はガイノイドですので」

「・・・ガイノイド？」

「ガイノイド？」

ロボットの事かな？

「とりあえず座りなよ」

「・・・分かりました」

「おい店主、メニューが無いぞ」

金髪の子がメニューが無いと文句を言ってきた。近頃の若者は短気で困る

「うちにメニューはありません。好きな料理をお頼み下さい」

「ほう・・・なら貴様の血で作ったスープを頼もう」

・・・は？

「・・・ホンマですかい？」

「なんだ？好きな料理を頼んで良いのだろう？」

「はあ・・・かしこまりました。そちらの方は？」

お願いだからまともな物を頼む

「私はガノイドですので食事はいりません。フェイクなら出来ますが・・・」

「そうですか・・・」

料理店なのに一口も料理を食べてってくれないのは寂しいな・・・

「それでは少々お待ちください。直ぐに用意しますので」

あ、自分の血を料理するのは初めてだな～・・・

エヴァｓｉｄｅ

普通に料理をしにいったか・・・面白くない

「それにしても、貴様がこの様な場所に居るとはな。ただの犬かと思ったぞ」

「それは私も同じだ。まさかこの様な場所に居るとはな・・・”闇（ダー）の福音（ク・エヴァンジェル）”」

私にも事情があるんだ

「何故貴様があの様な若造の下にいるんだ?」

「主には命を助けられてな」

ほう、あの若造にか・・・

「若造に助けられるとは、堕ちたな”狼王（フェンリル）”」

「その名は捨てた。今は白だ」

・・・単純な名だな

「そう言うお前も何故此処に居るんだ?大方、好きになった男に勝負を挑んだが負けてこの地に封印されたと言ったところだろうが・・・」

・・・何故そこまで具体的に分かるんだ?そして、私は負けてなどいない!

「マスターは15年前からこの地、麻帆良に封印されております」

「茶々丸！余計な事を言うな！」

「クックック。１５年もか・・・大変だな」

こいつ・・・素面で笑うか！

「白、この子と知り合いなのか？」

店主が厨房からでて来た

「まぁ。昔の知人です」

「ふ～ん・・・お待たせしました」

私の目の前に紅いスープが置かれる

「作ってみたものの初めてですので中々・・・まぁ味は悪くない筈です」

「ほう。貴様、自分の血をちゃんと使ったのか」

店主の手首にはうっすらと傷後がある

「ええまあ・・・お客様は吸血鬼か何かですか？」

「ふん。知らないなら覚えておけ、私の名前はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルだ」

店主は聞き終わると

「エ、エヴァンゲリオン・A・K・B・マグダンゴですか！」

「待て。何故ロボットみたいな名前になっているんだ！」

途中はアイドルグループ、最後は道具の名前じゃないか！

「違うんですか？！」

「原型も留めていないは！」

嘗めているのか貴様は！

「冗談ですよ。ですが・・・」

「なんだ？言いたい事があるならはっきり言え」

店主は少し間を空けて言う

「はあ。・・・手配書に書かれていた絵と違うな～と」

店主は手配書を見せてきた

・・・これは私の幻術の姿なんだが

「本人ですか？！」

「ふん。そうだ、私は真祖の吸血鬼だ」

少しは敬え

「・・・にしては普通ですね」

「・・・今は封印されているだけだ」

「マスターは現在、封印のせいで見た目と変わらない少女になっております」

よ、余計な事を！

「ええい！巻いてやる巻いてやる！」

「ああ、マスターそれ以上はいけません・・・」

五月蝿い！このポンコツめ！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

仲が良いんだな～

「そう言えば、そちらのお名前は？」

頭から湯気が出てるが大丈夫かな・・・

「私は絡操　茶々丸と言います」

絡操・・・やっぱりロボットなのかな？それにしては良く出来てるな～

「・・・」

「どうした色？スープを見て？」

「・・・食べないの？」

「！」

ん？何か拙い事でもあるのか？

「・・・冷める」

ああ、それもそうだな

「それではお客様、お召し上がり下さい」

「あ、ああ・・・」

俺としては味に問題がないか確認したいんだが・・・

「・・・」

「・・・マスター。無理をなさらないで下さい」

「へ？」

何か俺、へまうったか？

「いえ。マスターは猫舌なので熱い物が食べられないのです」

「ちゃ、茶々丸！／／／」

ああもしかして、話をして飲まなかったのはそのせいか？

「う～」

「ははは。なら冷めるまで待っていて構いませんよ」

猫舌ならしょうがない

「わ、私を嘗めるなよ！」

あ、猫舌なのに冷まさないで飲んだら・・・

「・・・」

「だ、大丈夫ですか？」

「ア、アフゥイ」

「マスターは、あ、熱いと言っております」

うん。まあ、そうなるわな・・・

「ミ、ミジュ」

「どうぞマスター」

・・・魔王や吸血鬼って似たようなものなのかな～・・・

（・・・違うだろ）

ですよね～

オマケ

「で、味の方はどうでしたか？」

「ふん。まぁ悪くはなかったな」

金髪幼女は顔を赤らめながら言う

「それは良かった。後、今日の代金はいりませんので」

「ほう。金をとらないのか？」

「ちゃんとした料理じゃないので、お金はとれません」

亮は料理人の意地ですと笑いながら言う

「あ、代わりと言ってはなんですが名前で呼んでもよろしいですか？」

「・・・好きに呼べ」

「有難うございます・・・それとこちらを」

亮はペンダントを取り出す

「どうぞ」

「私に・・・ですか？」

「はい。料理の代わりと言ってはなんですが」

緑髪の女性は戸惑いながらそれを受け取る

「はあ・・・ありがとうございます」

「ふん。ペンダントに何かしらの呪術を施してあるといったところか・・・」

「凄いですね。見ただけで見破るとは」

亮は驚いた様に言う

「行くぞ、茶々丸」

「では・・・」

金髪幼女と緑髪の女性は歩き出した

「この店、スマイルは誰でも歓迎をしております。それが善人でも悪人でも英雄でもロボットでも」

亮はその後姿に言う

「誰でも笑顔になって帰れるそんなお店にできる様にするつもりです」

一瞬、二人が亮を見る

「またの御来店を心からお待ちしております」

亮には二人が少しだけ笑ってくれた様に見えた

やばい、ネタが浮かばない・・・（後書き）

@「くそ～ネタがガチで思いつかない・・・」

亮「更新スピードが著しく落ちたしな」

@「なんとか頑張って更新するが、やっぱり更新スピードが落ちそうだ」

亮「まあ、リアルが忙しいのもあるな」

@「まあ、部活も終ったし時間もできたんだが・・・宿題が多い！！」

亮「こっちもほどほどにしとけよ」

@「やれるとこまで逝ってやる！！」

亮「おう！？逝くのか？」

@「逝くぜ逝くぜ逝くぜ！」

この後作者は旅に出ました

まだだ、まだ終らんよ（前書き）

@「あ～あ。全然うまく書けないよ・・・」

亮「泣き言言うなよ。何時こちらは永久凍結されるか気が気じゃないんだからな」

@「それはする気がないから大丈夫だ・・・ただな」

亮「ただ？」

@「ちょい違う作品に浮気しそう」

亮「おいーーー！！」

@「まあ、遅くてもちゃんと更新する予定だ」

亮「まあ・・・ならいいか」

@「だが、作風は変わるだろうな。今回がそれっぽい」

亮「完全にギャグ風になったもんな（笑）」

@「そうだな（笑）」

亮・@「「（笑）（笑）（笑）（笑）」」

亮・@「「・・・は～」」

まだだ、まだ終らんよ

さて今現在、俺は色、白と一緒に指定された集合場所まで向かっている訳だが

「何かインパクトのある登場がしたいな・・・」

「何故ですか、主?」

それはだな・・・

「面白くなりそうだからだ!」

「はあ・・・そうですか」

(お前、本当に変わったよな・・・)

いや~、それほどでも・・・あるな

「色よ、初めはインパクトが大切なんだ!覚えとけ!」

「我がやるのか?」

「勿論だ!」

さて、どんな風に色を登場させるかな・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

刹那ｓｉｄｅ

世界樹の前に魔法関係者が集められた

なんでも学園長が新しい警備員を雇ったから顔見せをするらしい

「で、学園長、その人物は本当に信用なるんですか？」

ガンドルフィーニ先生が学園長に聞く

「うむ。なにせ、婿殿が信用してる者だからのう」

魔法関係者達がざわめき出す

実のところ、私も驚いている

長が信用する人物を此方に送ってくる理由が分からない

もしや・・・このちゃんの身が危ない！

「おい、刹那。何処に行くつもりだ？」

「お嬢様に危険が迫っているかも知れないんだ！」

龍宮に止められるが私は先に走ろうとする

「まあ、待て刹那。学園長がそんな簡単に近衛に敵を接近させると

思うか？」

「む・・・確かに」

「そんなに心配なら、今から来る新人に話を聞いてからでも遅くはないだろう」

「・・・そうだな」

来るのはいったい誰なんだ・・・

「・・・遅いですね」

「そうじゃのう・・・」

先生達が話している声が聞こえた時、それの雄叫びが響く

「ウオオオオン！！」

「な、なんだ！」

それは狼の遠吠えにしてはとても大きかった

「な、なんだあれは！」

一人の先生がある方向を指差す

そこには銀色の毛並を纏った狼が居た

「馬鹿な！何故あんなものがここに！」

「知ってるのか龍宮！」

龍宮が驚愕した顔で狼を見ている

「アイツは魔法世界の魔法生物だ！」

龍宮が言うと、魔法先生達も驚愕の色を見せる

「騒ぐな、人の子よ」

気付いたらその狼は私達の前に立っていた

「ク！」

咄嗟に高畑先生が居合い拳を放つ

「うちのペットに何する気だゴラ！」

それを仮面を被った人物が弾いた

「静まれ、てめえ達！閣下の降臨だ！」

仮面の人物がそう言うと狼の上から誰かが降りてきた

「・・・」

その人物はまるで１０歳に満たない子供の様だった

だが、その人物には何も言わせない様な雰囲気があった

やがて、その人物は口を開いた

「・・・亮、もう良い？」

その人物は仮面の人物に向かって言う・・・ん？亮？

「おいーー！！色。今から俺が頭が高い、控えろ！って言うつもりだったのに！」

「・・・飽きた」

そこにはさっきまでの殺伐とした雰囲気が無く、何処かのコントの様だった

「って・・・へ？亮・・・兄？」

私が仮面の人物に言うと仮面の人物はやれやれとする

「まったく、今まで考えたサプライズが全部台無しだが・・・久しぶり刹那ちゃん」

その人物が仮面を取ると、そこには昔からこのちゃんと好きな亮兄の顔があった

「本当に亮兄？」

「俺があげたペンダント、まだ大事に持っててくれたんだな」

その言葉を聞くと、私は気付かない内に亮兄の方に駆けていた

「亮兄！」

私が呼ぶと亮兄は腕を広げて私を抱きしめようとする

私は亮兄に向かって・・・拳を叩き込んだ

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ごふ、ナイスボディーブロー

「おうふ。刹那ちゃん、中々鍛えてるね」

「なんで四年間も来てくれなかったんですか、私達も心配してたのに」

うん。ごめん、忘れてた

「ごめんな。色々と忙しくて、会いにこれなかったんだ」

「なら、手紙ぐらい送ってくれても良かったじゃないですか」

「・・・住所が分からなかったんだ」

言い訳ですまん

「・・・」

「・・・刹那ちゃん？」

いきなり黙られるともの凄く気まずいんだが・・・

「・・・ふふ」

「？」

「亮兄もあんま変わっとらんで良かったわ」

ああ、そうゆう事ね

「刹那ちゃんも元気そうで何よりだ」

「ふふ。このちゃんも元気やで」

「そうか、そりゃ上々」

刹那ちゃんと俺が話していたせいか、何人かの人が再起動する

「ホッホッホッ。亮君、あまり皆を驚かせないでくれるかのう」

「すいません。初めはインパクトが大事だと思いまして」

ちょっとやり過ぎた感がな・・・

「は！が、学園長、この男はいったい！」

「ホッホッホッ。彼が新しい警備員じゃよ」

・・・あ、そう言や誰が警備員やるか言ってなかったな

「何を言ってるんですか学園長」

「フォ？」

「警備員をするのは色ですよ」

俺がそう言い色を前に出すと、周りの皆さんがざわめき出す

・・・何か悪いか？

すると、シスターさんっぽい人が肩を震わせながら意見を言ってきた

すごい・・・肩を吊りそうだ

「貴方、そんな小さな子に警備をやらせるつもりですか？」

「何か問題ですか？」

大事なのは見た目じゃねえ、大切なのは魂だって死んだジッチャンは言ってた！

「貴方には常識が無いのですか！？」

「ＨＡ？」

魔法使いが常識を語るなよ

全国の一般人に謝れ

ついでに、俺は謝らない

（反省しろや！）

だが、断る！

「そんな小さな子に警備をやらして何か起きたらどうするの！」

「いや、逆に何か起きれば凄いなホント」

ここはそしたら魔窟だろうな

「貴方は常識がなってない！今すぐそこで反省しなさい！」

「いったい何を！」

常識常識って、アンタも甚だしいよな・・・

「シスターシャークティ、大丈夫じゃよ。その子は見た目以上に実力がある」

「ですが、学園長！」

おう。学園長がシスターさんを止めてくれたよ。助かった～

・・・だが俺はその時、堪忍袋の切れる音が聞こえた

（あ）

や

（べ）

えーー！！

「さっきから聞いていれば小娘風情が我を小さき子、小さき子と大概に・・・」

し、色がキレたーー！！

「しろ！！」

しかも魔力を解放しちゃったーー！！

（彼女の怒りが有頂天を超えた。彼女の怒りは収まる事を知らない）

ギャーー！！誰か止めてーー！！

まだだ、まだ終らんよ（後書き）

亮「・・・」

@「・・・」

亮「ん？学園終ったんじゃね？」

@「次回最終回！」

亮「まじか？！」

@「嘘だ。ってか、まだ修学旅行編にも行ってないのに、終らせられるか」

亮「とりあえず、修学旅行までは書くつもりなのか・・・」

@「・・・一応、魔法世界編まで考えてあるんだけどね」

亮「ゑ？」

@「ヱ？」

刹那ちゃんの口調ってこんな感じだっけかな～？

感想くれると嬉しいです・・・

すいませんでしたーー！！（前書き）

@「今回は流石に遊びすぎた感。反省はしている」

亮「後悔はしていないってか？」

@「本当に今回は変なテンションで書いたせいか、文章の構成が可笑しい、次回はもうちょっとまともに書く」

亮「そうしとけ」

すいませんでしたーー！！

色の怒りが有頂天に達している～

誰か、色を止めて～（泣）

（そういう役はお前だろうが！！）

へ？どうしろと？

（なんでも良い！！食い物で釣れ食い物で！！）

成る程！！

「色！！」

「・・・なんだ、亮」

言葉使いも変わってる！？

これは確実にやばい！！

「とりあえず、もちつけ。冷静になれ」

「大丈夫だ。我は冷静だ」

嫌々いや、それは頭に付けてるムカマークを消してから言ってくれ

「今すぐこの小娘の四肢を喰い、意味のない目玉を後ろから破壊し

て・・・」

「オーケー分かった。お前の怒りは良く分かった。だからとりあえず、落ち着け」

ここまで来ると世界の心配をする事になる

（俺に胃薬を使わせないでくれよ・・・）

「・・・」

「・・・帰ったらお前が好きなだけ料理を食わしてやる。だからここは抑えてくれ」

「！！」

うわ～。目の色が変わったよ～（笑）

（それは死亡フラグではないか？）

大丈夫だ問題ない。これでも何度か挑戦している

（・・・で、結果は？）

腹七分目が俺の限界だった・・・

（（笑）（笑）（笑））

「・・・亮がそう言うなら我慢する」

「っほ。ありがとうな」

なんとか危機を脱したか・・・

「え～っと、シスターさん?色の実力分かってくれました?」

流石にあれだけの魔力と殺気を出されて普通なんて言わないよな・・・何人かの人、気絶しとるし

「・・・」

「あの～・・・」

反応して下さい・・・

「・・・主よ。この女、気絶してるぞ」

「へ?」

白がシスターさんを見て言う

肩をつついてみても反応しない

・・・てか、しょうがないか、色の殺気をまともに浴びちゃったし

へ?刹那ちゃんはどうなったかって?

俺が居るんだから殺気なんて防いだに決まってるでしょ?

「フォフォフォ。彼女は魔界の王といったところかのう?」

学園長が聞いてくる

「ええ。でも、危険はありませんよ」

さっきのを見た後じゃ信用できないかもしれないけど・・・

「フォフォフォ。婿殿から聞いておるよ。危なくなったら君が止めてくれるとのう」

「ハハハ。そうですか」

この人、色が殺気出した時に一番速く反応してたんだけどな～

喰えない人だ

「フォフォフォ。とりあえず、気絶した先生達を部屋に送るとするかのう」

と言うと、学園長は気絶していない先生達に気絶した先生達を連れて行くよう言う

・・・残りは8人位かな?

「気絶した皆には後で言っておくとして、色君を警備員にする事に異論はないかのう?」

「学園長!危険すぎます!」

と、顔黒先生が異論してくる

「フォフォフォ。色君は嘗めなければ、怒りはしないじゃろう」

「危険人物を学園に入れている事に私は反対してるんです！」

うん。まさに正論

まともな思考がある人が居て良かったわ

「フォフォフォ。危険になったら亮君が止めてくれるから大丈夫じゃよ」

「その男がその子を止められるとは思えない！」

と、顔黒先生が言ってくる

ん？これは馬鹿にされるフラグか？

「魔力もたいして無い一般人じゃないですか」

うん。普通(魔法使い)の人はそう言うよな

魔力が無いとそう思われるのかね～

あ、今は気も封印してるんだっけ

・・・これはキレて良い？

（許可する。殺れ(遊べ)）

了解した（笑）

「それじゃあ・・・してみますか？勝負」

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

さぁ、始まるよ（殺伐タイム）

（やったれ、やったれ！）

「先に相手に致命傷を与えたと認められたら勝ちでよいのう？」

「わかりました」

「了解です」

相手は顔黒先生！

さて、どんな戦い方（虐め）をしようかな？

（1．気付いたら頭を足で踏まれていた

2．気付いたら木から逆さ釣り

3．気付いたら犬神家の一族（笑））

さ～てどれにしようかな～（笑）

「では始め！」

お、始まった

「一般人だからと油断はしないぞ！」

あ、顔黒さんが詠唱しだした

「行け！精霊の射手３０っぽ「遅い」グハッ」

ある意味、そんな事を言っているのは油断だよな

最初に頭を踏みつけてみたが・・・

踏みごこちが悪いな～」

「貴様！」

？声出しちゃってたか？

それは失礼

「それじゃあ失礼して・・・」

影から縄をだして拘束して・・・木にかける

「グ！なんだこれは！」

※体感時間にして一秒の間で行われてます

（まさしく憐れだな）

刹那ｓｉｄｅ

亮兄が消えたと思ったら、ガンドルフィーニ先生を踏みつけていた

何を言ってるか分からないと思うが私にも分からない

「私の目が追いきれなかっただと！？」

龍宮も追いきれなかったらしい

亮兄はどれだけ速く動いたんだろう？

「さ～て、刹那ちゃん！カウント５！」

いつの間にか木にガンドルフィーニ先生を逆さ吊りにした亮兄が言う

「へ？」

「４！」

亮兄？

「３！」

これは私もカウントした方が良いのだろうか？

「・・・2」

「1！！」

「・・・0」

「ダイビーーーング」

亮兄はガンドルフィーニ先生を拘束していた縄を切って・・・

「レッツゴー（地獄に堕ちろ）！！」

「グホッ！」

ガンドルフィーニ先生を地面に突き刺した

ズドォォォォォォォン

と言う音が響き、ガンドルフィーニ先生は人柱と化していた

・・・漢字のままの意味で

「汚い柱だな（笑）」

「亮兄、やりすぎだと・・・」

先生方は開いた口が塞がらない様だ

「さ～て、これで信じてもらえましたか？」

亮兄はやりすぎという言葉を知っているのだろうか・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

人柱と化した顔黒先生が連れていかれた

まあ、死にはしてないと思うけど、ちっとやりすぎたかな？

（見事な人柱だった（笑））

いやいや、それほどでも

「フォフォフォ。次は高畑君とやってもらえるかのう？」

「・・・まあ、いいですよ」

顔黒先生は四天王の一番下だったらしい

ん？四天王にも入ってない？それは可愛そうに

「それじゃあ、始めようか」

と、言うことでバトルは次回！！

（なんて、言わせると思ったか？バトルに入るぞ（笑））

まじか・・・

「行くよ」

「うおっと！」

いきなり攻撃してきたよこの人！！

てか、ポケットに手を何故入れてんの？

（ポケットを居合いで言う鞘にしてるんだろ？）

なるほどな～居合い拳ってやつか

「んじゃ俺も」

居合い拳　（パクリ）だ！！

打ち合う打ち合う打ち合う

「驚いたね。僕以外にも居合い拳を使う人が居るなんて」

「いや、あなたのを真似てるだけです」

真似るだけなら、肉体を強化すればできる

「それじゃあ、僕も本気を出すよ」

と言うと、眼鏡をかけた先生・・・確か、高畑って人だったよな

が、魔力と気を手に集めて・・・

「・・・」

「うお！」

合体させた?!

しかも居合い拳の威力が格段に上がってる!!

ん?合体させたら威力が上がるのか?

もしや、親父が言ってた咸卦法ってやつか?!

「それって、咸卦法ってやつですか?」

「本気で狙いにいったんだけどね」

避けられちゃったかと苦笑しながら高畑さんが応える

否定しないって事は多分そうなんだろうな

でも・・・英雄より遅いな

「ふん!!」

「おりゃあ!!」

どうするかな、今のところ３００％に留めてるけど・・・もっと上げるか

「ク！」

「オラオラオラオラ」

３００から４００に変更

（そろそろ決めろ）

まあ、あっちもこれ以上、手札を切りたくなさそうだし？

いっちょやったるか!!

また、刹那ｓｉｄｅ

今度は高畑先生と戦い始めた亮兄

前も可笑しかったけど、前にもまして可笑しい戦闘能力になっている

「刹那、あの人は化け物か？」

「私に聞かないでくれ」

いったい亮兄は6年間、何をしてたんだろう・・・

高畑先生と苦も無く居合い拳で打ち合ってるし

「刹那ちゃ～ん」

なんであの状態でこちらに話しかけられるのだろうか？

「1，2，3の数字のどれか選んで～」

「なんでですか？」

この会話中でも亮兄は高畑先生と互角に打ち合っている

「いいから、好きな数字を選んで～」

「・・・それじゃあ、1で」

亮兄はこちらを向いて笑顔で答えた

「オーケー。んじゃ、刹那ちゃんが選んだ方法でけりをつけるよ」

そして、亮兄は私たちの視界から”消えた”

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

んじゃ、いきますぜ

（最後は派手に！）

パーティー用の～

（パイで～）

「（フィニッシュ！！）」

時速８００ｋｍのパイが高畑さんの顔面に炸裂した・・・

すいませんでしたーー！！（後書き）

@「何度見直しても酷い（笑）」

亮「分かってるならもうちょっとまともに書けよ」

@「しょうがないんや！スランプだもの」

亮「スランプって言葉に逃げるな！！」

@「サーセン（笑）けど、次回はまともに書く」

亮「まじでそうしてくれ」

@「てか、最後のやつ高畑さん死ンでね？」

亮「大丈夫じゃね？魔法使いだし」

@「かね？」

亮「だろ？・・・そういや、2，3はどんなきめ方だったんだ？」

@「2．スーパートルネードス○ー
3．裏○華」

亮「確実に一番じゃなきゃしんでたな（笑）」

感想下さい・・・

色、満腹、別荘にて・・・亮死す（笑）（前書き）

亮「グオラッ。なんじゃ、サブタイは！！」

@「そのままの意味だ」

亮「へ死ぬの？俺、死ぬの？」

@「精神的に・・・な」

亮「馬鹿な・・・あの地獄を抜けてきた俺が死ぬだと・・・ありえん、ありえんぞーー！！」

@「まあ、今回は色を満腹にさせようって回だからな」

亮「ああ、そりゃ死ぬ（キッパリ」

@「諦めんなよ！！」

亮「もう、だめぽ」

色、満腹、別荘にて・・・亮死す（笑）

現在、俺は白と一緒に別荘にいる

理由は前回に色に、好きなだけ食わせてやると言ったからだ

「・・・お腹すいた」

色が別荘の外でぼやく

今、白が全力で食材取りに行っている

俺も、別荘に植えておいた野菜を採っている最中だ

「主よ。取ってきたぞ・・・」

白が満身創痍で帰ってきた

後ろには龍が五匹程いる

「よくやってくれた。後は任せておけ」

「御意」

そう言い白はぶっ倒れた

さて、野菜も大量に採り終わった事だし

「色。腹の貯蔵は大丈夫か？」

「・・・大丈夫」

逆に俺の在庫は大丈夫かな～（笑）

（当たって砕けろ！（笑））

別に殺ってしまっても構わんのだろう？

（死亡フラグ乙（笑））

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

横に置いた酢豚が瞬く間に消える

確実に俺の視覚速度を超えた食いっぷりだ

「おかわり」

即座に別荘に行き、二・三品作って色の前に置く

現実の時間ではまだ十分も経っていないはずだ

「おかわり」

そんな事を考えている間に色が完食する

そして、また別荘に戻り料理をして帰ってくる

確実に別荘の中では三時間を越えていた

そして・・・在庫の材料が半分をきった

白に新しい材料を取りにいってもらい、時間稼ぎとして龍一匹を丸焼きにして色の前に置く

「・・・」

凄い勢いで龍一匹が食われていく

・・・一分も経っていないのに三分の一は食われた

（今、腹何分目かな？）

「・・・三分目」

ふ、勝負はこれからだ！

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

龍を解体し、シチュー、カレー、ハンバーグの材料にする

尻尾は丸焼きだな

「おかわり」

別荘から出ると、既に龍一匹を食い終わっていた

・・・可笑しいな、まだ入って一分経過してないぞ!!

(消えた・・・口に入る直前で分解された様に消えた・・・)

なんでやねん!!

「主よ!大物を取ってきた!」

「ナイスだ白!」

別荘にまた入る

そこには全長６００m以上はありそうな龍がいた

「でか!」

「口から水圧ブレスを吐いたりと大変でした・・・」

白を労いたいが、時間が無い!

一気に解体する!!

「調理秘技・高速三枚卸し!!」

三分の一を刺身にする

これで現実時間、三十秒はもつだろう

「次追加！」

先程出した、カレー達は既に三分の二ほど食われていた

（・・・これって終わるのか？）

分からん！スピード的に後一時間で終わるはず！？

目指すぜ！満腹！

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

一時間後、そこには積み上げられた大量の皿と倒れる無残な俺が居た

「・・・ごちそうさま」

そう言い色が机から離れる

・・・多分、５００人以上・・・いや、下手をしたら四桁に至ったのではないかな？

（よう、やった。お前はようやったよ）

もうゴールしても良いよね？

とても眠いんだパト〇ッシュ

（りょーうーー！！）

ああ、天使がやってきた

有難うパトラ○シュ

「主よ・・・無事か？」

ああ白、君が僕のパトラッシ○なんだね

「主？」

「ああ、眩しい。まるで太陽が上がったかの様だ・・・」

「・・・もう朝」

・・・徹夜じゃねーか！！

「主よ・・・」

「どうした、白？」

「非常に言いにくい事なんですが・・・」

いったい、どうした？

「在庫が完全に無くなりました」

「まあ、そりゃな・・・」

確実に四桁の人数分はあったはずなんだがな・・・

「・・・今日は昔馴染みの者が来る筈では？」

「・・・ああ！！」

忘れてた忘れてた忘れてた忘れてた

どうしようどうしようどうしようど

何処へ行く?そんなの決まってんだろ!

「材料がある所にさ!」

まずは野菜類の確保だ!

(亮はそう言い朝日に向かい走って言ったとさ(笑))

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

白side

主はそう言い店を出ていった

「・・・亮は?」

色殿が部屋から出てくる

「材料を探しに、何処かにいってしまわれた・・・」

「・・・そう」

そう言い色殿はまた部屋に帰っていく

・・・主の為に龍の一、二匹狩っておくか

主の昔馴染みとはどういう方なのか気になるが、まあ時が来れば分

かるか

そう思い私は別荘に入っていった

side out

色、満腹、別荘にて・・・亮死す（笑）（後書き）

亮「なあ、これ間に合わなくね？」

@「そこはご都合主義で間に合わせるに決まってるだろ（ドヤ」

亮「それでいいのか？」

@「大丈夫だ問題ない」

亮「まあ良いや。話は変わるが・・・釣り蛙で釣れる龍が出て来なかったか？」

@「出たよ。てか出したよ」

亮「・・・へ？」

@「（ドヤ」

亮「なして？」

@「お前の別荘の名前がヒントだ」

亮「別荘の名前？・・・ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤだが・・・」

@「それが答えだ！！」

亮「ピコン）・・・まさか！」

@「ああ、お前の別荘の中には世界があるんだ！」

亮「なんだってーー！！」

@「て、事で次回は外伝、『白と俺とモンスター』を投稿する。みんな楽しみにしててくれよな！！」

亮「何故に最後はコロコ〇コミック的なのり？！」

@「気分（キッパリ」

亮「さいですか」

外伝はモンスターハンター（笑）（前書き）

『モンスター』

それは人類が太刀打ちできないモノに付ける名称である

この世界では龍と呼ばれるモノにその名称が付けられる

ある種は雷を落とし、ある種は水圧ブレスを吐き、またある種は熱線を吐く

・・・皆が知っている伝説にこのようなものがある

『黒き龍現れ、世界は闇に覆われる。そして、人類はなすすべも無く滅びに向かう』と

その黒き龍が何を表しているのかは分からないが、その伝説は知らない者はいないと言われる伝説である

・・・だが、この伝説にはあまり知られていない続きがあった

『滅びを望まぬ人類に神からお告げ有り。白銀の狼現れ、黒き龍に相対する』

『狼の背から青年降り立ち、剣を振るう。黒き龍を討ち、救世主とならん』

どこかの小さな村にその剣が今も主人を待ち続けてると聞く・・・

三人称だけど勘弁してや（笑）

外伝はモンスターハンター（笑）

少女二人が密林に姿を隠し、河をうかがっている
少女達は重そうな鎧を着け、武器を装備していた
「ね～ベイ。本当にここに来るの～？」
赤い鎧を着けた少女が緑の鎧を着けた少女に聞く
「来るわよ。情報だと此処で水浴びをするって書いてあったんだから」
ベイと呼ばれた少女が言葉を返す
「でももう三時間は経つよ～。早くしないとクエスト失敗になる～」
赤い鎧を着けた少女が駄々をこね始めた
「五月蝿いわよキャラ！少しは我慢ができないの？！」
ベイと呼ばれた少女がキャラと呼ばれた少女を叱る
キャラと呼ばれた少女はうんざりした様に言った
「でも、情報なんて絶対正しいなんてわけないじゃん。だから、その情報は嘘だったんだよ～」
「もう。ギルドの情報に嘘なんて・・・」

無いと少女が言おうとすると、空から何かが降りてくる気配がした

「・・・来たわよ」

ベイと言う少女が指差した先には雌火竜と呼ばれるモンスターが降りてきていた

「う～。めんどくさい～」

キャラと呼ばれた少女は文句を言いながら戦闘体勢にはいる

「ぶつくさ言わないの・・・行くわよ！」

竜が少女達に背を向けている隙を狙ってベイと呼ばれた少女は竜の足下に潜りこんだ

「あ～めんどくさい」

キャラと呼ばれた少女は構えた銃を撃つ

弾は当たると弾け、異臭を撒き散らした

「グア？」

竜がキャラと呼ばれた少女を見る

「でやあああ！！」

ベイと言う少女が足下で武器の双剣を乱舞した

「ギャーーー！！」

竜は驚いてのげぞるが、直ぐに足下の少女を踏みつけようと足をばたつかせる

「させないよ～」

キャラと言う少女が注意を逸らせる為に弾を撃つ

竜はキャラと言う少女の方が厄介だと思ったのか、少女に向かって突進した

「当たらないよ～」

キャラと言う少女は前転してそれを避ける

「食らいなさい！」

竜が振り向いたタイミングを狙ってベイと言う少女が何かを投げた

（ピカーン）

「ギャーーー！！」

すると辺りが閃光に包まれ、まともに見た竜の目を焼く

「でやぁぁーー！！」

「いけ～～」

少女達はその間に追撃を仕掛ける

「グルルル。グオオオオオオーー！！」

視界が戻ると、竜は怒りの方向をあげ少女達に突進した

「当たらないわよ！」

「残念～」

少女達は軽々と避け、また攻撃を再開しようとする

だが・・・竜は彼女達が見た事の無い行動をしだした

「グオオオオオオ！」

体を回転させながら突っ込んできたのである

「え！」

「ちょ！」

二人は咄嗟に回避しようとするが、巨体が回転しながら動いているのだ

当然、周りに風の渦ができ少女達は巻き込まれ吹き飛ばされた

「ガハッ！」

「いった～！！」

少女達は鎧を着ていたせいかあまりダメージがない様に見えた

・・・が、竜が必殺の一撃を放つのには充分な隙を与えてしまった

「グオオオオオ」

竜の口に炎が見える

その竜が火竜と呼ばれる由縁の一つ、火球を放つ合図だ

「やばっ！」

「回避不可～（泣）」

少女達の目の前で火球は弾け、爆風が少女達を襲う

「キャー！」

「死ぬ～（泣）」

少女達は小石の様に転がり、竜はそんな少女達に止めと火球を放とうとする

「（あ、これは死んだ）」

「（あっけなかったな～）」

二人の少女は目を閉じ来るべく衝撃を待った

・・・だが、その衝撃が来る事は無かった

（ゴンッ）

「ギャーーー！！」

何かが硬いモノにぶつかる音がし、竜が悲鳴をあげた

「へ？」

ベイと言う少女が目を開けると、火竜は横を血走った目で見ていた

そこには一匹の狼と軽装な青年が立っていた

青年の手には石ころが有る

「これはでかいな。調理しがいがある」

「主よ。慢心だけはしないで下さい」

青年と狼が会話をしていると火竜が青年に向かって突進する

鎧を着ていない青年があれに巻き込まれたら簡単に命を落とすだろう

「逃げて！」

ベイと呼ばれた少女が青年に向かって叫ぶが、青年は逆に竜に向かって突っ込んでいった

「チェストーー！！」

青年が火竜に向かって蹴りを放つ

普通なら青年が力負けをしてぶっ飛んでいくだろう

・・・だが、少女の目の前には信じがたい光景が映し出されていた

「ギャーーー！！」

火竜は青年蹴り飛ばされ、河に突っ込んでいった

「嘘でしょ・・・」

「ありえな～い」

少女達が唖然とする中、青年は何処からか刀を取り出し構える

「調理開始だ！！」

青年はそう言い火竜に刀を振るう

「秘技・鱗落とし」

青年が刀を振るうと鱗が削ぎ落ち、火竜の赤い肉が見えた

「ギャーーー！！」

火竜は体を回転させ近づけさせない様にするが、青年は軽々と間合

いに入り刀を振るう
数分もしない内に火竜の鱗は殆ど削ぎ落とされてしまった
「見ておけ白！ここからが料理人の腕の見せどころだ！！」
青年は狼にそう言い、動きを変える
先程よりも数倍速く刀が振るわれた
「痛みを感じさせず、快楽に！！」
意味の判らない叫びをしながら青年は火竜を切り続ける
先程までと違い、火竜は痛みの咆哮をあげなかった
「ラストーー！！」
青年は火竜の頭に刀を挿し込み、火竜は動かなくなった
「嘘・・・」
「すご～い」
少女達が感嘆の声をあげていると青年は火竜を片手で持ち歩きだした
「肉確保ーー！！」
「これで、今日の夕食を確保できましたね」

青年は少女達に見向きもしないで帰ろうとする

「待って！！」

ベイと言う少女が青年に向かって声をかける

「ん？なんだ？」

「貴方・・・何者？」

少女がそう聞くと、青年は笑う

「・・・俺はただの料理人さ」

これが少女達と青年の初めての出会いだった・・・

外伝はモンスターハンター（笑）（後書き）

亮「・・・」

@「・・・」

亮「へたくそ」

@「ごふっ」

作者に９９９９のダメージ

@「自分でも分ってる事だが、まともに言われるのは堪えるな・・・」

亮「てか、なんで続く的な感じで終らせてるの？馬鹿なの？死ぬの？」

@「大丈夫だ。続きは書く気無い」

亮「・・・」

@「・・・」

亮「えええええええ！！」

@「何故驚くし？！」

亮「この終わりでいったら書くだろ普通！？」

@「え～。でもめんどうだし・・・」

亮「それでいいのか・・・」

@「んじゃ、夏休みまでに続きを書けって感想が１０以上きたら続きお書くよ」

亮「そうしとけ・・・」

@「まあ、こないだろうけどな（笑）」

亮「確かに（笑）」

@「さて、今回の世界は別荘の中の話だったが、次の外伝では亮を他世界に飛ばすんで、リクエストがあったら感想板まで！！」

亮「ちょっ！！聞いてないぞ！！」

@「リクエストが無かった場合、東方の世界かＩＳの世界に飛ばすんで！！」

亮「おいーー！！俺の話を聞けーー！！」

@「だが断る。んじゃ次回は本編進める？のでまた！」

亮「おい待て作者！！話はまだおわｔ（ｒｙ」

感想、リクエスト待ってま～す（笑）

さあ・・・木乃香ちゃんのご機嫌取りを・・・・（前書き）

@「あ～あ。学校の行事やらなんやらで書く暇が無いぜ・・・・」

亮「がんがれ」

@「は～。今回文章は少ないです」

亮「本当。テンション低いな」

@「だって・・・ねえ？」

亮「もういいや。本文どうぞ←」

さあ・・・木乃香ちゃんのご機嫌取りを・・・

な、なんとか１０００人分の材料を用意できたぜ

（乙～（笑））

現時刻１５時だよ（笑）

「主よ」

「どうした白？」

「今、外に団体がいるのだが・・・」

ん？もしかして刹那ちゃん達が来たのか？

好きなだけ友達連れてきて良いって言ったからな・・・

「何人位？」

「・・・３０人程かと」

「・・・はい？」

まさか、クラスの人全員連れて来たのか？

ま、良いが

「どうぞ～。扉は開いてますよ～」

扉を蹴り開けると確かに３０人は確認できる

「りょう兄～」

「お、木乃香ちゃん」

木乃香ちゃんがこちらに近づいて来る

あれ？何故だかデジャビュを感じるな～

「え～い！」

「ゴフッ」

ナイストンカチ

デジャビュですね

「言い訳はあるかいな～？」

昔から笑顔は敵への牽制、または威嚇として使われている

つまり、女性の笑顔を振り撒くと言う行為は周りに自分の存在をたらしめる効果があるのだ

現に今まで会った女性は皆、俺に狂気的な視線を浴びせてきた事がなんどもａ（ｒｙ

（長いからカットだ馬鹿野郎（笑））

「りょう～兄？」

「全くもってスミマセンでしたーー！！」

見事なジャンピング土下座を魅せる

「・・・」

「・・・・」

ヤバい、汗が・・・汗が止まりません

「・・・ホントりょう兄はしょうがないわ～」

「すまん」

「もうええよ～」

顔を上げると普通に笑ってる木乃香ちゃんが居た

「木乃香ちゃんも見ない間に可愛くなったな」

「も～。おだてても何も出ませんえ～」

なんとか危機は乗りきった・・・はず！！

「とりあえず、いらっしゃいませお客様。今日は皆様方の貸し切りです」

「りょう兄～似合ってへんわ～」

お黙り！！

（とうとう言われてしまったか・・・（笑））

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「店長さ～ん、ステーキ三枚追加で～」

「はいよ！！」

あ～忙しい忙しい

（もっとだ！もっと速く手を動かせ！）

嫌々いや、これでも充分速いだろ？！

「餡蜜３つ追加で」

「ぜんざいも３つ追加して下さい」

「バケツプリン１つ」

は？バケツプリンだと！？

この状況でそれを頼むとは鬼か！？

良いだろう、その挑発受けてやる

「「高速移動分身」」

「「「オオオオ」」」

少女達が感嘆の声をあげているが、今は別荘に行ってデザートを作ってくる事が最優先事項だ！

「そうい！」

「「「「速！」」」」

流石俺、なんとかなりそうだな

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

ふ～久々に色以外の料理で疲れたな・・・精神的に

「さて、ご飯も食べ終わった事ですし、質問宜しいですか？」

髪をパイナップルみたいに纏めている子が聞いてくる

「まぁ良いが・・・」

「あ、私は魔帆良のパパラッチこと、朝倉　和美と言います。それではまず・・・」

Q名前と年齢、趣味は？

A青木　亮。２４歳。趣味は料理

「では次に・・・」

Q好きなモノは？

A身内、客

Q嫌いなモノは？

A戦争、料理を馬鹿にする奴。身内を傷つける奴

「それでは、一番気になっていた・・・」

Q木乃香さんとの関係は？

A幼馴染み？家が近くだったから遊んでいた

「ほ～ほ～。そうですか・・・」

なんだ・・・この悪寒は？

「それでは最後に・・・」

Qこの中で好きなタイプは？

A見た目も大事だが、一番は中身だ。人間も料理もそこは変わらん。だから、その答えは知り合いの木乃香ちゃんと刹那ちゃんだ

「おー！これに対して木乃香さんと桜咲さん、返答は？」

「私もりょう兄が大好きや～」

「／／／」

ハッハッハ。ストレートに有難う（笑）

「ふむ。ありがとうございます、明日の魔帆良新聞でこの店の宣伝をしておきます」

「お、有難う。それじゃあ、今日のお代は値引きしておくよ」

朝倉サイコーと言う声が店に響いた・・・

オマケ

「あ、ついでの質問良いですか？」

「構わないが・・・」

Q初めてやった時の感想は？

A童貞にそれを聞くか、後で家の裏に来い。大人を教えてやる

さあ・・・木乃香ちゃんのご機嫌取りを・・・（後書き）

亮「うん。短いな・・・」

亮「・・・」

亮「・・・へ？俺一人？そりゃ無いわ」

亮「え～っと。作者は逃亡、色は食事でいないようです」

亮「・・・え～っと・・・」

亮「なんで俺一人であとがきなんだよ・・・」

ぶつくさ言わずに何かやれや

亮「は！これは神の御指示！と言うことで、次の更新は月曜日だ！楽しみにしててくれ！」

亮「おっと、外伝の事を忘れてた。現在作者はゼロ使を書いているが、ガチで期待しない方がいいな。原作崩壊ばっかしだし」

亮「まあ、それでも待っててくれると嬉しいな。んじゃ、また次回！」

感想まってま～す

さあ、フラグをたて・・・（うわ、何をするやめｒ　ｂｙ作者（前書き）

亮「今回は完全に作者が遊んだ。俺も予想外の事態だ」

@「

衝動で
やってしまった
後悔なし《字余り》

」

亮「反省しろ。ってか土下座しろ。今ならまだ間に合う」

@「だが俺は・・・今回の話はこの小説を書く前から決めていた」

亮「ナンダッテー（棒」

@「だから俺に後悔は無い！」

亮「まあ・・・良いか？」

@「って事で本編どうぞ←！」

さあ、フラグをたて・・・（うわ、何をするやめｒ　　ｂｙ作者

あれから一週間は経って

宣伝効果かは分からないが学生もけっこう来てくれる

値段を安目に設定してあるから学生が来てくれるのかな？

で、今は自分の夜食を買いにコンビニに来ている

ん？自分で作れと？

たまにはコンビニのオニギリが食べたくなるだろ？

（あるか？）

五月蝿い少し黙ってろ

（酷い・・・（泣））

まぁ現在、２１時のコンビニ前なんで若者達が駐車場でタムロってると思ってたんだが

〔シクシク〕

なんか・・・幽霊っぽい子が泣いているんだが？成仏させた方が良いか？

（美少女を成仏させるなんて勿体無い！）

まぁうん。無理矢理は駄目だよな

ちゃんと話を聞いて成仏させてやるか・・・

（へ？無視？無視ですか？）

あ～、誰か神の昇天の仕方知らないかな～

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

さよｓｉｄｅ

は～誰に話しかけても反応さえしてくれない・・・

やっぱり私は駄目な幽霊です・・・

「幽霊少女。そんな所で何を泣いているんだ？」

６０年以上も幽霊をやっているのに誰も気付いてくれない・・・

私ってそんなに影の薄い幽霊なんでしょうか・・・

「お～い、聞いてるか～？」

こうなったら幽霊らしく人を驚かして生きてみましょうか？

あ、私死んでるんでした

「・・・（ブチッ」

ううう。やっぱり友達が欲しいです

暗くて恐いです。幽霊なのに背筋が寒くなってきました

「いい加減に・・・」

あれ、そう言えばこの人さっきから誰に話しかけているんでしょうか？

誰も居ないのに・・・

「反応しろやーー！！」

〔痛い！痛い！止めて下さい！〕

アイアンクローをされています！

あれ？なんで私に触れるんでしょうか？

「・・・」

〔ううう。無視してスミマセンでした〕

頭が痛いです

「は～。で、なんで泣いてたんだ？」

〔は！・・・あの～私が見えるんですか？〕

「見えなきゃ話しかけるのは無理だろ・・・」

ううう。やっと私を見つけてくれる人ができました

〔（泣）〕

「ちょ！なんで泣くんだよ！？そんなに痛かったか！？」

やっと喋れる人ができました～（泣）

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｌｌｌ☆ｌｌｌ☆ｌｌｌ☆ｌｌｌ

いきなり泣かれて驚いたぜ

しかし、俺もいつの間にか霊を触れる様になったんだな・・・

これで、父さん達に近づいてしまった・・・

（大丈夫だ。お前はもう両親を超えたよ（キリッ）

止めてくれ・・・

〔あの～〕

「ん？どうした？」

〔さっきはスミマセン。いきなり泣いてしまって・・・〕

さっきは驚いたな。まさかいきなり泣き出すとは・・・俺の知っている幽霊は皆無駄に強いから

加減を間違えたと思ったぜ

「気にするな。それにしても、６０年も成仏できてないのは凄いな」

〔そうですか？〕

俺の知っている幽霊は皆、怨念が凄いから成仏してないのであって

怨念ももたないで６０年ももつなんてそうそうできるもんじゃないからな

普通ならとっくに悪霊になるか成仏する

〔実は私・・・幽霊になる前の記憶がないんです」〕

「ほう」

〔ですから、どんな未練が生前にあったのか・・・〕

成る程、だから長い間成仏してないのか・・・

「う～ん、成仏したいなら、させてやれるが・・・」

〔本当ですか！〕

だけどな～・・・

「痛いぞ」

〔い、痛いんですか！？〕

「前にやったところ、成仏前に魂が崩壊しちゃったからな～」

まぁ今は大丈夫だろ？

〔・・・自力で成仏します〕

「そうか」

ちょっと残念

〔あの・・・代わりになんですが・・・〕

「ん？何か俺にできる事があるか？」

殲滅戦は任せろ（バリバリ

（やめて！！）

そう言うなって。で、何？

〔わ、私と友達になって下さい〕

「ん？そんな事で良いのか？君が良いなら俺は構わないが・・・」

〔は、はい！お願いします！〕

ふむ。幽霊の友人はこの頃音信不通だからな・・・

「俺は青木　亮。君は？」

〔はい！相坂　さよと言います！〕

んじゃさよちゃんだな

「よし、んじゃ俺の店にでも来るか？」

〔へ？良いんですか？〕

「別に見せたくない物があるわけでもないし、一人じゃ寂しいだろ？」

〔ううん。ありがとうございます〕

んじゃ、店にＧＯ！

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「遅いぞ店主」

「なんでエヴァちゃんが居んの・・・」

ん？敬語はどうしたかって？

・・・木乃香ちゃんに似合ってないって言われたから止めたよ

「マスターは青木さんの料理が食べたいと、一時間前から来ておりました」

「茶々丸！」

うん。気に入ってもらえたらしいし、良かったわ

「それで店主、なんでお前の後ろに相坂　さよがいるんだ？」

「あ、やっぱりエヴァちゃんにも見えてたんだ」

〔見えてたんですか！？〕

流石真祖の吸血鬼だね～

「んじゃ、エヴァちゃんもさよちゃんの友達になってくれる？」

「ふん。それで私になんの利益があると言うんだ？」

ふむ、そうだな・・・

「エヴァちゃんに俺の秘密レシピの一つを食べさせてあげよう」

食べたら病み付きになる事間違いなし

「ほう・・・なら、早速食べさせてもらおうか」

「オーケー」

〔ありがとうございます、亮さん・・・〕

「ハッハッハ。友達なら普通だろ？」

まぁ任せておけ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

亮のーー！！

びっくり！？料理教室！！

（今回はどんな料理を見せてくれるんですか？）

まぁ焦るな。最初に材料を見せておこう・・・こいつだ！

（こ、これは・・・ゴールデンミート！？）

Ｙｅｓ！今回はこの肉を使った料理だ！

（ｗｏｗ。どんな料理になるか楽しみですね（笑））

さて、んじゃ料理開始だ

まず、この大王人参、皇帝芋、魂葱、ゴールデンミートを軽く炒める

注意は大王人参は普通の包丁だと包丁が折れるから気お付けろ

後、皇帝芋の芽は取ったら捨てずに残しておけ

炒める順番は大王人参→皇帝芋→ゴールデンミート→魂葱だ

（それでそれで）

大王人参に普通の箸が突き刺さる程度に柔らかくなったら鍋に入れ煮込む

そして、俺が作った毒いりスパイスルーと金箔を入れてよく掻き回す

ここで皇帝芋の芽を入れるのがポイントだ

（なんか、キラキラ輝いてきましたね（笑））

そしてこれを別荘に持っていって、中で数日寝かせたら完成だ！

（いったいどれほど寝かせたんですか？）

別荘の時間を千倍にしたから、３日ぐらいかな？

（よーやるな・・・描写されないのがまさしくご都合主義ですね（

笑）））

細けえ事はいいんだよ

で名付けて、王金カレー！

（何処かの成金が食べる様な輝きだな（笑））

炊きたての白銀米にかけて・・・んじゃエヴァちゃんに食してもらおう・・・

（・・・ん？これはレシピか？

ゴールデンミート
大王人参
皇帝芋
魂葱
スパイスカレールー
金箔
王水
→・・・は？）

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「さあ、エヴァちゃん食してくれ」

「・・・」

「どうした？」

あ、猫舌だから直ぐには無理か（笑）

「・・・これ、食べられるのか？」

「ハッハッハ。まぁ食べて見てくれ。死にはしないよ」

（魂は抜けるかもしれんがな（笑））

「・・・」

〔美味しそうですね～〕

さよちゃんがエヴァちゃんの周りをふわふわしながら言う

「マスター。ちゃんとフーフーしてから食べて下さい」

「分かってる！！」

エヴァちゃんはとうとう覚悟を決めて食べようとする

「・・・ええい！南無三！」

「・・・」

「・・・」

〔・・・〕

三人?でエヴァちゃんを見つめる

さぁ・・・どうなる!!

「・・・う」

〔「「う?」」〕

「うまＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＩ」

良し。ちゃんと口からビームを出している

正常な反応だな

「マスター!?」

〔りょ、亮さ～ん、エヴァンジェリンさんの口から光が～（泣）〕

「心配するな。普通の反応だ」

イヤ～良かった良かった

〔ふ、普通なんですか?〕

「はあ、はあ」

「大丈夫ですかマスター？」

「大丈夫だ茶々丸。あまりにも美味すぎてな」

イヤ～やっぱり、この反応は面白いね見てる分には

「さて、エヴァちゃん。約束どうり、さよちゃんの友達になってくれるかな？」

「ふん。ここまで美味い物を食わしてもらったから仕方がないな」

「良かったなさよちゃん」

〔ありがとうございます～〕

イヤ～良かった良かった

「言っておくが、私が相坂　さよの友になるわけじゃないぞ」

〔「へ？」〕

「ふん。影が薄くて姿が見えないのであったら、肉体を持たせてしまえばいいだろう」

ほ～。そんな方法があったのか～

「約束は守る。少し時間をもらうがな」

「さよちゃんはそれで良いか？」

〔え～っと・・・私、皆に見える様になるんですか？〕

「ああ」

さよちゃんは嬉しそうに笑う

〔ありがとうございます。エヴァンジェリンさん〕

「ふん。礼なら店主に言え」

ふむ。これは・・・

「「ツンデレってやつか？（でしょうか）」」

まあ、何はともあれ一件落着だな

おまけ～

そして、二週間後～

「相坂　さよと言います。よろしくお願いします！」

エヴァちゃんが肉体？なる物を造って、さよちゃんがそれに憑依？

して学校に通い出した

さよちゃんは木乃香ちゃん達のクラスに転入できた様だ

と、言うより既に席はあったから、復活と言う事になっているらしい

学園長にさよちゃんの在席を言ってみたら

直ぐに戸籍とかを作ってくれた

てか、あの人さよちゃんを知っているみたいだったが、もしかして知り合いだったのか？

まあ、さよちゃんはまた学校に行ける様になって嬉しそうにしてたし、どうでもいいかな

「亮さ～ん。三番台にシチューとカレー追加で～す」

「オーケー」

で、さよちゃんは放課後店にウエイトレスとして来てくれている

なんでも、お礼がしたいとの事だ

俺としては気にしなくても良かったんだが、さよちゃんの気がすまないらしい

まあ、さよちゃんがウエイトレスをやってくれるおかげでこちらも楽出来るから良いんだがね

「亮さ～ん。五番台、餡蜜8個追加で～す。うわ！」

（ドンガラガッシャーンっと。あれ、手伝えてんの？）

・・・さて、頑張りますか

さあ、フラグをたて・・・（うわ、何をするやめｒ　　ｂｙ作者（後書き）

@「って事で、今回は亮の無理難題料理の話でした」

亮「いやいや、確かにそれもあったがそれ以上に大事な事があったよね？」

@「ああん？何かあったか？」

亮「・・・」

@「・・・俺はただ、寂しがり屋な幽霊に肉体を与えただけさ」

亮「イイハナシダナー（棒」

@「でも、修学旅行には全員連れて行く予定だったから、別に問題は無い」

亮「ほう、修学旅行にね・・・って全員？」

@「って事で次回も読んでくれ～」

亮「ちょっと待て、今とても大事な事を言ってｎ（ｒｙ」

今回の亮の料理は参考にもなりません決して真似をしないでくださ

「できるか！！」

・・・誤字、感想は感想版まで

フラグ乱立！布石は打たれた！！（前書き）

@「題名の通り、今回はいろんなフラグが建つぞ」

亮「そのフラグの殆どが碌な物でもないはずが無い！」

@「ヒャーハー。生き残れ」

亮「うお！死亡フラグも建った予感！」

@「カラカラカラ」

亮「笑い方キモ！」

@「ガラガラガラ」

亮「ポケモン！」

@「・・・」

亮「・・・」

@・亮「「飽きたな」」

フラグ乱立！布石は打たれた！！

「歓迎パーティー？」

「そうや～」

ども、亮です

今現在、木乃香ちゃんと電話をしております

なんでも、木乃香ちゃんのクラスに新しい担任が来たらしいです

「それで、俺にそのパーティーの料理を作ってもらいたいと？」

「正解や～」

ふむ。木乃香ちゃんの担任・・・少し警告をしとくか・・・

「白。店の番を頼む」

「何処かに行くのですか主？」

「ああ。木乃香ちゃんの所にな」

（むむ。これはフラグの空気！）

それはもう違う誰かが建ててるって

（ほう。そこまで気配が読める様になったか）

・・・ただの勘だ

「御意」

「頼んだよ～」

料理を作って、さぁ行くぞ～

さて、木乃香ちゃんの担任は信用に置ける人かな？

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

そして俺は木乃香ちゃん達のクラスの２ー１に来た

「ちーす、（笑）屋で～す」

「あ、亮さん」

お、さよちゃんだ

見たところクラスに馴染めてる様だな・・・

「今日はどうしたんですか？」

「ああ。木乃香ちゃんに頼まれてた、料理の出前だ」

そうだ、出前も始めてみるか・・・

そしたら職員の人も頼んでくれるかも知れんし

「あ、木乃香のお兄さんだ」

「あ、店長さんだ」

「バケツプリン作って～」

料理をテーブルに持っていったら何か知らんが巻き込まれた

やっぱり、このクラスのテンションは凄いなオイ

「それで、新担任さんは何処に居るんだ？」

「今、明日菜が呼びに行ってるわ～」

明日菜ちゃんって木乃香ちゃんのルームメイトの子だっけ？

「あ、明日菜とネギ君が来たよ！皆準備して！」

む、どうやら来る様だな

もしや、魔力を駄々漏れさせて隠す気の無い奴か？

「うわ！」

クラッカーで驚いて入ってきたのは、１０歳位の少年

・・・マジか？

（現実逃避すんな、前を見ろ）

げ、幻術だと思いたい

てか、法律無視も甚だしいなオイ

「あれ？え～っと、貴方は・・・」

少年が話しかけてきた

まぁ、ただの料理人が居たら普通変に思うか

「青木　亮だ。料理人をやっている」

「あ、僕はネギ・スプリングフィールドと言います」

スプリングフィールド？

なんか英雄にそんな人が居た様な・・・

「・・・」

「どうかしましたか？」

「イヤ、なんでも無い」

こんな子供が英雄な訳が無いか

そもそも歳が合わないな

「木乃香ちゃんと刹那ちゃんを頼むよ」

「へ？」

まぁ、あんな子供が木乃香ちゃん達に手を出す事は無いだろ

刹那ちゃんも居るしな

「亮兄？」

「ん？どうした、刹那ちゃん？」

「色さんは来ないの？」

色・・・さん？

・・・え～っと、色の事で良いんだよな？

「あ～、色は部屋で寝てる」

「そう・・・ですか」

そういや、刹那ちゃんと色は後一人を入れて、夜の警備を組んでるんだっけ？

確か後一人は・・・

「真名ちゃんだっけ？」

「呼んだか、店主さん？」

うお、呼んでないけど来てくれた

「イヤ、呼んでない呼んでない」

「む、そうか・・・餡蜜でも持ってきてくれたかと思ったんだがな・・・」

イヤそれ、要求してるよね

「・・・何個？」

「うん？作ってくれるのかい？」

これは脅しと同じ気がするんだが・・・

「はいはい」

「なら５つ頼むよ」

「・・・食い過ぎない様にしろな？」

よくそんなに食えるよな、本当に

「よく言うだろ、甘い物は別バラだよ」

「でもカロリーは変わらないからふとｒ「女性にその言葉は禁句だよ」はいはい。銃を向けるなって」

女性ってめんどくさいね本当

「そう言えば、色はちゃんと仕事してるかい？」

「ちゃんとやっているよ。魔界の王なだけはあるね」

ああ、その事を知ってんのか・・・

「まあ、よろしくね。色、あんがい寂しがりやだから」

「ふむ・・・」

うわ、何かないのかって目をしてるよ・・・

「今度来たとき、俺の特製デザートでどうだ？」

「その依頼受けた」

まあ、色には学園の人間には正当防衛以外で手を出すなって言ってあるし大丈夫だろ

・・・さて、餡蜜でも作るか

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

・・・で、餡蜜を作ってまた戻ってきた訳だが

「あ～りょ～兄～おかえり～」

・・・クラスの中が地獄絵図となっておる

可笑しいな。出てってから数分も経ってないはずなんだが・・・

「さよちゃんは・・・」

「あ～亮さ～ん。どうしたんですか～？」

こっちも駄目だ。顔が赤い。呑まれている

「状況を説明してもらおうか、真名ちゃん？」

「誰かが酒をジュースに忍び込ませていたようだ。多分だが、鳴滝姉妹が悪戯で混ぜたんだろう」

は～。大丈夫か？このクラス・・・

てか、教師は何処へ行った！！

「は～。終集は自分達でやってくれよ？」

「私は餡蜜を食べてから逃げるとするよ」

イヤ、終集させろよ・・・

「りょ～兄～」

【ゴッツ～ン】

「ゴフッ」

木乃香ちゃんのステミタックル?!俺に１８７ダメージ

「あ～！木乃香さんずるいです～。私も～！」

【グィーーー】

次はさよちゃんからの捻り上げ?!イヤ、待って、そっちには曲がらな・・・

【ゴキッ】

アーーーッ

「・・・」

「刹那は行かないのか?」

「私は酒を呑んでないからな・・・」

「・・・そうか」

待って、刹那ちゃん、正気なら助け・・・

【メキメキメキボンッ】

ガーーーッアッ

（・・・言ったじゃん、『死亡』フラグの空気って）

もう・・・駄目っ・・・ぽい・・・

（（笑））

笑うなよ・・・

【バッタンキュー】

「あれ？りょ～兄？」

「どうしたんですか～？亮さん？」

【ブクブクブクブク】

「亮兄！」

「これは・・・呼吸が停止しているな」

「亮兄ーー！！」

オマケ

イヤ～久々に三途の川を往復してきたよ

（んな事できんの？！）

修行中に何度も往復してたからな・・・

おかげで死神の女の人と顔見知りになっちまったぜ

（へ～どんな奴？）

赤髪で変な鎌を持ってる人

なんでもサボルと直ぐに閻魔様が飛んでくるから大変らしい

（へ～）

あ、あと一回でも来たら冥界に連れていくとか言ってたな・・・

（・・・（あら？これってフラグが建ったんじゃね？））

どした？

（イヤ、なんでも無い）

？

（（笑）（それはそれで面白くなりそうだし、別に良いか））

.
.
.
?

フラグ乱立！布石は打たれた！！（後書き）

@「と言う事で、今回はフラグ乱立の回だったな。視聴者の方はいったい何個フラグを見つけられたかな？」

@「実は、今回のあとがきは、俺以外だれも居ない」

@「だから、やりたいほうだいってわけさ！！」

@「んじゃまず、リクエストの現状から」

@「難しい・・・非常に難しい。とりあえず、ギーシュ戦までもっていくつもりなんだが、俺の知識が足りないせいかまだ半分しか書き終わってない」

@「で、多分・・・てか見事にギャグになったから、リクエストしてくれた蒼月璃煌瑠＊さんは覚悟と絶望を持って見て下さい（笑）（まだ完成してないけどね）」

@「後、暇だったら夢小説なるものを書いてみようと思います・・・活動掲示板に（笑）暇だったら見にきて下さい。注、作者は恋愛物が壊滅的です」

@「では次回は、皆様もお待ちかねのあの騒動！！亮は生き残れるのか？！」

@「次回『惚れ薬？いえ、紅茶です』をお楽しみに！！」

感想待ってますよ～～～～

予定道理だ問題は・・・無い？（前書き）

亮「今回はカオスな展開になっております」

@「熱々の珈琲でも飲みながら見てください」

亮「・・・ずっと思ってた事があるんだ」

@「なんだ？」

亮「ギャグとカオスは別物だと思う・・・」

@「・・・マジで？」

亮「ああ」

@「・・・

予定道理だ問題は・・・無い？

どもども。喫茶？スマイル

出前も始めちゃいました（笑）

喫茶なのにって？

目指せ最高の料理人なんでね。料理屋まがいの事をしてみたかったんだよーー！！

（心から　声援送って　やっぱやめ）

ちくしょーー！！

てな感じで、今は中学校に出前の器を取りに行った帰りです

注文者が学園長だから、何かあるのかと思ったが何も無かったぜ

ん？誰かが言い争っているな・・・あれは木乃香ちゃんの担任と木乃香ちゃんのルームメイトの

「こんにちわ」

「あ、木乃香のお兄さん・・・」

明日菜ちゃんだっけ？

「こんなところで何を言い争ってるんだい？」

「イヤ、言い争ってなんか・・・」

声を荒あげていたら普通そう思うよな・・・

「で、なんの話をしてたんだい？」

「え！そ、それは・・・（汗」

「そ、そうだ！木乃香のお兄さんは料理人でしたよね！」

「ん、まぁそうだが」

なんで焦ってるんだ二人は？

「ネギが紅茶を入れたみたいだから飲んで見て・・・下さい」

そう言い明日菜ちゃんは担任からフラスコをひったくり俺に渡してくる

・・・そんなに敬語が言いづらいならため口で良いんだがな～・・・

「んじゃ、貰おうか」

ついでに俺は紅茶のいれ方も本場で教わってるぜ

【ゴクゴク】

「あ・・・」

「・・・」

・・・なんだこれ、あり得ないぞこれは・・・

「無味無臭・・・だと」

（イヤ、飲む前に気付けよ・・・）

実は分かってたりした

「・・・何もないわね」

「あれ？おかしいな・・・失敗かな？」

ん？何か有るのか？

「りょ～兄～」

む、これは木乃香ちゃんの声！

また、デジャブでステミタック・・・

「そぅい！」

木乃香ちゃんを咄嗟に避ける

殺気！なんでだ？！

「避けちゃだめやえ～りょ～兄～」

木乃香ちゃんの右手にはスタンガンが握られている・・・

は！もしやさっきのは惚れ殺し！

（知ってるのか雷電！）

ああ・・・それは、飲んだ者に好意を持った者が見ると好意がオーバーフローしてヤンデレと化す恐ろしい薬だ！

（な、なんだってーー！！）

「りょう兄は私のモンや、誰にも渡しはせんえ・・・」

・・・逃げよう

（・・・逃げろ）

窓からダイブ！

「あ！」

ハッハッハ。すまないな木乃香ちゃん、ここは逃がさせてもらうよ（笑）

【スタコラサッサ】

（志村～後ろ後ろ）

な～あ～に～？

「逃がさへんよ～」

魔力での身体強化ですかーー！！

いつの間にそんな芸当覚えた！？ってか知った！？

（愛、それは不可能の壁を飛び越える可能性・・・）

んな馬鹿なーー！！

「逃がさへんよ～」

あばばばば

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「何処行ったんや～りょ～兄～」

【ガタガタガタガタガタガタ】

「何処や～」

【たったったった】

「・・・」

行った・・・か

まさか、ゴミ箱に逃げ込む日が来るとは思わなかったぜ・・・

「よいしょっと」

さて、どうするか・・・

（とりあえずお前は人に見つからない様に隠れておけよ・・・）

オイオイ。さっきも言ったが薬の効果は飲んだ者に好意を持った者のみだぜ？

だったら、木乃香ちゃんや刹那ちゃんを警戒しとけば大丈夫だろ

（お前はここ一週間の行動を思い出してみれ）

ここ一週間？なんかあったっけかな・・・

ーーー☆ーーー回想１ーーー☆ーーー

「やっほ～おばちゃん。今日も良い野菜出してるね～」

「そうだろ？今日は何を買いに来たんだい？」

「んじゃ、ピーマンとナスとゴボウを頼むよ」

「そうかい、少し待ってな」

「了解しました～」

ん？何か店先で見た事がある子が・・・

【ジー】

「・・・」

【ジー】

「・・・林檎が食べたいのかい？」

【コクコク】

「お金は？」

【フルフル】

「・・・おばちゃん！林檎二つ追加で！」

「んじゃそれはサービスしといてあげるよ！」

「流石おばちゃん！優しいね！・・・って事でどうぞ」

「？」

「んじゃね～」

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

なんかあったか？

（他には）

ほ、他？なんかあったか？

（それの3日後だ）

3日後？

・・・？

ーーー☆ーーー回想2ーーー☆ーーー

世界樹の天辺で一休みしてたら

「お姉ちゃん！」

「だ、大丈夫！降りられるよ！」

なんか下から声がして見てみたらどっかで見たちびっ子が

世界樹の上に登りすぎて降りられなくなってる様だった

「危ないよ～・・・」

「だ、大丈夫だって！これぐらい・・・」

なんか、危なさそうだな・・・

「・・・よっと」

「「へ？」」

ちびっ子を持って

「よいしょっと」

はい、安全なとこまでするする降りて

「・・・」

「・・・」

「次からは降りる事を考えてから登れよ」

それで休憩を止めて、店に戻った

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

???

（その次の日は？）

え～っと・・・あ、そういや強盗を捕まえたな

ーーー☆ーーー回想3ーーー☆ーーー

「動くんじゃねえ！この娘がどうなっても知らねえぞ！」

「止めて下さい！人質なら私がなりますから！」

「うるせえ！てめえら全員人質だ！」

うは、保育園に強盗とか（笑）

「犯人に告ぐ。今すぐ子供達を解放しなさい！」

「う、うるせえ！一歩でも建物に入ってみろ、人質がどうなっても知らねえぞ！」

警察の人も大変だね～

ん？あの子って前、店に来た子じゃないかな？

良し。アイツの出番だ！

「くそ！交渉人はどうした！」

「後、数分で到着するそうです！」

お～困りならば俺を呼べ～

全てを片付けて見せるぞ～

「くそ！そんなに待てるか！」

「先輩・・・」

白黒曖昧な正義のヒーロー

後頭部へ必殺

「デストロイ！」

【ゴツン】

「グホッ」

「「へ？」」

ナイフをちゃんと回収して・・・

「後は任せましたよ～」

子供達に怪我が無くて良かった良かった

「・・・」

「・・・」

「・・・か、確保ー！」

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

なんだ？いったい何があった？

（・・・昨日は？）

昨日はやっちゃいけないネタをやった奴を更生させただけだが？

ーーー☆ーーー回想４ーーー☆ーーー

「君かわうぃーね！俺達と一緒に遊ばなーい？」

「ウホ。良い女だ。今すぐ俺達にヤラせないか？」

「え～っと・・・私、友達と約束してるんで・・・」

「え～そんな事言わないでさ～・・・ね。うぃーでしょ？」

【ガシッ】

「は、離して下さい！友達が待ってるんで！」

「良いこと。思い付いた、向こうの路地裏にでも連れ込まないか？」

「それうぃーね。んじゃさっそ「お前、昔を思い出せよ！」く？」

「お前言ったろ！一番になるって！その気持ち何処いっちまったんだよ！」

「ウホ。良いお「ダメダメ。そんな事言っちゃ！」・・・」

「ほら！上を見てみろよ！」

「「へ？」」

上を見ても

「なんも見えないよ（なにもねえよ）」

【ドゴンッ】

「「グハッ」」

「行くぞ！松〇、しゅーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーDOU」

【ヒューーーーーーーーーーーーーキランッ】

ふう。人二人を投げ飛ばすってけっこう大変だな

「え～っと・・・あの～」

ん？・・・

「お米食べろ！」

「へ?!あ、はい・・・」

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

(そういや、あの時は何がしたかったんだ?)

俺のソウルが疼いた。後悔はしていない

(厨二乙(笑))

で、何処に好意を寄せる部分があった?

(うん。俺の勘違いだったようだ。普通に帰れ)

そうだな。そうするか

「亮兄!」

【スカッ】

「刹那ちゃん・・・いきなり斬りかかるのは無しじゃない?」

「亮兄は私のモンや!誰にも渡さへん!」

まただよ(笑)

(諦めろ(笑))

・・・逃げよ

「覚悟！」

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

なんか今回、逃げてばっかりだな

（ヤンデレはヤバい（笑））

まぁ、しょうがないか・・・

「やあ、店主さん。こんな所でどうしたんだい？」

「あ、真名ちゃんか・・・」

大丈夫そう・・・だな

「どうかしたのかい？」

「ハハハ。薬のせいでね」

ホント、参ったよ

「それは大変だね。ところで店主、一つ頼みがあるんだが・・・」

「ん？なn」

【パンッ】

・・・

「私の為に一生餡蜜を作ってもらいたいんだ」

・・・もう嫌

オマケ

ふふふふ。ハハハハハハハ生き残ったぞ！

（お～い。大丈夫か（笑））

大丈夫だ。だ・が、これは報復行為をしても許されるよな！？

（お！何か悪い事を考えましたな（笑））

ハハハハ。まぁ見てからのお楽しみですよ

（それは楽しみだ（笑））

（「ハハハハハハ」）

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

薬味ｓｉｄｅ

「何処いったーー！！」

「こっちかーー！！」

【タッタッタッタッ】

なんで僕がこんな目に・・・

しかも男の人達に追われているんだろう・・・

「居たか？」

「イヤ、居ない。アッチに行くぞ！」

【タッタッタッタッ】

・・・行ったかな？でも本当にどうして追われてるのかな？

【ガラッ】

「ひっ」

「・・・」

「・・・」

ま、マトモな人・・・だよね？

「・・・ウホ。いいショタ」

ち、違ったーー！

side out

ーーーーーーーーー

アッーーーーーーーーーーーーーーー

（なんぞあれ？）

その名も《掘れ薬》

あれな男が飲んだ者を見ると無性に掘りたくなると言う薬だ

（お、恐ろしい・・・）

まぁ、今回の事で薬は恐ろしいと分かってくれたら幸いだな

（もしかして・・・怒ってる？）

はい。とてつもなく

（さいですか（笑））

オマケ２

「あれ？もしかして私、ハブラレました？」

忘れられてたさよちゃんでした（笑）

予定道理だ問題は・・・無い？（後書き）

@「注、この物語は決してネギアンチではありません今回は亮の怒りがスパークして起きた現象です」

亮「大丈夫だ・・・彼なら多分・・・」

@「まあ、男の初めては獲られただろうがな」

亮「・・・ネギ。すまん」

@「反省はしている。だが、後悔はしていない・・・だろ？」

亮「当たり前だろ？」

@・亮「「ハハハハハハハハハハハ」」

次回はテストがあるので、更新が遅くなるかも?!

確実に来週にはなるからね

で、来週の話だが・・・もしかしたら、感想が多ければハッチャケて連日投稿するかもよ（フリ）

んじゃ、次回あったら会いましょう

お久ぶりの更新だ（前書き）

@「え～まず最初に・・・

更新を一ヶ月もせず、本当にすみませんでした！！

心配して感想を下さったなし様本当にありがとうございました！！

忙しかったのもありますが、受験生というのもありまして家族が中々パソコンに触らせてくれないので更新が遅れる事に・・・

あ、後プレゼントをくれた天意無法の歌・・・長いなここで切るｋ「感想をくれた読者になんて態度をしてんじゃボケが！！」あべし！！」

亮「作者に代わり、天意無法の歌武鬼者　鬼龍院獣侍郎様、素敵な別荘をありがとうございます！面白可笑しく使わせてもらいます」

@「でも俺、ターミネータってどんなのか知らな「ググれカス」ひどいなおい！！」

亮「一ヶ月も更新を待ってもらったんだ、これくらいでもまだ足りないな・・・」

@「許してくれ～」

亮「だが断る」

作者が凹られています、本編を見て楽しんでいて下さい←

お久ぶりの更新だ

刹那ｓｉｄｅ

速く、速く亮兄に知らせないと

速く速く速く！

「亮兄！このちゃんが行方不明になっ・・・て」

店のドアを開けると亮兄は居らず、居るのは色さんと寝ている白さんのみ

「・・・何か用か？」

白さんが話しかけてくる

はっ！そうだ亮兄に急いで知らせなければ！

「亮兄は何処に？」

「主は所用で出かけているが」

くそ！こんな時に！

「いったい何処へ！？」

「用はなんだ？急ぎなら主に連絡するが・・・」

「それならなるべく速く！このちゃんが行方不明になったんです！」

そう白さんに言うと、白さんは眼を瞑り念話を行う

数分程すると、白さんは眼を開けた

「主に急ぎ伝えた。が、どうやらそなたがそんなに焦る程の事ではなさそうだぞ」

そんな・・・行方不明になっているのに焦るなって！

「もしかしたら、誰かに誘拐されたのかもｓ「主の横に居るそうだが？」・・・へ？」

どうゆう事・・・だ？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

やあ、どもども

現在私は地下にある図書館に来ております

滝があり、湖があり、そして・・・本が水に使っております

（謝れ！本達に謝れ！）

俺に言うなよジョニ～

お門違いとかそう言うレベルじゃねえよ

おっと。それでは、回想どぞ

ーーー☆ーーー回想ーーー☆ーーー

「何？幻の料理本とな？」

飯を食べに来た和美ちゃんがそんな話題を振ってきた

「はい。なんでも、幻の地下図書館に有るとか無いとか」

ふむ。幻の地下図書館ね～

「幻なのになんで噂があるんだ？」

「それはまあ、噂ですから本当かどうか・・・」

地下図書館ね～・・・暇なら探してみるか

「で、なんでその話題を俺に？」

「店主さんなら行ってくれる気がしましたから」

俺は冒険家じゃね～ぞ～

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

みたいな感じで来る事になったわけだが・・・

（冒険家じゃないんじゃね～んじゃね～の（笑））

なんか、地下に続くエレベーターっぽい物に俺は乗っただけだ

決して探しに来た訳じゃねえ

（ふ～ん・・・てか、上から声しねえ？）

お、気のせいじゃなかったか

なんかそんな気がしたんだよな～

「「「「「「「「キャー！」」」」」」」」

ひーふーみーよー・・・7人は居るな

（タイミング良く落ちてきたな（笑））

誰かの悪意を感じるな（笑）

・・・ってあれ木乃香ちゃんじゃん！

良く見ると一度見た事ある奴等ばっか！

（助けるかい？）

当たり前だろ！ｊｋ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

ふむ。落下中に５●●人気絶ね

てか、この高さから落ちたら常人だったら気絶するか・・・

「おい。狸寝入りしてる２人、さっさと起きろ」

「「・・・」」

ふむ、狸寝入りを止めないか・・・なら殺気を込めて・・・

「『起きろ』」

「「！」」

を！飛び起きて戦闘体勢か

まぁ反応としては悪く無いな

「グッドモーニング。朝の目覚めはどんな気分だ？」

勿論、殺気は止めておく

「あいやー、バレてたアルか」

「・・・」

ふむ。中国人っぽい子は警戒を解いたが、糸目の子は警戒を解かないか・・・

「驚かせてすまない。人が助けてるのに暢気に狸寝入りされたのが癪にさわってね」

（それで良いのか～（笑））

正当な理由があれば許される！

（ねーよ（笑））

「アイやー、すまなかったアル」

「貴殿の実力が気になって、試させてもらったでござる」

・・・ござる？

（今時、その語尾はねえな（笑））

「・・・忍者？」

「なんの事でござるか？」

うん。忍者だな

さて、警戒も解けたし

「なんで、上から落ちてきたんだ？」

「変な石像に落とされたアルよ！」

変な石像？もしかして、ガーゴイルか？！

ってか、それって防犯用のだよな多分・・・

「・・・んじゃ・・・なんで図書館に来たんだ？」

「頭が良くなる魔法の本を探しに来たアル！」

おｋ。完全に防犯用だなそれ

「そんな事より・・・」

中国人っぽい子が構えをとる

「私と勝負するアル！」

「Ｗｈｙ？」

なんでだよ・・・

「ホ、ホアイ？・・・楓、あの人はなんて言ったアルか？」

「・・・分からないでござる」

なるほど、この子達・・・頭が弱いのか

「Ｗｈｙだ。何故って聞いたんだ」

「そうアルか！」

「そうだったでござるか・・・」

うん。この子達に英語を言わない様にしよう

話が続かん

「で、なんで俺と戦いたいんだ？」

「強そうだからアル！」

なるほど・・・戦闘狂（バトルジャンキー）か

「いくアル！ハイィィ！！」

「よっと」

掌底か。口調的に中国拳法の使い手かな？

「ハイハイハイィィ！」

「よっはっそいっ！」

スピード的にまあまあだな。気を使ってはいるがあまり上手くないな・・・一般人か？

「ハイィィ！」

「足下がお留守だぞ」

足払い

【パーンッ】

「アル～！」

あ、やべ飛ばし過ぎた

（人は足払いで５ｍも飛ぶものなのか・・・）

【ガシッ】

いっけね、手加減失敗（テヘ

（笑えねえよ）

まぁキャッチは成功したから良くね？

「アル～」

うわ、目が渦巻きになってる！漫画みたい！

（・・・）

・・・笑えよ

「大丈夫でござるか、古殿！」

「だ、大丈夫アルよ～。世界が私を中心に回ってるアル～」

眼回ってるからな

「腕試しはもう良いだろ？」

「ううん。私の負けアル」

さて、俺も本探してさっさと帰らなｋ《主よ聞こえるか？》

《白か。どうした？》

《木乃香殿が行方不明であるらしい、至急帰ってきてもらいたい、と刹那殿が・・・》

木乃香ちゃんが行方不明？

・・・なる。お忍びで来たってわけね

《俺の横に居るから心配すんなって刹那ちゃんに言っといて》

《御意に。主も御気お付けて》

ふむ。お忍びでこんな所に魔本探しか・・・

誰かさんの悪意を感じるな・・・

「アル～」

とりあえず、起きてない奴等を起こすか

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「さて木乃香ちゃん、弁解を聞こうか？」

「かっとなってやった。後悔はしていない」

【ゴツン】

「・・・弁解を聞こうか？」

「りょ～兄は短気や～」

真面目に応えんからだ

「うう～。せっちゃんには伝え忘れただけや～」

「んじゃ質問を変えよう、なんで本を取りにここまで来たんだ？」

「明日菜達の為や～」

ほうほう・・・話を聞こうか

ーーー☆ーーー説明中ーーー☆ーーー

なるほど、テストで悪い点をとると小学校からやり直し・・・ね

そもそもね～・・・

「んなもん普通信じるか？」

「でもお爺ちゃんやし・・・」

・・・うわ。やりそうで恐い

「まぁ話は分かった。なら、なんで勉強しないんだ？」

「勉強しても駄目だからよ！」

ふむ。明日菜ちゃん達はそんなに頭が悪いのか？

「点数で言えば、明日菜は毎回２０点以下やえ～」

なん・・・だと・・・それは凄いな・・・

「ウチは違うえ～」

木乃香ちゃんはクリアね

「考えてみたら・・・先生なら真っ先に止める筈だよな？」

な、薬味君?

へ?邪険にしてる?ソンナワケアルワケナイジャナイカ

「うう。明日菜さんが無理矢理・・・」

「う・・・あ、アンタだってノリノリだったじゃない!」

ほうほう

「まぁ今回は俺が居たから良かったが、今度だけにしてくれよ?」

「そう言えばりょ~兄はどうしてこんな所におるん?」

気まぐれですな

「地下に続きそうなエレベーターが有ったから乗ったら此処についた」

正しく幻(笑)

(一応隠されてたっぽいけどな(笑))

俺の瞳は真理が見えるんだぜ(笑)

(厨二乙)

「で、また魔本探しでもするのか?」

「う~ん。魔法の本は上に有ったからな~・・・」

んじゃ諦めて勉強だな

「出口は滝の裏にあるから、とりあえずは勉強しておけ」

「そうですね！皆さん勉強しましょう！」

ふむ。先生の方はやる気だな

んじゃ

「飯にすんぞーー！！」

【ズコーーッ】

ナイスコケだな。君なら世界を狙えるぜ！

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

その後、出口に行ったらゴーレムが待ち伏せしていたから破壊しておいた

なんか破壊している最中に「やめてー」とか、「ワシじゃー！」とか聞こえた気がしたが気のせいだろうな

（学園長南無～（笑））

さて、皆が勉強しているなら俺は本を探しておかないとな

（さて、何処にあるかな？

1．本棚の上
2．水の中
3．滝壺の中
4．そこら辺（笑）

）

・・・とりあえず、1から探してみるか

ーーーー☆ーーーー探索中ーーーー☆ーーーー

ーーーー☆ーーーー探索完了ーーーー☆ーーーー

《必殺毒料理！お前はもう死んでいる》

《珍品？舌をも溶かすハードな味大全集》

・・・変なの見つけた

（これは読むしかない！正しくプゲラになる料理が作れる様になる！）

まぁ2と3も探してみるか・・・

ーーーー☆ーーーー探索中ーーーー☆ーーーー

《悪魔を誘う誘惑の香り?!ザ・ラフレシアｐａｒｔ３》

《これで君も暗殺者!簡単毒薬百選》

《退かぬ媚びぬ省みぬ!天にも還る味１３選》

《忘れていた母の味、思い出したく無い母の味・・・》

ーーーー☆ーーーー探索完了ーーーー☆ーーーー

・・・凄い最初と最後が気になる件について

（まさかのｐａｒｔ３（笑）１と２は何処へいった）

探したい・・・けどなんか木乃香ちゃんの方が騒がしいな

何かあったのか?

（行けば良いと思うよ（笑））

そうだな

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「フオォォォォ」

・・・

（ゴーレム復活！ゴーレム復活！ゴーレム復活！）

先程は手加減してやったが今度は手加減抜きだ・・・

「フオォォォォ「五月蝿い！」フオォォォォ！？」

【ズドーンッ】

まったく、学園長も遊びが過ぎるな

（分かってて殴った！？）

当たり前だろ？そもそもこのゴーレムは遠隔操作型だからな

まったくこの子達は一応一般人だし、木乃香ちゃんが魔法に関わっちゃ大変だろうに・・・

「ほれお前達、滝の裏の出口から逃げるぞ」

「わ、分かりました！」

ほれ、逃げろ逃げろ

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「何なのよこの壁は！？」

階段に壁が出来てて上がれないな

多分、問題を解かなきゃ先に進めないって寸法だろうが・・・

「わかいてんなまアルか？」

「・・・読めないでござる」

木乃香ちゃん以外はほぼ全滅だからな・・・

「りんねてんしょうや～」

あ、壁が壊れた

「待つんじゃ～」

このスピードだとゴー（学園長）レムに追い付かれるな・・・よし

「強行～突破～」

（ドラ〇モン！）

打つべし打つべし

壁を壊して時間短縮～

【ガラガラ】

ふむ。簡単に壊れるな

「フオォォォォ?!そんなのありかの~!?」

ビックリし過ぎて学園長の言葉遣いが可笑しいが、とりあえず打つべし!

「流石りょ~兄や~」

ハッハッハ。脱出だ~

「あ!あんな所にエレベーターが!」

まぁ乗ってきたから知ってる

「乗り込め~」

で・・・動かない

【重量オーバーです重量オーバーd】

諦めんなよ!

「みんな、服脱ぎなさい!」

ちょ!明日菜ちゃん何言ってんの!?

「速く速く！」

やめい！んな事しても変わらんに決まってるだろ！

「オーケー。俺が出るから、服脱ぐな」

「危ないよ店主さん」

ハイハイ。脱ぐな脱ぐな

「ま、どうせコイツがあると動かないっぽいしな（笑）」

盗難防止に本に魔法がかかってるっぽい

「後から帰るから心配すんな」

「ちょっと！何勝手に言ってｒ」

【ガシャン】

ナイスタイミングだエレベーター

褒めてやるよ

「って事で学園長。皆帰しちゃいました（笑）」

「気がついていたなら、乱暴せんでくれたら嬉しかったのう・・・」

「サーセン（笑）」

（それより交渉だ！見つけた本全部持って帰るぞ！）

だな

「って事で、本を借りて良いですか？」

「あの子達に勉強する場所を提供してくれるかのう？」

「俺の店なら喜んで」

うっしゃ、客が来るぞ～

で、木乃香ちゃん達は俺の店でもう勉強してテストに行った

結果はなんと一位だったらしい・・・予想外です

（可能性を信じてやるのも大人の仕事じゃね？（笑））

だって・・・ねえ。普通頑張ってもできないのが・・・ねえ？

（出来なかったんじゃない、やらなかったんだな（笑））

んな事より本でも読むか（笑）

（そうしとけ（笑））

お久ぶりの更新だ（後書き）

亮「今回、雑すぎないか？」

@「ちょっと急ぎすぎたからな・・・だが一番の原因は原作を忘れている事だ」

亮「また読めよ・・・」

@「一応読んだんだがな・・・だがうまく書けない」

亮「それはお前の能力がないんだよ。まあ、それは置いておいて、今回はアンケートがあるんじゃないのか？」

@「おおそうだった。まあ、別に合って無い様なもんだし、気軽に感想板に書き込んでくれると嬉しい」

@「

んじゃ

ネタに使う技が決まります下の６個から選んで下さい

1. 《必殺毒料理！お前はもう死んでいる》
2. 《珍品？舌をも溶かすハードな味大全集》
3. 《悪魔を誘う誘惑の香り？！ザ・ラフレシアｐａｒｔ３》

4．《これで君も暗殺者！簡単毒薬百選》

5．《退かぬ媚びぬ省みぬ！天にも還る味１３選》

6．《忘れていた母の味、思い出したく無い母の味・・・》

の中から選んで下さい

」

亮「まじでするのこれ？」

@「まあ、どうせ応えてくれる人はあんまり居ないだろうし大丈夫だろ」

亮「そうだな、こんな駄文に感想書いてくれる人は殆ど居ないよな（笑）」

@「あ、そういや報告忘れてた（笑）」

亮「なんだなんだ（笑）」

@「お気に入り登録件数４００件超えた！皆ありがとう！！」

亮「へ？」

@「頑張って完結するのでよろしく。まあ、後１年はかかると思う

がな（笑）」

亮「ちょ、おい、待て」

@「んじゃ次回もよろしく！」

亮「待てーーーーーーーーーーー！！！！！！」

喫茶スマイル　一杯目（前書き）

@「アンケートにご協力してくれた蒼月璃煌瑠＊様、グラムサイト2様ありがとうございました」

亮「結果として、《忘れられない母の味、思い出したくない母の味》になったが・・・」

@「いや～まさか即興で考えたタイトルが取られるとは思わなんだ」

亮「お前的には何をとって欲しかったんだ？」

@「ラフレシア」

亮「ｏｈ」

@「でもこっちの方が面白くなったからいんだけどね（笑）」

喫茶スマイル　一杯目

やぁこんにちは

此処は喫茶スマイル

晴れの日は学生達で賑わうちょっとした喫茶店

だが、雨の日はちょっとした相談室になる

疲れ迷っている学生がこの店に流れ着き胸の苦痛を打ち明ける場所

ああ・・・今日も雨だ

心が晴れない学生がまたこの店を訪れる・・・

（何やってんだ?）

・・・雨なんで学生達が来ないからワイルドごっこしてた

（ワイルド（笑）似合わねえ）

だってねえ～・・・雨の日だと学生があんまり来てくれないから暇なんだよ・・・

（まぁこんな脇道に逸れなきゃ来れない店にワザワザ雨の日なんか来る訳無いだろ（笑））

美味いと評判だと思ってたんだけどな～・・・

【カランコロン】

あ、客が来た

「いらっしゃい」

「・・・暗くないですか？」

おっと、ワイルドごっこしてたから照明落としてたんだった

これは失れ・・・

「いえ。今日はこの雰囲気で良いんです」

迷い俯いている学生さん一人ご案な～い

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

ｓｉｄｅ眼鏡っ子

雨の日は憂鬱だ

晴れの日も憂鬱で無かった時はないけど・・・

「御注文は？」

気紛れで脇道にそれたら見かけない店があったから入ってみたが変な店だな

照明はキャンドルだけだし・・・まぁそんな店もあるか

だけどメニューらしき物が無いのはな・・・

「あの・・・メニューは？」

「ウチはお客様の好きな料理を御出ししています」

どうぞ好きな料理を言ってくださいとか言う

全くもって普通じゃ無い

ここでもし、私がキャビアとかトリュフとか言ったら本当に出せるのか？

「それじゃあ、白トリュフとフォアグラのソテーキャビア添えで」

「・・・マジで？」

あ、驚きで口調が変わった

「・・・ホントに食べる気あるのか？」

「出せないんですか？」

「イヤ出せないわけじゃ無いが・・・」

言い訳してもどうせ出せないだけだろ・・・

「無理しなくて良いですよ。違うのを頼みますんで」

「・・・そこまで言われたら出そうじゃないか」

そう言い店主は厨房に入って・・・数分もしない内に帰ってきた

「・・・はいよ」

右手に画像でしか見た事のない、白トリュフとフォアグラのソテーキャビア添えを持って

「・・・本当に出てきた・・・」

「値段が高いだけでそんなに美味いとは感じないんだがな俺は・・・」

店主はそう言い頭を掻く

「・・・美味しい」

一口食べてみたら普通に美味しかった

「それは良かった・・・が、それけっこう高いんだよな」

店主にそう言われて気付いた

私、今そんなに金ねーじゃん!!

「ちなみに幾らですか？」

「２０００円」

・・・思ってたより異常に安い・・・偽物か？

「安すぎませんか？」

「現地調達してるから安目に設定できてるんだ」

店主は溜め息を吐くとまた厨房に入っていった

・・・とりあえず、持ち金はピッタリ２０００円だった

「あ、ついでにこれはオマケね」

そう言い店主がスープを出してくれる

「？・・・オマケですか？」

「そう、オマケ。食べ終わった後の口直しにでも飲んでみ」

とりあえず、この料理を食べ終わろう・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

食べ終わってからスープを飲んでみる

先程の料理より美味しかった
そして・・・
「なんか・・・懐かしい味がする」
食べた事なんてない筈なのに懐かしい・・・そんな味がした
「どう、美味しい？」
「ハイ。凄く美味しいです」
私がそう言うと店主が笑った
「やっと笑ってくれたか」
店主にそう言われて頬を触ってみると、確かに私の口は無意識に笑っていた
「やっぱり、女の子は笑顔が一番だよな」
店主の言葉に苦笑で返す
「今は客が居ないから、話したい事があるなら言ってみな。困った事、人には言えない事なんでも良いよ」
何故か私はこの人に話してしまった
話してもどうせ信じてもらえない下らない話を・・・

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

店主は私の話を静かに聞いてくれた

「・・・」

「・・・大変だったな」

その一言で私の涙腺は崩壊しそうになる

「信じてくれるんですか・・・」

「そんな顔で言われたら信じない筈が無いじゃないか」

店主はそう言って苦笑した

「他にもある？」

「実は・・・」

私は先月来た担任の事を言った

「・・・だよな～」

「へ？」

「普通は法律に引っ掛かるよな～・・・」

私以外にもまともな人がこの学校に居た！

「可笑しいんですよ！皆何も言わないで・・・ロボだって居るし！」

「・・・もしかして、茶々丸ちゃんの事？」

知ってるって事は・・・あの教室の関係者？

「あ、俺は木乃香ちゃんの兄貴分」

「近衛のですか？」

近衛のって事は・・・学園長の関係者！

「イヤ、警戒しないでよ・・・学園長が狂ってるのは俺も良く知ってるから」

「そうですか・・・」

・・・沈黙が続く

「はぁ～。好きな様に学校生活を送ってみたら？」

「へ？」

何を言っているんだこの人は・・・

「自分は常識人だ・・・なんて考えてないでさ、その非常識に乗れるだけ乗って楽しんじゃえよ」

「楽しむ・・・ですか？」

「そう。別に君が非常識に成れって言うんじゃ無いよ。ただ楽しむ、非常識をね」

ただ楽しむ・・・非常識を・・・

「疲れるかもしれないけど、それが一番楽だしね。それにあんまり常識、常識言ってても疲れちゃうだけでしょ？」

「普通に疲れるより、楽しんで疲れろって事ですか？」

「その通り」

難しい事を言う人だ・・・

「まぁ最初は普通っぽそうな子と遊んでみるとかさ、色々楽しめば良いんだよ」

「・・・難しそうですね」

まったく・・・苦笑しか出ない

「まぁ頑張りな・・・お、雨が上がったみたいだな」

窓の方を見ると、雨はもう上がっていて日の光が見えていた

「ごちそうさまでした」

「お粗末様。次は友達を連れてきな」

店主はそう言い笑う

私もこの店に来る前よりも自然に笑えた気がした

【カラン】

扉を開けると雨上がりの光が眩しかった

「疲れた時にはまた来な。次はもっと美味しい料理を作って待ってるから」

店主の言葉を背中に私は店をスキップで出ていった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

うん。気が晴れたみたいで良かった良かった

（お前にしては真面目だったな（笑））

俺は何時も真面目だぜ（笑）

（笑）（（笑））

【カランコロン】

「いらっしゃい」

さて、今度はどんな人が訪れｒ・・・

「おお。結構良い店だね」

まさかの高畑先生来日（笑）

あの娘の後とはなんと運が悪い（悪笑）

（魔法使いへの逆怨みですね分かりますん（笑））

ククク。あの娘の悩みは十中八九、魔法使いのせい（校長）だからな・・・

さぁ先生よ、お前の味覚は大丈夫か！！

見なくても良いオマケ

「どうぞ」

「お、和食だね。中々美味しそうだ」

それは良かった（悪笑）

先ずは一口、魚を食べる

「お、美味しいね。これは秋刀魚かな？」

「はい（笑）」

変化なし。次はご飯に口をつける

「お、ご飯も美味しいね」

変化なし

どうやら先生は味噌汁を最後に呑むタイプの様だ（悪笑）

「ん・・・」

食べ終わり味噌汁を呑む

さぁ・・・ショータイムの始まりだ

「なんだ、この味は・・・」

（3）

「不味いのに美味い・・・」

2

「しかも箸が止まらない」

（1）

「ごちそうさ・・・？」

（0）

「ガガガガガガガ」

崩壊する味覚（ディケイテイスト）

「お代はこちらにどうぞ」

「ガガガガガガガ」

（笑）（笑）

ドアを開けて

「お帰りはこちらです」

「ガガガガガガガ」

先生が店をでた

急いでドアを閉める

「そして～」

（Ｔｈｅ　ＥＮＤ）

【£＄♂¥＊§☆※！】

何が起こっているかは俺も知らん

（おお。ひどいひどい）

まさか、ただの《思い出したくない母の味》の料理を俺が作っただけで味覚を破壊する危険な料理になるとは思わなかったぜ・・・

（誰かに試したのか？）

実は学園長で試し済みだぜ（笑）

（お主も悪よのう（笑））

いえいえ神様こそ（笑）

（（笑））（笑）

喫茶スマイル　一杯目（後書き）

@「と、今回のアンケートに応えてくれた二人おめでとう。君達が高畑のオチを決めてくれた貢献者だよ（笑）」

亮「これは酷い」

@「今回は俺が考えた料理になったけど、感想版に今回みたいな料理を書いてくれたら高畑が食べるよ！！皆も考えて高畑を苦しめよう！！」

高「ちょっと待ってなんで僕g」

@「はいボッシュート」

【てんてんて～ん】

亮「・・・」

@「亮もあんまり遊びすぎるとこうなるよ？」

亮「おう、怖い怖い」

@「っち。んじゃ←が募集ね」

面白料理募集中
皆が考えてくれた料理を高畑に食べさせてオチを作るよ！
どんどん考えて高畑を虐めよう（笑）

亮「で、なんで高畑先生なんだ？」

@「別に学園長でも良いよ。そこに高畑がいたからそうしただけ」

亮「先生も不問だな・・・」

何も無い何も無い＝平和？（前書き）

@「今回は適当に書きすぎて書いてる俺も楽しくなかった！！」

亮「なら投稿するなよ・・・」

@「だってね～・・・気分？」

亮「駄目だ、こいつ早くどうにかしないと・・・」

何も無い何も無い＝平和？

平和だね～

（何のんびりしてんだよ・・・）

平和。素晴らしい！

何も無いとツマラナイ・・・

否

俺はこの平和を待っていたんだ！

この、客が来たら料理を作り、来なければ珈琲を飲んでのんびりする・・・なんと素晴らしい事か！

（・・・その平和も後数分で崩れ去ると預言してやる（笑））

止めてくれよ～せっかくの平和なのに～

「りょー兄助けてや！」

・・・まだ一分も経ってないんだが？

（数十秒の間違えだ）

ｏｒｚ・・・

「で、どうしたんだ木乃香ちゃん？」

「お爺ちゃんが無理矢理お見合いさせようとするんや～」

ほむ。成る程、だから着物を着てる訳ね

「・・・似合ってるよ」

「ありがとうな～・・・ってそんな事よりな～・・・」

ん？どうした？

「りょー兄もお爺ちゃんを説得してや～」

「ん？匿ってくれじゃなくて？」

あの人への説得って肉体言語が一番楽なんだよな・・・

「ウチにはりょー兄が居るゆうても聞いてくれへんのや～・・・」

「うほ。ナチャラルに告られたよ俺（笑）」

「誤魔化さんといてや～」

ほむ。まぁ木乃香ちゃんがそう言ってくれるならしょうがないな・・・

・

「んじゃ、ちょいと『Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ』しに行きますか」

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「失礼します」

紳士的にドアを破壊して入室

「・・・亮くんはドアに何か怨みでもあるのかのう?」

「いえいえ。ドアには怨みはありません」

だが、壊したくなる学園長室のドア・・・不思議!?

「で、何か様かのう?内容は予測できておるが・・・」

「なら、話は早いですね。木乃香ちゃんがお見合いを嫌がっているんで止めてあげて下さい」

「ワシはただ曾孫の顔を速くみたいだけなんじゃ・・・」

うわ。切実な願いだ(笑)

だからこそ、その幻想(笑)をぶち壊す!

「諦めて下さい(キッパリ」

「そこは亮くんがもらってくれると言う所じゃろう・・・」

だって・・・ねえ?

「俺はまだ犯罪者になりたくありませんから」

へ？魔法世界に不法侵入してる？

ばれなきゃ良いのよばれなきゃ

（おまわりさ～ん！ここに犯罪者予備軍がいます！！）

ははは。捕まえられるもんなら捕まえてみそ？

「むむむ」

「まぁ諦めきれないと言うなら方法が無いわけではないですが・・・」

「む。その方法とはなんじゃ？」

ここはかっこ良く（笑）

「時を待ちなさい（キリッ」

「・・・」

良し、帰るとするか

（愕然とする爺さんを余所にスタスタ帰るとかｗｗｗ）

イヤ、だってこれ以上言う事ねえし

「あ、そう言えばこれ以上お見合いを持ってきたらお爺ちゃんと一生口きかないって木乃香ちゃんが言ってましたよ」

「フォォォォ！そんな大事な事は先に言ってくれんかのう！」

俺には関係ねえし（笑）

さて、ドアを直して店に帰るか

（ドアの修復時間1．5秒ｗｗｗ）

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

学園長室を出て歩いていたら薬味の先生が飛んでいた

ちゃんと認識阻害結界を張ってから飛べよ・・・

「あ、こ、木乃香さんのお兄さん」

「よ。そんな急いでどうした？」

なんか知らんが慌ててるな・・・どうした？

「い、今のはＣＧです！」

「ほう。今のＣＧは凄い技術を使っているんだな・・・」

「は、はい！」

ワイヤーアクションにしときゃ良いのに・・・ワイヤーねえけど（笑）

「そ、それじゃあ僕は失礼します！」

「おう。なんか知らんが頑張れよ」

聞かん内に角を曲がってまた杖に乗って飛んでいった

だから、認識阻害結界を張れっちゅうのに・・・

てか、なんで俺は誤魔化されたんだ？

（お前ｗｗｗ裏の関係者だって言ってねえじゃんｗｗｗ）

それもそうだな・・・

お前いつの間に（笑）からｗｗｗに鞍替えしたんだよ・・・

（きｗｗｗぶｗｗｗんｗｗｗ）

そうか（笑）

（ｗｗｗ）

・・・ＵＺＥＥＥＥＥＥ！

この後、薬味先生が襲われたとかなんとか

いや～俺には関係無いし別に良いよね？

if　もし、原作通りの展開になっていた場合・・・

「よう、薬味の坊主。木乃香ちゃんに何やらかしちゃってくれてんの？」

学園長に木乃香ちゃんを探して欲しいと依頼される
←
探す
←
発見
←
あれ？薬味と木乃香ちゃんが一緒にいるよ？

←
薬味何さらしてんじゃゴラ!!↑今此処

「木乃香さんのお兄さん・・・」

「あ!りょ～兄～」

「おす木乃香ちゃん。ちょいと薬味君を借りていいか?」

へ?何をするって?俺の口ではとてもとても・・・

「ええ～で～」

「ありがとう木乃香ちゃん!!さあ逝こう薬味君。空の彼方まで!!」

「へ!ちょ、待ってk」

聞こえない～聞こえない～

大丈夫。ちょっとマッチョなお兄さんの所へ逝くだけだから

【アッーーーーーーー！！】

（もう、何も言うまい・・・）

良い判断だ

おまけのおまけ　　今日の学園長

「ん？これは亮君が置いていってくれたのかのう？」

亮が帰った後、机の上に弁当箱の様な物が置いてあった

《何時も仕事で疲れている学園長に疲れが吹っ飛ぶものを作りましたゆっくりご堪能下さい》

「ふぉふぉふぉ。亮君は気が利くのう・・・どれ、一口味見を・・・」

【パクリ】

「おお。美味い！もう一口・・・」

【パクリ】

「本当に美味しいのう・・・全部食べてしまおうかのう」

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「ふむ。ご馳走様・・・？」

【ゴオオオオオオオオオオオオ】

その後、学園長室は光に包まれたと言う

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「あ、追伸置き忘れてた・・・」

《ＰＳ，体の疲れが吹っ飛び、意識もぶっ飛びます。注意して食べて下さい》

とりとめもなく終わる

何も無い何も無い＝平和？（後書き）

@「ということで、今回の学園長へのお仕置き（いやがらせ）はあかつき様の疲れが全て吹っ飛ぶが食べたら死にかける（不味すぎて）料理、見た目は1流、味は１００流の料理（笑）になりました」

亮「俺が作ったせいで味も一流になっちまったが、まあ効果は同じだから良いっしょ？」

@「学園長へのいやがらせが目的だからな（笑）次回もやるつもりだ」

亮「あれ？次は高畑先生じゃなかったか？」

@「おっと、そうだったな・・・んじゃ両方でいくか」

亮「おお。怖い怖い」

@・亮「（笑）（笑）」

@「おっと、そう言えば次回はあのお方からもらった別荘に亮が行く予定だ
更新は明日になる！！・・・多分！！」

亮「大きな声で言う事じゃないな・・・てかゼロ魔は？」

@「・・・あ」

亮「こいつ完全に忘れてたよ・・・」

@「な、夏休み終わりまでには投稿します！！期待しないで待ってて下さい」

亮「期待しないでって・・・あ、逃げるな！！」

作者が逃げたので続きは次回！！

外伝　別荘が届きました（笑）（前書き）

@「前話に書いた様に、今回は天意無法の歌武鬼者　鬼龍院獣侍郎様から頂いた別荘に亮が行きます」

亮「行くのは良いが・・・本編で使う機会あるのか？」

@「一応、使い方は考えてある」

亮「ほう。それはどんな？」

@「ネギ又は小太郎の修行」

亮「ほうほう・・・へ？」

@「もちろん魔力・気を封印しての命がけだ」

亮「・・・やめたげてよ」

@「・・・善処する」

亮「完全に殺る気だこいつ！！」

外伝　別荘が届きました（笑）

ある日、気付いたら俺の部屋に大型のダンボールが置かれていた

色と白が言うに

「覆面を被った変な男が持ってきた・・・」

「爆発物では無いようでしたので主の部屋に置かせてもらいました」

ふむ・・・開けてみるか？

【パカッ】

・・・別荘？あ、手紙発見

《ある方がお前にプレゼントを贈ってくれた。まぁ大事に使えｂｙ俺》

・・・なんだネ申からか

「・・・入ってみる？」

「逆に聞こう、入らない理由があるか？」

さぁレッツＧＯ

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

基点となる家は和風の良い感じの家

京都の実家に似ているからコッチとしては嬉しい

「・・・亮、何か居る」

「ん？」

色が指差す方を向くと誰かが居た

「・・・貴方が私のマスターですか？」

「ああ。多分な」

その人物はマスター登録完了と言う

「私はこの家の掃除、周辺の整備の為に創られた機械人間、通称《ターミネーター》です」

でんでんでんでん的な曲が聞こえてくるな

「マスターのお名前は？」

「ああ、俺は青木　亮」

名前の登録完了と彼女は言う

「君の名前は？」

「創られたばかりの私に名前があると御思いですか？」

彼女が毒づく

やべ、この子毒舌だ（笑）

「んじゃ名前を決めよう」

「繊細かつ可愛らしい名前を期待します」

注文が多いな！良し決めた

「ロボｋ「却下します」何故に！？」

「最初がロで始まる様な安直かつ、不快な名前は全てお断りです」

クソ！なら・・・

「ネウｋ「舐めているのですか？」まぁ待て。一寸待て」

何処からそんなガトリングを出したんだよ

「私の中に内蔵されている兵器の一つです。主にマスターのせっｋおっと、拷問などに使う予定です」

「心が読まれた！？そして、使う事がえげつねえ！」

「マスターは顔に出やすい体質ですね・・・そして五月蝿い」

やめて！そんな目で俺を見ないで！

やっぱりこの娘毒舌家だわ

「・・・タミ」

「良いのですが・・・それは略しただけでしょう？」

「うん・・・」

「別のでお願いします」

う～ん・・・良い名前な・・・

ここでネタにすると本気で撃ってきかねないからな・・・

「姫百合なんてどうだ？」

「・・・まぁそれなら良いでしょう。私はこれから姫百合と名乗ることにします」

ほ。気に入ってもらって良かった

「では、外に行って食材を捕ってきて下さい。私は夕飯の準備がしたいので」

「へ？ここは姫が捕ってきてくれるところじゃ・・・」

「私みたいなか弱い乙女があの様な野蛮な奴等を相手に出来るわけないでしょう？」

（それは無いな）

神は言っている、それは無いと

「なるべく速く、そして多くお願いします」

銃を向けるな。避けきる自信があっても恐いんだから

「私はお腹が減っていますので」

「ん？ご飯は食べるのか？」

「私は大部分が機械でできていますが、重要部分は人間と変わりません」

食べた物はエネルギーになるらしい

それ以外にも魔力供給や気の供給でもＯＫとか・・・

中々便利だな

「まぁ分かった。だが、料理するのは俺だから、姫は掃除でもしててくれ」

「分かりました」

良し。色、行く・・・ぞ？

「貴方の連れなら既に布団をひいてお休みになられました」

「なん・・・だと」

なら、叩き起こして連れて行くか

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「・・・眠い」

「我慢しろ。美味い料理が食えるかもしれないぞ」

すると色の目が光輝く

【キラキラワクワク】

効果音まで出てるよ

（はよう。材料捕りに逝けや）

まぁ待て。まだ焦るような時間じゃない

（ロボ娘に撃たれるぞ～（笑））

「・・・亮」

「なん・・・だ？」

色が指さす方向には帯電している何かが居た

「なんじゃありゃ？」

「ゴガアァァァーー！！」

早くも臨戦態勢！？

「ガアァァァァ！」

突っ込んできた奴を咄嗟に刀を出して防御する

てか、コイツ速いな！

「・・・喰らえ」

色が影で動きを止めようとするが

「ガア！」

寸前のところで避けられる

危機察知能力も高いようだな・・・

「あの雑種の名前はジンオウガ。電気を身に纏い、周囲を警戒する牙獣種です」

種がちゃんとしてるなら雑種じゃないんじゃ・・・

てか、なんで姫はいるんだ？

「掃除は一分で終わらせてきました。それより私と連れの方で動きを封じます。そしたら貴方の全力をあの雑種に決めて下さい」

「へ？全力？」

出したのが英雄と戦った時だからもう二年も前だな・・・

「私に貴方の実力を見せてみて下さい」

「・・・オーケー。魅せてやるよ」

さて、何％まで出せるかな・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

姫百合ｓｉｄｅ

見た限りだと、マスターは剣の扱いに長けている筈

いったいどんな剣技を見せてくれるのか・・・

「もし、亮に剣の技を期待してるのなら、さっきの言い方じゃ悪手・・・」

「？何故・・・ですか？」

あの筋肉ではあの雑種を普通に斬り捨てる事はまず無理だと私の脳内では出ている

「・・・見てれば分かる。本気の亮は・・・」

足止めをされた雑種にマスターが近づく

そして、雑種の前から消えた

「剣技を使う必要が無い・・・」

雑種は一瞬にして地面に倒れ伏した

「あり得ません・・・」

私の目で計測したところ

秒速数百ｋｍは出ている・・・

「・・・言った通りでしょ？」

「・・・ええ。全くもって分かりませんでした」

面白い方がマスターになりましたね

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｌｌｌ☆ｌｌｌ☆ｌｌｌ☆ｌｌｌ

そして、俺と色は夕飯を食べて別荘から出てきたんだが・・・

「ふむ。小さい割には良くできた良い家ですね」

「なあ、なんで姫が居んの？」

普通、向こうで俺が来るのを待つよね？

「あんな所にマスターは私の様なか弱い少女を置いていこうと考えてたんですか？」

「か弱いって・・・自分で言うか普通・・・」

てか、か弱いの基準って高かったんだな・・・

「マスターは鬼畜ですね・・・外道、ロリコン、鬼畜。ここまでくると清々しいです」

「おい待て、俺はロリコンじゃねえ！！」

「ではそれ以外は認めると言う事ですか・・・」

「人の揚げ足をとるな！！」

あ～もう。コイツの毒舌なんとかしてくれ！！

外伝　別荘が届きました（笑）（後書き）

フラグ・機人の心が発生しました
フラグ・機人の食事が発生しました
モンスターハンター・ユクモ編が開通しました・・・

@「って事でゲストの姫百合だ」

姫「姫百合です。どうぞよろしく」

亮「ちょっと待てーー！！なんで此処に姫が居るんだ！そして、上のはなんだ！！」

姫「五月蝿いですマスター。その口を糸で縫合しますよ？」

亮「へ？あ・・・すいません」

@「はっはっは。上のはフラグと新たな外伝へのルートだ」

亮「ルートは分るがフラグって？」

@「まあ読者もなんとなく分ると思うが、今回のは茶々丸が食事を出来るようになるフラグと、姫百合が亮の仲間になるフラグだ」

亮「？姫百合はもう家族だろ？」

姫「残念ですが、まだ好感度が足りません」

@「って事だ。まあ、信用はしてても信頼はしてないってやつだ」

亮「へ～・・・でどうすれば良いんだ？」

@「フラグは俺が回収を忘れていなければ全部回収する予定だ。ルートは読者がルートを書けと感想板に書いてきたら書く予定」

姫「まあ、全ては作者の力量しだいって事ですね」

@「まあ、そういうこった」

亮「そういや、姫の名前はどうやって決めたんだ？」

@「のり」

姫・亮「「は？」」

@「本当は読者の人に考えてもらおうかな～って考えてたけど、めんどくさいからやめた」

亮「うわ～・・・で、その結果がこれか」

姫「マスター。発砲の許可を・・・」

亮「どうぞどうぞ」

@「ちょ、ま、やめｔ「レーザーキャノン発射」うＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡ」

亮「乙。・・・ん？」

姫百合の花言葉・・・変わらない愛らしさ、誇り

亮「・・・まあ、合ってるんじゃないかな？」

@「やああべえええええてえええ！！」

姫「貴方が死ぬまで撃つのをやめない」

@「ＧＡＡＡ

不快に思われたのなら本当に申し訳なく思います
この様な駄文でもまだ見放さないでもらえるのならありがたく
これからも頑張っていこうと思います

それでは皆様、また次話であいましょう

シリアス（笑）（前書き）

@「今話はタイトルの様にシリアス（笑）の練習話だ」

亮「？なんか特別な事でもあるのか？」

@「今話はお前視点が主軸・・・では無く、他の転生者の視点が中心だ」

亮「へ～そーなのかー」

@「まあ今後出番の無いモブキャラのな（ボソッ」

亮「シリアス（笑）なんて言うんだから、少しは真面目に書いたんだろ？」

@「まあな。今話でお前の大体の性格が完全に決まった」

亮「確かに、プロローグからの俺の性格は所々変わってるもんな・・・」

@「まあ、ぶっちゃけ俺がノリで書いてるせいなんだけどね（笑）」

亮「は～。んじゃ、本文行くぞ～」

@「おっと、言い忘れてた。今話は少々残酷な描写、グロ描写の様なものが入りますので、その様なものが苦手な方は閲覧を控えた方が良いと思われます」

@「まあ、自分の力量が無いせいでそこまで伝わらないと思いますが、一応の警告をさせてもらいます」

@「それでは、本文をどうぞ←」

シリアス（笑）

俺の名前は神代　殺夜

神様に生き返らしてもらった転生者だ

生き返らしてもらった場所は魔法先生ネギま！

時間軸は丁度ネギが来て、エヴァが事件を起こす前だ

なんでそんな時期に送ってもらったかって？それは知らん

神様が勝手に決めたんだ

幸い、能力は俺が望んだ能力を貰うことができたからな

ふっふっふ。貰った能力で無双してヒロインを確保だ！！

・・・はじめは刹那でも狙うとするか

原作的に一番狙いやすそうだし

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

で・・・見つけたのは良いんだが・・・

「せっちゃ～ん。りょー兄の所行こ～」

「分かりました。お嬢様」

「せっちゃん、普通に呼んでな～」

「でも・・・このちゃん？」

「♪ほな行こう♪」

どういう事だ？刹那と木乃香はこの時期に仲直りをしていないはずだ・・・

原作と違っている？

・・・尾けてみるか・・・

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

刹那と木乃香は変な店に入っていった

俺はこんな店は知らないし、原作にも無かった筈だ

やっぱり原作と変わっている

・・・そう言えば神はイレギュラーがあるから、それを先ずは排除しろと言っていたな

もしかして、此処にイレギュラーがいるのか？

【カランコロン】

「いらっしゃいませ！お一人様ですか？」

「あ・・・ああ」

なんで此処にさよが居るんだ！？

訳が分からない・・・

「？初めての方ですよね？」

「・・・ああ」

「この店はメニューがありませんのでお好きな料理をたのんで下さい！」

さよはそう言うと他のテーブルをまわりにいった

考えろ俺。何故こんな風になった？イレギュラーはなんだ？

考えれば考える程訳が分からなくなる

「・・・ご注文は決まりましたか？」

「・・・お勧めは？」

俺がそう聞くとさよは腕を組んで考えている

原作では幽霊だったが、俺の目の前に居るのは確かに肉体がある相坂　さよだ

「ん～・・・ざる蕎麦ですかね～」

「んじゃ、それで」

「分かりました！」

にこやかにそう言うとさよは厨房らしき所に入って行った

・・・数分後、出てきたのは俺が原作で見た事の無い男だった

「ほい。あんた、ざる蕎麦だよね？」

「・・・ああ」

「んじゃほいっと」

男は俺の前にざる蕎麦を置くと厨房に帰っていった

間違いない。イレギュラーはアイツだ

俺はアイツを排除する為に動く事にした

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

亮ｓｉｄｅ

俺は今、学園の外れにある雑木林に来ている
理由は俺宛に手紙が置いてあったからなんだが・・・
「・・・誰も居ない」
はい、誰も居ません
十中八九悪戯です。本当にありがとうごZ・・・来たか
「・・・待たせたか」
「アンタか」
現れたのは昼間に来た客の男
俺とは面識は無い筈だが・・・
「なんで此処に呼ばれたか分かるか?」
「すまんが、覚えが無いな」
俺がそう言うと男は笑い出す
「ククク。ここまで原作を壊しておいてよくもいけシャアシャアと・・・」
「?原作ってなんだ?」

頭が逝っちゃってるのか？

「ああ。原作を知らないのか・・・それじゃあもういい」

「！？」

男が何処からともなく出したナイフを投げてくる

「ここで死ね！」

何だってんだよ！！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺が神からもらった能力は３つ

一つは投影魔術

これは武器を創造できる良い能力だ

「うお！危ねえ！」

二つ目は無限の魔力

これはまだ魔法を知らないから肉体強化位にしか役に立たない

最後の一つは・・・

「ちっ！許せ！」

男が何処からともなく出した刀で俺の腕を切り裂く

意味も無いのに

「なっ！」

男が驚くのも無理はない

何故なら切り裂いた俺の腕がいきなり生えてきたからだ

そう。最後の能力は不死身

俺はどんな攻撃を受けても死ぬことは無く

どんな魔法ももろともしない

まぁ痛いがな

「・・・」

男の顔が絶望に歪む

そして俺はそれを見て笑った

さぁ、ショータイムはこれからだ！！

「開け我が固有結界！眼前に居る敵を排除せよ！」

固有結界・地獄の門

周りが真っ暗な闇に包まれる

そして現れるは地獄の門

「・・・この門をくぐる者は一切の希望を捨てよってか？」

男が言ったように、この門に入ったら即座に死ぬ

それは俺も代わりない・・・が

この固有結界内では俺がルールだ！

全ての事象は俺に味方する

「じわりじわりとなぶり殺してから門にぶちこんでやるよ」

「それは怖い怖い」

男が軽口を叩いているが、内心は見なくても震えているのが分かる

「大丈夫だ。お前が居なくなった後は俺がヒロインとイチャイチャしといてやるから」

「・・・」

ピタと男の動きが止まった

「ヒロインって誰の事だ？」

「お前の店に居たさよや木乃香の事だが？」

俺がそう言った瞬間、世界が歪んだ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

亮ｓｉｄｅ

いやね、俺だけに付きまとう位ならまぁ適当にあしらってやるつもりだったけどさ・・・

「手前にもう一度だけ聞く。誰に手を出すって言った？」

何？俺を始末した後、木乃香ちゃん達に手を出すっての？

「聞こえなかったのか？お前の店に居たさよや木乃ｋ「黙れ、しゃべるな」お前が聞いたんだろ？！」

これは・・・あれだ

ヤルか？

幸いにもこの何とか結界のお陰で外から魔力を感知されなさそうだし

「お前・・・嘗めてるのか」

魔力を解放するのは何年ぶりだっけかな？

確か、色と最後に修行したのは三年前だっけ？

「まぁ・・・あれだ」

手前の最大の不幸は俺の琴線に触れちまった事だ

side out

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

男が首に掛けているネックレスを握り潰す

そしたら、目に見える程の魔力が男から噴き出してきた

「覚悟は・・・出来てるな？」

男の言葉に身体が震え出す

男から射ぬかれる様な殺気を浴びているせいだろう

だが・・・俺は不死身だ

それに此処は俺の固有結界の中・・・敗ける要素なんて無い

「・・・」

・・・筈だった

【ズブシュ】

男が消える

不快な音が聞こえると同時に視界が横にスライドした

「・・・へ？」

「首を斬っても喋れるのか・・・不死身って便利だな」

男が何かを言っているがそれどころじゃない

首を抑えないと視界が動いてしまう

「バラバラにしたら死ぬか？」

声が聞こえると共に視界が四方八方に別れる

【グシャグシャグシャグシャ・・・】

凄い痛いが意識はある完全に身体がバラバラにされた様だ

痛みを声に出したくても声も出ない

「・・・うお！再生しとる！」

痛い痛い痛い

再生した脳の部分に刀を突き立てられる

「力を吸え紅桜」

後は呆気なく、意識は暗闇に溶け込んでいった・・・

亮ｓｉｄｅ

・・・逝ったか

それにしてもホント便利だなこの妖刀は”力”と名の付くモノは何でも吸収する事ができる

（・・・相手の再生”力”を吸収したのか？）

そうだ。別に生命力を吸収してやっても良かったんだが、そうすると魂は逝く事がなくずっと刀の中だからな・・・

（・・・なんだかんだで優しいな（笑））

優しいか？・・・それはねえよ

（そうか（笑）良く言うだろ？闘いには慣れても殺しに慣れるな（笑））

まぁ・・・当たり前だな

（殺すのに少しでも躊躇うならまだましな方さ）

・・・身内の為なら躊躇いは無い

父母、木乃香ちゃん、刹那ちゃん、色、白、さよちゃん、姫・・・

それと親しい客の為ならな・・・

シリアス（笑）（後書き）

亮「いや～この妖刀便利だな～」

@「俺が考えた厨二武器の中で最強の性能をほこる武器だからな」

亮「あれ？一番はなんでも切り裂く魔剣じゃなかったか？」

@「能力吸収で余裕でした（笑）」

亮「・・・まあ、どうでも良いか」

@「まあ、それは置いといて。やっとお前の本性が書けたわけだ」

亮「だけど、結構前に俺は自分でんな事を言ってなかったか？確か最初の方」

@「あ～言ってたね～。でも、実行したのは今回初めてだし・・・」

亮「あ～。確かに大体は見逃してんな～魔法世界で」

@「まあ作者的に、殺られる前に殺る。主人公はフリーダムの設定でいく予定だ」

亮「・・・と言うと？」

@「原作で確実に殺すキャラが居るって事よ」

亮「ん？なんで？」

@「おいおい。お前の信念はなんだ？」

亮「それは勿論・・・身内を傷つける＝デストロイ」

@「もう見ている皆さんにはお分かりであるだろうか？ヒントは京都編より後」

亮「んじゃ京都へんは入らないのか？」

@「・・・ああ、入らん」

亮「？俺はこれと言って思いつかないが・・・」

@「まあ、その時になったらのお楽しみって事で。分った人は感想板まで！！」

亮「作者が思いつくなら原作読んでる人ほぼ全員が気が付くだろ・・・」

@「まあ、だろうな。んじゃ、次回！！」

誤字、変な言葉当を見つけたら感想板までお願いします
後、面白料理・外伝の要請当が有っても感想板まで！！

第3回！オリキャラ紹介（前書き）

@「と、エヴァ編に入る前に、タイトル通りオリキャラ紹介始めるよ～」

亮「何故前のやつに書かないんだ・・・」

@「今回はＦａｔｅ風に書いてみた！！」

亮「まさか・・・Ｆａｔｅ　Ｅｘｔｒａを久しぶりにやったから書きたくなったなんて言うなよ？」

@「・・・」

亮「・・・」

@「んじゃ、いってみよう！！」

亮「図星かよ！！」

第3回！オリキャラ紹介

@「んじゃ、主人公から始める」

名前：青木　亮
性別：男
容姿：顔は中の上で、瞳が片方蒼いオッドアイ。髪は黒で身体は一応鍛えぬかれている

身体能力：A～EX（能力により変動）
魔力：F－AAA（封印開放時）
気：F－AAA（封印開放時）

スキル
『真理の瞳』（A）
そのモノの真理を見る事ができる
幻術などの相手を惑わすものが効かない

『道具を操る能力』（A）
道具の限界値を引き出す事ができる
自分の身体以外の限界値を出すことはできない

『避ける能力』（AA）
自分に当たる攻撃を自動で回避する能力
ただし判定は保有者の危機感で決まる

『封印解放』（AAA）
封印されている魔力と気を解放する
気は本気の時にしか使わない

『妖刀紅桜』（ＡＡＡ）
亮の愛用武器
力を吸収する能力を持つ

『料理の才能』（ＡＡＡ）
至高の料理を作る事ができる
食べた人物の敵意を下げたり戦意を下げたりなど、多数の効果がある

@「こんな感じだ」

亮「前とあまり変わってないな」

@「Ｆａｔｅ風に書きたかっただけだからな」

亮「で、次は色か・・・」

名前：色
性別：女？
容姿：見た目は幼女。髪は黒、両目は翠色をしている。顔は上の中

身体能力：Ｂ
魔力：ＥＸ？
気：Ｃ

スキル
『影使い』（ＡＡ）
影を操る能力

ありとあらゆる影を操作する事ができる

『暴食』（ＥＸ）
影を使ってあらゆるモノを食べる事ができる
たべたモノは色の腹の中（亜空間）へ消える

『魔王の威圧』（ＡＡ）
精神が弱い相手を跪かせる能力

@「こんなとこか？」

亮「最後の魔王の威圧ってなんぞ？」

@「色が本気で切れた時に使う能力。一度使ってるっしょ？」

亮「？・・・ああ。警備のあの時にね」

@「あれはまだ本気じゃなかったが、本気を出すと大抵の奴は跪くぜ」

亮「なんと凶悪な（笑）次は白か・・・」

名前：白
性別：？
容姿：封印をしていて今は普通の大きさの狼。白銀の毛をしている。
本々の大きさは龍以上ある

身体能力：ＡＡＡ
魔力：Ｂ
気：ＡＡ

スキル
『忠誠心』（ＡＡ）
主の命令に忠実
1を頼まれたら6までやる事ができる

『野生の直感』（Ａ）
突然の出来事に直感で対応することができる
暗殺（Ａ）以下を無効にする

『魔法障壁』（Ｂ）
魔法生物特有の障壁を使うことができる

『狼（フェンリル）の王』（ＥＸ）
魔法生物の頂点の証
魔法生物が攻撃をしてこなくなる

亮「へ～白って魔法障壁が使えたんだ・・・」

@「魔法世界の生物は大体使えたろ？」

亮「使われる前に捌いてました（笑）」

@「規格外が・・・」

姫「次は私の番ですね」

@・亮「「居たのか！？」」

名前：姫百合
性別：女・・・と言う設定
容姿：顔は上の中、金髪、紅眼。何時もメイド服を着ている

身体能力：Ａ～ＡＡ
魔力：Ａ
気：Ａ

スキル
『メイドの力』（ＡＡ）
掃除洗濯、家事ならなんでもこなせます

『武装展開』（ＡＡＡ）
内に隠されている武装を展開する
マシンガン、ミサイル、レーザー、核ば・・・ｅｔｃ

『未来予測』（Ａ）
大体の大まかな未来を予想する事ができる
規格外には意味をなさない

『Ｓ』（ＥＸ）
毒舌が行き過ぎると発動する
Ｍ気質の者は問答無用で言うことを聞く様になる

亮「何これ最後の怖い」

@「M気質じゃなくて良かったと思えるな」

姫「今からMにしてあげましょうか？」

@・亮「全力でお断りだ」

姫「残念」

@「んじゃ、第三回オリキャラ紹介はここまでだ」

亮「本編でまた逢おう」

姫「それではさようなら」

第3回！オリキャラ紹介（後書き）

ランクは
Ｅ＜Ｄ＜Ｃ＜＜Ｂ＜＜＜Ａ＜＜＜＜ＡＡ＜＜＜＜＜ＡＡＡ＜超えられぬ壁＜ＥＸ

@「Eは一般人レベルって事になってる」

亮「俺のFはなんだ？」

@「ゼロ」

亮「！」

@「要するに一般人以下って事だ」

亮「なんて事だ」

姫「封印を解かないと一般人以下ですか・・・無様ですね」

亮「ぐは」

姫「と、言うより家畜ですか？おっとそれは家畜に失礼ですね」

亮「ちくしょーー！！」

亮は逃げ出した

エヴァ編に入るよ～（前書き）

@「エヴァ編に入るぜ！！」

亮「だからどうした」

@「・・・」

亮「・・・」

@「（しくしく」

亮「（何故泣く！！）」

@「このコーナーのネタも尽きてきたんだよ・・・」

亮「速い！尽きるの速い！」

@「・・・嘘だよ」

亮「そうか」

@「・・・（亮が今日は冷たいです）」

エヴァ編に入るよ～

（お前、昔を思い出せよ！）

どうしたんだ？藪からスティックに？

（お前、昔はあんなにピュアだったじゃないか！）

いや、何がどうしてそうなった？

（初心に還れと言う事だ）

駄目だ。全く意味が分からない・・・

（お前は俺と逢った頃は普通に料理をさせてくれー！！って叫んでたよな？だが、今はどうよ？）

・・・

（お前、自分から普通じゃない生活に突っ込んでるぜ（笑））

そうだった・・・俺はなるべく普通で居ようとしていたんだ

それが・・・いつの間にかに自分から不自然に突っ込んで行っている

・・・確実に母さん達の修行（地獄）のせいだ・・・」

（今ならまだ間に合う！さぁお前の本質を思い出すんだ！）

おお神よ。貴方の導きに感謝します」

（苦しゅうない。時間はたっぷりとあるんだ、少しずつ直していけ）

おお神よ。アーメン」

「先程からブツブツと五月蝿いぞ。お前はクリスチャンにでもなったのか？」

「？口に出して言ってたか？」

「ああ」

ふむ。少しテンションが上がりすぎたな

「で、エヴァちゃん。今日は機嫌が良いけど、何か良い事でもあったのか？」

「ククク。聞きたいか？」

「んじゃいいや」

そう聞くって事は聞いて欲しいと言うわけだろ？

なら俺はそれを逆の意味にとるぜ

「おい待て！そこは何か有ったのかと聞く所だろ？！」

俺を普通に当てはめるとは浅はかなり

逆に言ってくれるまで聞く気はないぜ☆！

（先程の誓いは即座に破られた！！）

は！しまった！これも母さん達の呪(しつけ)いか！

「マスターは店主さんに話を聞いてもらいたくて此処に来たのだと思われます」

「茶々丸！余計な事は言うな！」

ほうほう。それならば聞かなければならないな

「オッケー。ならば先程のセリフからテイク2といこう。で、何かあったのか？」

「ふ。何、これから封印が解けると考えると笑いが止まらないだけだ」

笑いが止まらない！？しまった！エヴァちゃんの料理に入れた笑い茸の効果が強すぎたか！？

「茶々丸ちゃん！直ぐにオペの準備だ！エヴァちゃんを死なせはしないぞ！」

「分かりました。マスターもう少しの辛抱です」

「へ？」

明かりを点けて部屋を清潔にする

【カッ】

「これより術式を開始する」

「ちょっと待て！何をすｒ「麻酔」「はい」キュー」

麻酔完了。五月蝿くなくなったので術式再開だ

「メス」

「はい」

うお！刃物を持つと材料を斬りたくなるぜ。目の前にはエヴァちゃん・・・」

【カッ！】

「何をするつもりだーー！！」

「甘い！」

これ程速く目覚めるとは・・・真祖の吸血鬼恐るべし

「マスター。お体は大丈夫ですか？」

「立派な男の娘ですよ（笑）」

「何誤解するような事を言ってるんだーー！！」

エヴァちゃんで遊ぶの楽しいね（笑）

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「成る程。薬味先生の血を吸って封印を解除するね～・・・」

「ふん。アイツが封印を解きに来ないからしょうがないだろ」

・・・あれ？

「エヴァちゃんの封印って魔法でされてるんだよね？」

「そうだが？」

ふ～ん・・・あ～そう

・・・この程度なら俺も解けるな・・・」

「何？今なんて言った？」

「ん？何か俺が言ったか？」

また口に出してたか？

・・・今日は口が軽いな・・・

「解けるとかなんとか・・・」

「あ～。この程度の封印なら解けるってね・・・」

【シ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ン】

・・・何、この無駄に長い沈黙

「この封印が解ける・・・だと」

「イヤ、実際母さんの封印の方が厄介だし・・・」

エヴァちゃんの封印は魔力で力づくで封印してるだけだしね～

母さんの方はね～

「周りの魔力を吸収して強化&封印された人の魔力を吸い上げ強化だし」

しかも、気も封印できるしな～・・・

「アイツ以上の規格外がいるとは・・・」

「まぁ頑張って封印解いてね♪」

「ふん。貴様の手を借りずとも解いてみせるわ！」

うんうん。その意気その意気

「だけど無理だけはしないでよ。俺も常連客が来なくなっちゃうと寂しいし」

「ふん。てこずる事も無いわ」

なら、良いんだけどね

その次の日、茶々丸ちゃんに渡したネックレスの術式が発動した

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

次の日、俺は買い物してる時に茶々丸ちゃんを見つけた

「あれ？今日はエヴァちゃんと別行動？」

「はい。マスターは学園長に呼ばれて今は別行動です」

「そうか・・・今からウチの店に来るか？」

「すいません。今から猫に餌をやりに行かないといけないので・・・」

猫に餌か。ウチの近くにも何匹か居たから、そのお仲間かもな・・・

「そうか。んじゃ気お付けてな」

「はい。失礼します」

茶々丸ちゃんはそう言って去っていった

術式が発動したのはそれから数十分程経った後だった

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

茶々丸ちゃんに何かがあった

術式はそれを教える為の物でしかない

まぁ少々の魔法障壁も形成できる様にしてあるが、急がなくちゃ・・・

反応があったのは人気が無い場所だ

「大丈夫か茶々丸ちゃん!?」

そこには・・・

「キュ～～」

「兄貴ーー！！」

「ちょ！ネギ大丈夫なの？！」

「・・・」

何ぞこのカオス

茶々丸ｓｉｄｅ

猫に餌をあげているとネギ先生達に襲われてしまいました

「油断しました。ですがお相手します」

「僕を襲わないとエヴァンジェリンさんに言って下さい」

「すいません。私はマスターの従者ですので・・・」

ネギ先生が神楽坂さんを強化し、神楽坂さんが私の隙を作りだした瞬間を狙う

見事な主従関係です

「魔弾の射手光の１５矢！」

後ろに猫達が居るので避ける事ができません

ああ、マスターすみません。私が動かなくなったら猫への餌をお願いします・・・

【所有者の危険を感知。防御障壁《反射》を発動します】

私に魔法が当たる瞬間、光が私を包み込みました

「あう～」

「ネギ！」

「なんだー？！」

身体への損害無し

どうしてでしょうか？ネギ先生の魔法は確実に私に当たった筈なのに・・・

「大丈夫か茶々丸ちゃん！？」

店主さんが血相を変えて走ってきました

「・・・身体に問題はありません」

「そうか・・・良かった」

何故店主さんが心配をするのでしょうか？

「何故・・・心配をするのですか？」

「・・・」

店主さんは笑いながらなら答えてくれました

「茶々丸ちゃんが常連客だから・・・かな？」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「常連客だから・・・ですか？」

「そうだな」

最初の客と常連客は大切にしろ

師匠にそう言われたからな

さて・・・

「明日菜ちゃん。薬味先生を連れて帰りな」

漂ってる魔力からして、茶々丸ちゃんの防御障壁を発動させたのは

薬味だろ

大方、エヴァちゃんを倒すために先に茶々丸ちゃんを倒そうとしたんだろうな・・・

まぁまたやるってんなら俺が手を出すが・・・

「えっと・・・分かりました」

明日菜ちゃんが薬味を連れて帰る

「さて茶々丸ちゃん?猫に餌はやったかい?」

「・・・はい」

「ならウチの店に行こうか?そろそろエヴァちゃんも来てる頃だろうし」

「分かりました」

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

あの薬味先生はまだ子供だからな先に従者を潰すなんて姑息な事を思い付くわけが無いな

誰かがそうする様に促した?誰だ?

明日菜ちゃんはあり得ないな

彼女は多分真っ直ぐな性格だ。そんな娘が薬味に提案するわけない

なら、高畑先生？

あの人ならあり得ない訳じゃないが・・・

てか、この事は学園は知ってたのか？

知ってたなら・・・ククク

「何を一人でほくそ笑んでいるんだ？」

「ククク。なんでもないよ（笑）」

エヴァちゃんの事は多分知ってるんだろうな

じゃなきゃ薬味を放っておくわけがない

「学園長はエヴァちゃんが薬味を狙ってるのを知っているの？」

「ふん。ジジイは私に小僧の踏み台になって欲しいらしいな」

エヴァちゃんを踏み台？そりゃまたけっこうなこったな・・・

「エヴァちゃんは一応真祖の吸血鬼だしね」

「何が一応だ！」

魔力も無し、身体能力も見た目のまんま

この状態で真祖を名乗っても・・・ねえ

「ふん。封印が解けたら貴様程度・・・」

無理だな（笑）

「で、薬味を襲撃するのは何時にする予定？」

「何故貴様にそれを教える必要があるんだ？」

それは・・・

「面白そうだから見学に行く為（笑）」

「来るな！」

ええ～良いじゃん教えてよ～・・・

今日の高畑・学園長

「アンリ・マユ風の黒いシチューです（笑）」

「りょ、亮君どうしてワシの目の前にこれを置くのじゃ？」

「学園長に食べてもらいたいからですよ（笑）」

学園長は冷や汗が止まらない

「きょ、今日はお腹の調子が悪くてのう・・・」

「大丈夫です。お腹に優しいシチューですよ（笑）」

「しかしのう・・・」

「食べてもらえたら木乃香ちゃんとの婚約を・・・」

「いただこう」

学園長は一瞬にしてシチューを飲み干した

「ありがとうございます」

「ぬおおお

「ぬおおお

エヴァ編に入るよ～（後書き）

@「って事で今回は蒼月璃煌瑠＊様のアンリ・マユ風の黒いシチューでした」

亮「呪いと言われると母さんの呪術を思い出すな・・・」

@「どうしてだ？」

亮「御神木に張り付けにされ、１０８の煩悩をとり憑けられ、呪いの抵抗を高める為と言ってあらゆる呪いを・・・」

@「もういい。話すな」

亮「ああ。あれも考えれば良い思い出・・・」

姫「・・・（ニヤリ」

亮「なわけないだろ（笑）」

姫「・・・（ショボーン」

@「（何時の間にこいつらこんなに仲良くなったんだ？）」

カモ、危機一髪！！（前書き）

@「今回は学園に来た時のカモの話だ」

亮「俺視点じゃないんだな？」

@「今回はカモの視点だけだ。カモの視点から学園の怖さを知るのも面白いだろ？」

亮「麻帆良に怖いとこなんてあったか？」

@「それは見てからのお楽しみだ」

姫「フフフ」

カモ、危機一髪！！

俺っちの名前はカモ

泣く子も黙るオコジョ妖精だ

今、俺っちは麻帆良学園って所に居る兄貴の所に向かってる

理由は簡単だ。兄貴に匿ってもらう為だ

俺っちは紳士の魂が疼いて時々女性の下着を盗んじまう癖がある

それのせいで俺っちはお尋ね者のオコジョ妖精だ

だが、兄貴に匿ってもらえれば追われる事は無くなる

兄貴は何せあの千の呪文の男の息子だ

その兄貴が大事にしているオコジョ妖精に手を出せる訳がねえ

ククク。先ずは兄貴を見つけなけりゃいけないが・・・

グッ！また魂が疼きやがる

これは何処かで補給しなければ・・・

「・・・」

お！良い所に可愛い娘ちゃんが！ククク。ちょっと補給させてもらうとするか

「・・・」

では、失礼して・・・

「・・・！」

【ムギュ】

「キューー！！」

俺っちの尻尾が！痛い痛い！

「・・・材料ゲット」

「キュー？」

今・・・この娘、材料って言ったか？

「あんまり美味しそうじゃ無い・・・」

そんな残念そうな顔で言われても俺っちが困っちゃうぜ（汗）

「でも亮なら・・・」

へ？嬢ちゃん何処へ連れて行こうと言うんだ？

「美味しく料理してくれるかも・・・」

「キュー！？」

く、食われる！この嬢ちゃん、俺を物理的に食う気だ！

「・・・逃がさない」

「キューー！！」

あ、これ死んだかも

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「元の場所に戻してこい」

「材料・・・」

「食わないからな」

なんか知らんが助かった！

旦那の恩は俺っち一生忘れねえ！

「しかもそれ・・・オコジョ妖精だろ？」

「！」

「・・・知ってる」

「！！」

知ってて食われるとこだった！

「お前も喋れよ。今は客も居ないから喋れるぜ」

「だ、旦那も裏の世界の人だったのか・・・」

「ん？まあな」

でも、そんなに強くねえ筈だ

魔力も感じねえ

「旦那の名前は？」

「ん？青木　亮だが・・・」

・・・聞いた事がねえな

やっぱり、そこまで有名じゃなさそうだ

「有難うございやした。この恩は一生忘れやせん」

「おう？次は捕まるなよ」

それじゃ、失礼！

「亮。ご飯・・・」

「はいはい。作るから少し待ってな？」

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

ふう。なんとか九死に一生を得たな

そういやここは魔法使いの溜まり場みたいなもんだった

次は慎重に行こう

「・・・」

む！メイドが歩いているだと！

しかも、ミニスカ！

これは行かざるおえない！

「・・・」

カモ逝きまーーす！！

「甘いですね」

【ムギュ】

クッ、またこの展開か！

「オコジョ妖精ごときが私の下に入ろうなどと浅はかです」

【ムギュムギュ】

おお、そんなに踏まないで！目覚めちゃう！変な性癖に目覚めちゃうから！

「ここですか？ここが良いんですか？この淫獣は？」

兄貴すまねえ。俺っちはもう駄目かもしれねえ

「大丈夫ですよ。仲間は沢山居ますから・・・」

おお、そこ！そこが・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「兄貴・・・待たせたな」

「カモ君！」

ふふふ。兄貴には俺しか居ないからな

俺は何時でも兄貴の助けになるぜ

「こんのエロオコジョが！」

【バキッ】

「ギャフン！」

クッ嬢ちゃん。良いパンチじゃねーか・・・

だが、まだ姉御には敵わねえな・・・

「もっと俺っちを殴れーー！！」

「へ？な、何？このオコジョ・・・」

さぁさぁさぁさぁ

「俺っちにもっと快楽を与えてくれーー！！」

「イヤーー！！ちょっと！こっち来ないでーー！！」

逃げ切れると思うなよ嬢ちゃん！！

「・・・カモ君が可笑しい・・・」

俺っちはいたって普通だぜ兄貴

カモ、危機一髪！！（後書き）

亮「・・・」

@「・・・」

亮・@「「何これ怖い」」

姫「フフフ。私にかかればNをMに変えるなんて造作も無いんですよ」

亮「鬼や！ここに鬼がおる！」

@「あばよ」

【ヒュー】

亮「あ！作者逃げるな！」

姫「さあ、貴方も・・・」

亮「ち、近寄るなーー！！」

亮「母さん達の拷問(修行)の方が辛かったな」

姫「ま、負けた・・・」

亮の性癖がロックされました
亮は精神安定（S）が身に付きました
亮がストレス発散をしたいようです・・・

面白料理は随時募集中！！
どんな料理でも亮が美味しく料理するよ！！
誤字、間違いを見つけたら感想板に報告してね♪

エヴァちゃんが風邪だって（笑）　ｂｙ亮（前書き）

@「今回は前書き無しだ」

亮「何故だ・・・」

@「ネタがねえんだよ。言わせんな恥ずかしい」

エヴァちゃんが風邪だって（笑）　ｂｙ亮

「さて・・・始めようか」

【カッ！】

「術式開ｓ「言わせるかーー！！」ちっ！」

まさか気付かれるとは・・・気配を消し方を真剣に覚えるか？

「貴様は何故ここゴホッに居るゴホッんだ」

「茶々丸ちゃんに頼まれたんだよ～」

回想行くぜ！

ーーー☆ーーー回想ーーー☆ーーー

「へ？エヴァちゃんが病気？」

「はい。この時期になると持病の花粉症が発病するんです」

それは外に出たく無くなるな～・・・

「しかも今回は風邪までひいてしまって・・・」

「夜にお腹でも出して寝てたのかな？」

俺はあんまり風邪を引かないけどな！

てか、毒に耐性が付いた辺りから病気にかからねえ

「で、薬を取りに行く間、俺にエヴァちゃんを看てて欲しいと？」

茶々丸ちゃんは学校があるからね～

「はい」

で、なんで俺なんだ？

「マスターはあまり交友関係がありませんので・・・」

おう・・・ボッチなのね

「了解した。行ってお粥でも作ってあげるよ」

「お願いします」

さて・・・

「んじゃ、店を頼む」

「主。この時間に来る人は居ませんよ」

「・・・右に同じ」

「まだ朝ですから」

まぁ・・・うん。昼までに帰ってこれるか分からないんだけどな・・
・後は頼んだ

（あまりに出番が少ないから皆お前に冷たいな（笑））

五月蝿いやい・・・

ーーー☆ーーー回想終了ーーー☆ーーー

「てな感じ」

「あのポンコツめ～余計な事を・・・ゴホッ」

おいおい。従者の悪口は言っちゃならんぜ

「はい。お粥」

材料はちゃんと持ってきたぜ？

「お前は口は悪いが腕は確かだからな・・・」

「一言余計だな。俺の何処が口が悪いって言うんだ？」

「言わなきゃ分からないか？」

思い当たる節が無いな（笑）

「・・・」

エヴァちゃんって美味いモノを食う時は静かだよな～（笑）

（良く見てるじゃないか（笑））

だってエヴァちゃんウチの店に一週間の内５日は来てるぜｗｗｗ

（それは来すぎだろ（笑））

まぁ常連客ですから（笑）

「ご馳走様」

「お粗末様と。後、他に食いたいモノあるか？」

エヴァちゃんは少し考えた後

「お前の血が欲しい」

「・・・ＭＡ☆ＺＩ☆ＤＥ？」

「なんで発音がおかしいんだ・・・」

ビックリするほどユートピアだよ

「別に構わんが・・・どうするんだ？」

首から歯をグサリですか？

「・・・もっと近くに寄れ」

「・・・」

正解みたいです（笑）んじゃちょっくら逝ってきま～す

（逝ってら～（笑））

【カプチュ♪】

「・・・」

「・・・」

【チュ～～】

「・・・」

「・・・」

【チュ～～～～～～】

「・・・」

「ちょいちょいエヴァちゃん・・・」

【チュ～～～～～～～～～～～～～～】

「ストップ洒落にならん！死ぬ！死んじゃうから！」

【チュ～～～

「すまん。吸いすぎた」

「理由を聞こう」

ーーー☆ーーーエヴァちゃん説明中ーーーー☆ーーー

成る程、要するに・・・

1．俺は魔力を封印してるせいか血液にある魔力が多い

2．直の血液は我を忘れる程美味

3．定期的に飲ませろ

・・・だが断る！

「てか、血に美味い不味いがあるんか？」

「あるぞ。お前のは地下で１００年は寝かされたワインの味だ」

酒はあまり飲まないな・・・俺はザルだけど

「だから飲ませろ」

「酒の飲み過ぎは身体に毒だから駄目」

「私なら問題ない」

マジ勘弁・・・

【ピンポ～ン】

ん?誰か来たのか?

「・・・私が出る」

「無理すんなよ（笑）」

まぁ聞かないのは分かってますが・・・

「エヴァンジェリンさん・・・」

「ふん。貴様か、坊や」

お、薬味先生じゃん。あれ?学校は?

「本当に風邪だったんですね・・・」

「なんだ?真祖の吸血鬼が風邪などひくと思わなかったか?」

無茶しちゃってまあ

「なんなら、今からここで決着を着けてやっても・・・（ヨロッ」

おっと危ない

「はいはい。ベットに戻ってましょうね～」

「私はｄ「なな め４５。！」ギャフン」

ハイハイお休みお休み

まるで家政夫みたいだわ（笑）

「あれ？木乃香さんのお兄さん・・・どうして此処に？」

それは俺のセリフなんだがな～・・・

「茶々丸ちゃんに頼まれてな。で、薬味先生は何故ここに？」

「あ、えーっとエヴァンジェリンさんに起きたらこれを渡して下さい」

ん？何々・・・果たし状？

「律義だね～・・・」

こんなの渡さなくてもやってくれるでしょう？

「上がってく？どうせなら飯も出すけど？」

「へ？良いんですか？勝手に・・・」

「……大丈夫だろ」

（間が長すぎるわ（笑））

別に・・・良い・・・よね？

（知らんがな（笑））

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「・・・可愛い部屋でしたね」

「だろ？俺も最初来た時は驚いた」

吸血鬼って棺桶で寝るもんだと思ってたからな・・・

「まぁ見ため的には間違ってないしな（笑）」

「ハハハ・・・そうですね」

良し。エヴァちゃんが起きた時の為に飯でも作っておくか

「何か食いたいものでもあるか？」

「えーっと・・・じゃあd「サウザンド・マスター・・・」！」

ん？エヴァちゃんうなされてんな・・・

「やめろ～・・・」

「・・・」

ちょいちょい、なんで杖を出してんだ・・・

「・・・なんで杖を出してんだ？」

「お父さんの手掛かりが掴めるかもしれないんです！」

ほうほう。英雄のね～・・・

「俺にも見せろ～」

「へ？」

こんな面白い事見逃す筈が無いだろ？

「ＧＯ～ＧＯ」

「は、はい！」

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

おう？これがエヴァちゃんの夢の中か？

「父さん・・・」

ん？あのフード被ってんのが薬味先生の父親か？

「やっと追い詰めたぞ。サウザンド・マスター」

「・・・」

おお。エヴァちゃんが幻術で大人になってる?!

「もう諦めろ闇の福音。お前じゃ何度やっても俺には勝てない」

「ふん。言わせておけば・・・」

横に居るのは人形か?見た事無いな～・・・

「貴様の血肉はいただくぞ!」

「殺害ヤーハー!!」

「やれやれ」

【ズドーン】

エヴァちゃんが落ちた!?

「既にお前の嫌いな物は調査済みだ!」

エヴァちゃんが落ちた穴に英雄が玉葱とかニンニクを入れる

玉葱とかニンニクをんな事に使うな!

「卑怯だぞサウザンド・マスター!魔法で戦え!」

「残念だったな、俺は魔法学校中退だ!魔法も6個しか覚えてねえ」

「誇らしげに言うな!」

エヴァちゃんもようやるな～・・・

「何故私じゃいけない！」

「俺は餓鬼に興味はねえ」

「胸か？全ては胸が原因なのか？！」

エヴァちゃん・・・ドンマイ（笑）

「もう俺を追って来れない様に魔法を掛けておくか・・・適当に登校地獄にしとくか」

「止めろーー！！適当に魔法を使うなーー！！」

Ｏｈ・・・なんと適当な・・・

「お父さ～ん（泣）」

「夢は夢のままが美しい」

まぁ、忘れなさいな

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

エヴァｓｉｄｅ

「ん・・・寝てたか」

懐かしい夢を見たな

思い出したくもない夢だったが・・・

「ス～」

「ん？なんだ坊やか・・・」

何故ここで寝ているんだ？

「お、エヴァちゃん起きたのか」

「店主か・・・」

何故店主がまだ居るんだ？

「エヴァちゃんが起きたら食べてもらおうと思ってな」

「ん・・・美味しそうだな」

起きて直ぐなのに食欲がわく

「んじゃゆっくり食べてくれ。俺は帰るから」

店主はそう言うと階段を降りていく

「何か欲しい物はあるか？」

何はともあれ世話になったからな・・・

「んじゃ、店の外じゃ名前で呼んでくれ。外で店主じゃ分かりずらいからな」

「分かった」

その程度なら今言わなくても良いだろうに・・・

「あ、後」

「なんだ？」

何か欲しい物でも思い付いたのか？

「大丈夫。需要は在るから（笑）」

・・・は？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

はい、避難避難っと

【貴様のせいかーー！！】

【ごめんなさーーい！！】

おお。やってるやってる

（どうやって夢の中から抜け出したんだよ・・・）

夢から覚めるなんて簡単だろ？

地獄から帰ってくるより楽なもんさ

（どうやって帰ってきたし・・・）

んなもん、閻魔さんと友達になってチョチョイと・・・

（お前は普通ではなかったと言うことを忘れてた）

褒めるなよ

（褒めてねえよ）

エヴァちゃんが風邪だって（笑）　ｂｙ亮（後書き）

@「っと、亮の変態さが良く分かる話だったな」

亮「おまえ、闇魔なめんなよ！」

@「なめてねえよ」

亮「巨大な人から幼女までいんだぞ、闇魔は！！」

@「さいですか」

亮「お前・・・もっと熱くなれよ！！」

@「お前はもっと落ち着けよ・・・」

亮「もう良い！！お前を闇魔の所に連れて行く」

@「ちょｗｗｗそれはｗｗｗ」

亮「レッツ、地獄巡り！！」

@「笑えねえわあああぁぁぁぁぁぁ」

皆さんもレッツ地獄巡り！！

蒼月璃煌瑠＊様作

絶品スイーツ☆深紅のタルト
真っ赤なタルトの上にベリー系４種をトッピング。
体の傷を徐々に癒やします。魔法ではできない血液増幅効果もあり

たくさんの料理随時募集中！！

千雨の日常？と嘘予告（前書き）

@「題名の通り千雨のそれからをちょびっと書いた」

亮「何故？」

@「だって・・・普通のクラスメイトが誰か分らなきゃ可哀想でしょ？」

亮「普通普通・・・さよちゃんは？」

@「・・・ポルターガイストが特技・・・」

亮「ｏｈ・・・それ、神通力じゃね？」

@「てか、サイコメトラー？」

千雨の日常？と嘘予告

どうも、長谷川　千雨だ

あの店主に言われたこともあり

今は、あのクラスで比較的まともそうな大河内と和泉と友達付き合いをしている

「ん？大河内と和泉、今日は部活に行かないのか？」

「うん。今日はオフ」

「私も今日は休みや」

二人は部活をやってるから一緒に帰る機会はあまり無い

「んじゃ、一緒に帰ろうぜ」

「うん」

「ええよ」

まあ、こんな学校生活も悪くはないな・・・

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

あ、そういやあの店主に友達を連れて来いとか言われてたな・・・

「大河内達、今から時間ってあるか?」

「へ?私は大丈夫だけど・・・」

「私も問題あらへんよ」

それなら丁度いいや

「今からデザートでも食いに行かないか?美味しい店知ってるんだ」

「私はかまわないよ」

「私もええで」

んじゃ行くか

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「こ、ここって・・・」

「ん?どうかしたのか?」

別に見た目は悪くないはずだが・・・

「ああ~。亜子、ここの店主さんに助けてもらったからね・・・」

「まだ、お礼言ってないんや・・・」

なるほどな。だけど、あの店主の事だから忘れてんだろ。んな事

「大丈夫だろ。中入ろうぜ」

「ま、まだ心の準備が」

【カランコロン】

「お。いらっしゃい。今日は一人じゃないんだな（笑）」

「あんたが連れて来いって言ったんだろうが・・・」

「そうだっけか？」

忘れてやがったなこの店主

「あ、あの・・・」

「ん？君は？」

「あ、あの時はありがとうございました！！」

ぽかんとした顔をしてやがるな、おもしれ～ｗｗｗ

「え～っと・・・ああ！不良に絡まれてた子か！！」

「は、はい！！」

「ハハハ。気にしない気にしない。ノリと勢いで助けただけだから」

なんだ、もう終わりか。店主の顔面白かったのにな

「んじゃ、とりあえずこちらに」

私達はテーブルに案内される

「メニューはこちらになります」

「あれ？メニューは無いんじゃなかったか？」

前来た時もメニューは無かったはずだけど・・・

「限定物のメニューだ。どれも材料が手に入りにくくてな・・・」

そりゃ、高そうなこって

「いくらですか？」

「学生価格で一個５００円ってとこかな」

まあ、妥当な値段だな。どれどれ・・・

絶品スイーツ☆翡翠のプリン

絶品スイーツ☆蒼穹のケーキ

絶品スイーツ☆紺碧のゼリー
絶品スイーツ☆深紅のタルト
絶品スイーツ☆黄金の団子

・・・最後のだけ和！

「最初の翡翠のプリンは千雨ちゃんにお勧め（笑）」

「なんでですか？」

「発狂防止（笑）」

殴り倒すかこの店主？

「まあ、冗談2割で何を食べる？」

「てめえ・・・」

本気8割かよ！！

「それじゃあ、私はタルトで」

「私はゼリーやな・・・」

くそう、お前ら馬鹿だ・・・

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「美味いから納得できない・・・」

「完食ありがとうございました（笑）」

世の中理不尽だ・・・

「んじゃ、千雨ちゃんの友達もご贔屓にしてくれ（笑）・・・ってか、名前教えて」

「あ、私は大河内　アキラです」

「私は和泉　亜子です」

「んじゃ、アキラちゃんと亜子ちゃんね来てくれたらサービスするよ」

おいおい。そんなにサービスする人居て大丈夫か？

「千雨ちゃんにもちゃんとサービスするよ（笑）」

「心配してねーよ！！」

「けらけらけら（笑）」

笑い方ＵＺＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥーー！！

亮ｓｉｄｅ

うんうん。千雨ちゃんに友達ができて良かった

【カランコロン】

「いらっしゃい」

「今日は特別メニューは残っているか？」

あ、魔法先生だ

「すいません。先ほど完売してしまいました（笑）」

てか、在庫捕りに行くのめんでえ

「ふん、使えない奴だ。料理しか取り柄の無い青木の屑が・・・」

俺の実力を見てない魔法使いは皆俺の事をそう言うよな（笑）

「次来るときには残しておけ！」

「わかりました（笑）」

【コロン】

残っていたらですけどね（笑）

【カランコロン】

「店主。深紅のゼリーをくれ」

「わかりました（笑）」

常連客にはサービス、サービス～

何？文字数が少ない？なら嘘？予告だ！！

「ん？此処・・・どこだ？」

目覚めた亮が居た場所は・・・

「すんません。此処何処ですか？」

「？ここはヘラス帝国だよ」

なんと魔法世界！

「なんで、俺は魔法世界に居るんだ・・・」

だが・・・

「今は連合軍と戦争中だよ」

「は？」

乱世に来てしまったようだ（笑）

「おう・・・タイムトリップ」

亮は・・・

「お前達！」

戦いを止める為に動く

「戦争よりも俺の料理を食え！！」

そして動き出す・・・

「君に動かれると困る人達が居るんだよ」

「お前は・・・」

完全なる世界

「なんでお前達は戦争を悪化させるんだ！」

「それを君に言う必要が無いね」

独り戦う亮に・・・

「あんたが平定者か？」

「お前は？」

現れる仲間

「俺は千の呪文の男（サウザンド・マスター）！あんた、俺達と組まないか？」

・・・彼らとの出会いが物語を加速させる

「おいおい。なんでこうなった？」

「いきなり世界のお尋ね者になっちまったな！！」

「うっせーー！ラカン！」

過去の世界で亮は何を成すのか・・・

「何故君は?僕達の邪魔をするんだい?」

「別に何をやろうと俺の勝手だろ?」

「・・・君は危険すぎる」

立ちふさがる敵

「ここで死ね、部外者（イレギュラー）。ここはお前が介入して良い物語じゃない」

「知らねえよ・・・」

それを打ち破り

「たとえお前が過去を変えてもお前には関係が無い・・・」

「残念だが、俺の今は此処だ！！」

友と共に

「・・・やっとここまで来たな」

「ああ。終わりにしよう」

世界を救え

「これで終わりだ造物主（ライフメーカー）」

「何故部外者（イレギュラー）の貴様が邪魔をする。貴様は・・・」

「俺はただ、料理を食った人が笑ってくれれば良い。・・・それが料理だ（おれのことわり）！！」

「たとえお前が動いても過去は変わらん。この世界は消滅する」

「なら・・・俺が変えてやる」

「確かにこの材料（かこ）は煮ても焼いても食えないもんだよ。・・・だけどな、俺が料理する」

「この材料（かこ）を最高の料理（みらい）にしてやるよ！！」

目指すは最高の料理人

過去と未来と世界と

「これが、俺の・・・いや、俺達

の料理(みらい)だ！」

the movie

料理

近日公開？しねーよ

千雨の日常？と嘘予告（後書き）

@「これはひどい厨二ｗｗｗ」

亮「俺じゃない！これは俺じゃないんだーー！！」

@「やべ、これが料理（おれのことわり）ｗｗｗ」

亮「ＹＡ☆ＭＥ☆ＴＥ」

@「だが断る（キリッ」

亮「うわあああぁぁあぁぁぁぁＡＡＡＡＡＡ」

姫「・・・」

亮「は！」

姫「・・・（ニコッ」

亮「そんな目で俺を見るなアアアア！！」

【バリーン】

窓から亮逃走

@・姫「「どこのカンフー映画だよ（ですか）」」

蒼月璃煌瑠＊様作

絶品スイーツ☆翡翠のプリン
下に行くほど色の薄くなるプリンで、甘酸っぱい桃色のソースがかけられ、柑橘系が彩ります。食べると気持ちが落ち着き、思考がクリアになります。混乱・ヒステリー回復、洗脳解除の効果があります。

絶品スイーツ☆蒼キュウ（字は空冠に弓）のケーキ
晴れ渡る空のような円柱形のケーキに、生クリームと緑、黄の2種のキウイをトッピング。一口食べればスッキリ爽快、疲れを一瞬で癒やします。

絶品スイーツ☆紺碧のゼリー
深海を思わせる綺麗なゼリーに、旬のフルーツと生クリームをトッピング。気・魔力が全回復します。

作者作
絶品スイーツ☆黄金団子
金塊を想わせる黄金色の団子。持ったときの重さと食べたときの重さが違うのが特徴。黄金米と金々餡子で中まで金ぴか！寿命が延びると噂の一品

ルビが見にくいので漢字からひらがなに変更しました
随時料理募集中！！

エヴァちゃんが薬味と戦うらしいよｂｙ亮（前書き）

@「エヴァ編の最後がきました」

亮「まあ、どうせ原作通り薬味先生が勝つんだろ？」

@「そんなつまらない事言うなよジョニー。少しは変えるさ・・・」

亮「誰がジョニーだ、誰が・・・」

@「んな事よりも夏休みも終わりだね～」

亮「？そうだな・・・」

@「宿題終ってねえ・・・」

亮「やれよ？！」

エヴァちゃんが薬味と戦うらしいよｂｙ亮

ども、青木　亮です

現在、学園長室に来ております

「で、何の用ですか？」

「うむ。今日、夜に停電が行われるのは知ってるかのう？」

「まぁ、はい」

学園の結界がその時落ちるらしいな（茶々丸ちゃん談

「亮君にも今日は警備に加わって欲しいのじゃ」

「俺にも・・・ですか」

実際、色が居れば学園の警備は出来るし、白も付いてる

「・・・俺が入ったら過剰戦力ですよ」

「そう・・・かのう」

なんだ？学園長の煮え切らない態度は・・・

「何か有るんですか？」

「イヤ、特に何も無いんじゃが・・・」

はい、ダウト。怪し過ぎ

俺の瞳は真偽が分かるから嘘も分かる。何か隠してんなこりゃ

「ウチにはもう一人戦力が居るんで、そいつを警備にまわすじゃ駄目ですか？」

「うむ・・・それでは頼むかのう」

今日はエヴァちゃんが薬味先生に仕掛けるらしいし（茶々丸ちゃん談

今日はだから警備はパスだな

「それでは失礼します」

「・・・」

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

んで、夜になりましたと

（で、なんで高台に居るんだよ）

ここなら学園全体を見渡せるからな

もしも何かあったら直ぐに向かえる

（ツンデレ乙。なんだかんだ言ってお前は優しいな（笑））

五月蝿いやい・・・ん？

エヴァちゃんの家の近くに人が待機をしていた

ありゃあ・・・魔法先生だな・・・あんな所で槍持って何してんだ？

（物騒だね～・・・）

可笑しいな。あそこは警備の範囲外の筈だぞ？（色談

何かあったのか？向かってみるか・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「これがあれば・・・クックックッ」

うわ、この人自分の世界に入っちまってるよ・・・

「・・・ここで何やってるんですか？」

「クックックッ・・・あ？」

あ、今頃気付いた

「なんだ、青木の屑か・・・何の用だ？」

【ブチッ】

「・・・なんでこんな所に居るんですか？」

「ふん。貴様には分かる筈のない偉大な事だ」

【ブチッブチッ】

「……此処は警備の範囲外ですよね？」

「ふん！警備などよりも大切な用事だ！」

【ブチッブチッブチッ】

「……何をするんですか？」

（餅つけ（笑）青筋が凄い事になってるぞ（笑））

「クックックッ聞いて驚け！私は今日、あの吸血鬼を始末する！」

・・・はい？

「吸血鬼ってエヴァちゃんの事ですよね？」

「ああ。あの醜い吸血鬼だ」

何も今日じゃなくても・・・

「なんで今日なんですか？」

「ふん。学園長はあの吸血鬼に付け入られている様だからな、警備の穴を抜けた敵に殺られた事にする為だ」

ヤバイ・・・頭痛い

この人、馬鹿だ

「で、なんでエヴァちゃんを？」

実際、封印されてるエヴァちゃんならここの魔法先生が２０人は居れば始末できる

高畑先生が居たら一人でもいけるだろう

そんな弱体化したエヴァちゃんをなんで今頃始末しようとするんだ？

「ふん。あの様な醜く穢らわしい存在は生きているだけで迷惑だ世界のゴミだ始末するに限る」

「……」

【ブブブブブッチチッチチッチチ】

あんたがちゃんとエヴァちゃんを見てそう言ってんならその目玉はいらないな

目からほじくり出して目玉焼きにして食わせてやろうか？

（ももも、餅つけ！顔がオンエアできない位になってるぞ！）

あ～コイツを【自主規制】して【自主規制】そして【自主規制】して～・・・

（もう見てられない・・・）

「警備に就いた方が良いですよ？」

「は？」

「学園長に叱られてしまいます」

（逃げて！そこの人、今すぐ逃げて！）

「そう言えば貴様、あの魔王とかほざいていた小娘の保護者だったな」

「・・・」

【・・・】

（・・・）

「貴様達もあの吸血鬼の仲間か？」

【ペチペチ】

「・・・」

（ガクガクブルブル）

「あの様な穢らわしい存在に手を貸すなど意味が分からんな?貴様の両親もｋ「逝っとけ」プゲラ！」

（あ～あ・・・）

黙っていたら次は母さん達の悪口か?既に俺の限界は超えていたんだもう・・・良いよな?

（ゴユックリ～・・・）

ーーー☆ーーーここからは会話のみでお楽しみ下さいーーー☆ーーー

「貴様許さんぞ!殺してｙ「口動かす前に手を動かせや」グフッ」

「穢らわしい存ｚ「てめえの方が汚いは」ゴホッ」

「エヴァちゃんは稀に見る美少女だぞ?それを醜いってアンタそっちの人か?」

「私ｈ「喋るな」ガハッ」

「俺は客には寛大だが他人に情けをかけるのは飽き飽きしてんだ」

「なぁどんな気持ちだ?アンタ、屑だと思う人間の足下に転がるって?」

「・・・「なんか言えよ」ゲホッ」

「エヴァちゃんだけなら凶々にするだけで良かったが、両親の悪口を言われたからには容赦はしねえ」

「まだ言ってｎ「誰が喋って良いと言った」ヒデブッ」

「そうだな、８分の７殺しで許してやるか」

「やめｒ【バキッ】グウ」

【ボコッ、ドコッ、ボキッ、ゴスッ、ザクッ、グシャ、メキッ、ゴキッ、ポキッ♪】

「まだまだ逝くよ！もっと逝くよ！せえの！」

（止めたげてよ！もうそいつのライフは０よ！）

「闇魔の所まで飛ばしてやる！！」

ーーー☆ーーー悲しい事件でしたねーーー☆ーーー

「あがっあがっ」

おっとやり過ぎてしまった感！これじゃあ１３分の１２殺しじゃないか（笑）

（ガタガタガタ

タガタガタガタ）

○鬼かよ（笑）

まぁこれで次する事は無くなっただろうな

さて、エヴァちゃんの観戦にでも行くｋ【ゾクッ】

（・・・マジか）

おい・・・おい待て。なんだ?誰が呼び出した!?

「クックックッ。あの吸血鬼を排除したいと思っているのは俺だけだと思ったか?あの吸血鬼を排除したい輩はｔ「寝てろ」【ゴング～】」

変なの呼び出しやがって、誰が処理すると思ってんだ・・・

一番近いのは・・・色か・・・

《色、聞こえるか?》

《何、亮・・・》

《お前の方に変な奴が・・・》

《大丈夫、把握してる》

《今から向かう》

《大丈夫。一人で行ける》

《無理するな。一人じゃきつ【ブツン】》

念話を切られたか

（・・・ヤバくね？）

・・・非常にヤバイ。エヴァちゃんの観戦どころじゃ無くなった

誰かが七つの大罪の一柱を呼び出しやがった・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

色ｓｉｄｅ

「ん？おやおや、貴女も居たんですか？」

目の前にはヒョロっとした男が居る
普通に立っているだけなのに隙が無い
「・・・還れ」
「何故ですか？」
「此処は貴様の居て良い場所じゃない・・・」
男は声を出して笑い出す
「ハハハ。貴女がそれを言いますか？ベルゼブブ」
「黙れ、アスモデウス。我はその名が嫌いだ」
「おう・・・怖い怖い」
アスモデウスは殺気を当てても笑って流すだけ
我はコイツが嫌いだ
「そんな嫌そうな顔をしないで下さいよ暴食。私は貴女を愛しｔ「助太刀するぞ色殿！」・・・もう」
アスモデウスを襲うように風が薙ぐ
「白・・・」

「色殿一人では流石にキツイであろうと主が」

亮は心配性すぎる

「色？暴食、貴女は今その様な名で？」

「・・・なら、どうした」

アスモデウスが変な顔をする。気持ち悪い

「なんと素晴らしい！私と言う色欲の一字！これは私と貴女が結ばれると言う御告げ！」

「我が名を愚弄するかアスモデウス・・・」

コイツはここで始末する！

「ああ、踊りましょう暴食。私と貴女の未来の為に」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

刹那ちゃん達が心配だったから白を先に色の方に向かわせたが・・・

大丈夫だよな？

「亮兄！色さんが・・・」

「ああ、分かってる。刹那ちゃんは大丈夫か？」

「私は大丈夫です。それより色さんの方に向かって下さい」

刹那ちゃんも相手の実力は分かってるのかな？

「他の連中を近づかせないでくれ。巻き込まれる心配がある」

「分かりました。私から皆さんに伝えておきます」

良し。後は色達が片付けてくれれば楽なんｄ　《りょ・・・う》

《どうした？》

《ごめ・・・ん失敗・・・した》

全筋細胞可働率１０％！

エヴァちゃんが薬味と戦うらしいよｂｙ亮（後書き）

亮「中途半端な終わりだな・・・」

@「なんとなく此処で切りたくなった」

亮「てか、シリアスこの頃多くね？」

@「少しは入れたほうが良くない？」

亮「いや、別にいらんだろ。多分読者の方々もギャグをこの小説に求めてるはずだし・・・」

@「なん・・・だと・・・」

亮「いやいや、普通に考えてお前はシリアスに向いてない」

@「・・・欝だ、ちのう」

亮「待て！！早まるな！！」

@「俺は生きていては駄目なんだ・・・（チラチラ」

亮「・・・」

@「首を吊って侘びをしよう・・・（チラチラ」

亮「・・・さっさと逝けや」

誤字、間違いなどがあったら感想板まで！！
考えた料理などがあっても感想板まで！！
無茶振りも大歓迎?！

ここでアンケートをとります
読みたいとしたらどれですか?

1. 亮の過去編。主に高校生活など

2. 白との出会い。魔法生物との決闘

3. 亮の過去編。修行風景（地獄の日々）

実は4もあるけど、それは次回に発表
次の更新は明日！！
それではそれでは

亮が変態になるらし「なるか！」ちっ！ｂｙ作者（前書き）

亮「俺は変態じゃない！！」

姫「分ってますよ。マスターはロリ「言わせねえよ！」ちっ」

亮「もうやだこいつ・・・」

姫「今人気ランキングをしたら私が一位になりますね」

亮「なりそうだから怖い！！やめて！！」

@「人気ランキングか・・・お気に入り件数が５００を超えたらやるのも面白そうだな・・・」

亮「現在は？」

@「４９０越え（笑）これは前の話が投稿される前のお話である」

亮「この話が投稿されたら超える可能性がたけえ！！」

姫「ふふふ。私のキャラの魅力で読者も・・・」

@「まあ、投票してくれる人が致命的に足りないけどな（笑）」

亮・姫「「ｏｈ・・・」」

亮が変態になるらし「なるか！」ちっ！ｂｙ作者

アスモｓｉｄｅ

「残念です暴食・・・」

貴女がここまで弱体化してしまっていたは・・・

「私と共に帰りましょう。今ならまだ・・・【ブオッ】おっと」

まだ動けるんですか・・・

「色殿を渡しはせんぞ・・・」

「貴方に何が出来ると言うんです？」

そのボロボロの身体で・・・

「主が来るまでの時間稼ぎ位、今の私にもできる！！」

白銀の巨体が私に突っ込んでくる・・・

「学習しないのですか？」

私の名前は色欲のアスモデウス

私の能力は・・・

「誘導する」

【ドゴンッ】

「ガハッ！」

物理、魔法。如何なる手段を使おうとも私の領域内では無力

「さぁ帰りましょう暴食。貴女の在るべき場所へ」

私の差し出した手を暴食は無造作に払った

「・・・我は自分の意思で帰る。貴様に指図される謂れは無い！」

暴食の影が私に食らい付こうとする

「・・・誘導する」

私の言葉に影はそのまま陰へと還っていく

「前の貴女ならこの程度の力には屈しなかった」

ここまで弱ってしまった貴女を私はもう見ることが出来ない

「聞かないのなら力付くでｍ【ブオンッ】！」

私の顔の横を拳が抜ける

あと数コンマ遅れていたら直撃していました

「よう・・・俺の身内がお世話になったな」

これはこれは・・・暴食の弱体化をした張本人が現れるとは

「料理名は俺特製地獄のフルコースだ」

「ククク。貴方が私に勝てｒ【ヒュ】！」

ケンカッパヤイ人ですね・・・

「ご託はいい。たんと召し上がってもらうぞ」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

なんとか間に合ったってとこか・・・

「・・・亮」

「すまん。遅れた」

色をここまで追い詰めるとは・・・強いな

「成る程・・・貴方が亮ですか」

「ん?俺の事知ってんのか?」

ヒョロットした男は一礼して自己紹介する

「どうも。色欲を司りますアスモデウスと申します。傲慢から話は聞いてますよ・・・」

へ~アイツから・・・

あ、傲慢ってのは俺が魔法世界の方で闘った悪魔ね

「しかし・・・」

「ん?」

「暴食を任せるにしては甘いですね」

は?

「貴方はもう私の領域内だ」

領域?とりあえず殴るか

「ふんっ!」

「誘導」

【シュ、ブオ】

「うお！」

俺の拳が勝手に軌道をずらして返って来た！？

「私の領域内では貴方の攻撃は私の意志により貴方に返る」

めんどくせえな・・・

「なら、返せない位速く打てばいいな」

「何を言っｔ「オラッ！」誘導」

【シュ、ブオ】

せ～の・・・

「オラ」

「！誘導」

【シュシュシュシュシュシュシュシュシュシュシュシュ】

ちっ！

全細筋細胞可働率１０％じゃ捉えられるか・・・

「封印が解放できれば・・・」

「遅くなりました。マスター」

姫か！ナイスタイミング！

「姫！結界張れるか？」

「何のですか？」

「認識阻害だ！中の情報を外に漏らさない様にしてくれ！」

そうすりゃ気兼ねかく封印を解放できる！！

「・・・認識阻害結界の展開をしました」

良し！

「待たせたな色欲。これからが本番だ・・・」

「へ？何を言って・・・」

魔力じゃなく気の強化で相手してやるよ！

気の方が使いやすいからなーー！！

「気・・・解放！！」

【ガチガチガチガチ】

うお！久々に気が身体を走ってるから身体が悲鳴をあげてら（笑）

「な・・・なんですかその気の量は！？」

「ん？傲慢に聞いてないか？」

強化した細胞の方が限界が高いんだよ

限界突破の数値なら全筋細胞可働率２０％ってとこか？

魔力なら１５％だな

「逝くぜおい」

「ひっ！」

紅桜を使わないだけましだと思えや！！

「オラオラオラオ

おし。やっと当たった

「今のは白の分だ。次は色の・・・」

「た、タンマ！待ってください！」

ああ？聞こえんな？！

「私にはもう戦闘の意思はありません！と言うより、私は参謀なんでこれ以上戦えません！」

「・・・」

参謀に色が負けるのか？

「今の暴食は完全に弱体化してたんで勝てましたが、本来なら私は一瞬で負けてますって！」

「白は・・・」

「そっちの狼は初手で誘導して自分の必殺技食らっただけです！」

ｏｈ・・・コイツめちゃくちゃ弱かったの・・・

（シリアスぶち壊しだな（笑））

・・・笑えねえ

「だが、身内傷つけたもんはしょうがないな・・・」

8分の7殺しで勘弁してやるよ

「分かりました！代金として私の加護を付けてあげますから！」

「加護ね～・・・」

悪魔や天使なんて加護は強力だからな・・・ましてや七つの大罪と呼ばれる悪魔の加護だ

どんな効果やら・・・ついでに言うが、色の加護も俺は持ってるぞ？影の倉庫もその一つだ

「今からかけます」

「おい勝手にやｒ「終わりました」おいぃぃぃ！！」

何勝手にやっちゃってんの！？

「おめでとうございますマスター。これで貴方もへんた「言わせねえよ！！」残念です」

糞、これで加護が3つかよ！！

「それでは、私はこれで・・・」

【そろ～り・・・ガシッ】

「料金の先払い有難うございます。引き続き、地獄のフルコースをお召し上がりください（笑）」

「へ、イヤ・・・その・・・」

たんと味わえや（笑）

（鬼だ。鬼がおる・・・）

【ギャーーーーー！！】

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

エヴァｓｉｄｅ

アッチは終わった様だな・・・

「そろそろ決着をつけようか坊や」

私にはこの後、倒さなければいけない奴が居るのでな・・・

「闇の吹雪」

「雷の暴風！」

【グオオオオ】

クッ！流石はアイツの息子だ。加減してやってるとはいえ私と対等とは・・・

「はっ・・・ハックション！！」

【ブオッ】

「な！」

くしゃみで魔力を上乗せしただと！

【ドッガ～ン】

「クッ」

まさか打ち負けるとは・・・

「やってくれるな坊や・・・」

「へ？うわ脱げ！すみません！」

この後アイツと戦う予定なのに本気を出したくなるじゃないか・・・

「！？マスター戻って！停電の復旧が１０分程速いです！」

「なｎ【バチン】キャン！」

糞！学園長め、わざと復旧を速めにしたな・・・

「エヴァンジェリンさん！」

「ふん。貴様の勝ちだ坊や」

まったく、計画が破綻してしまった

「マスター！！」

この距離では茶々丸も追いつけないだろ・・・でも何故だ？

まったくと言っていいほど恐怖は感じない

「・・・ああ」

あの馬鹿に助けられた時と似てるのか・・・

「っしゃあ！！ここで登場ピンチランナー！！」

雰囲気も容姿も性格も、全然似ていないのに

「エヴァちゃんキャッチ！！」

何故貴様はアイツを思い出させる？

「・・・亮」

「ん？なんだいエヴァちゃん？」

タイミングが良すぎだ馬鹿が・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

俺は狙って出てきたわけじゃないぞ

急いでエヴァちゃん達の戦闘を見にきたらあのタイミングだったんだ

（説明乙（笑））

さて・・・

「茶々丸ちゃんパス！！」

【ポイッ】

「ナイスパスです店主さん」

「人で遊ぶな！！」

元気だね～エヴァちゃん・・・

「流石エヴァちゃん真祖の吸血鬼（笑）」

「おちょくっているのか貴様は・・・」

春だけどまだ寒いこの時期に寒中水泳なんて普通の人じゃできないよ！！

「でもねエヴァちゃん・・・痴女はいけないよ・・・」

「だ、誰が痴女だ／／／！！」

だってねえ・・・

「今の格好じゃ説得力が致命的に足りない！！」

「な／／／！」

エヴァちゃん美少女なんだから変態さんには気お付けて！！

「マスター・・・」

「茶々丸！違うからな！そんな目で見るな！」

さてさて。これで一件落着・・・

「あの～・・・」

あ、薬味君に説明しなくちゃか・・・

「説明は後日な！」

「へ？はあ・・・分かりました」

よし。これでガチで一件落着だな！！

「・・・任・・・もらう・・・」

ん？エヴァちゃんどしたの？

「責任とってもらうぞ／／／。亮！」

「へ？」

何?俺、地雷踏んだ?

今日の学園長

「ふう。平和じゃのう・・・」

次回は悪夢を見せてあげるよ!!

「むう。冷や汗が・・・」

ニヤリ

亮が変態になるらし「なるか！」ちっ！ｂＹ作者（後書き）

亮に色欲の加護がつきました
亮に暴食の加護がつきました
亮に傲慢の加護がつきました

色強化フラグが建ちました
白強化フラグが建ちました
エヴァにフラグが建ちました

亮「まじで？」

@「マジだ、ついでに加護の効果はこんな感じ←」

『色欲の加護』（Ａ）
異性からの好感度が上がりやすい
色気が上がる

『暴食の加護』（ＡＡ）
影が操れる様になる
胃袋の大きさが拡大する
燃費がよくなる

『傲慢の加護』（ＥＸ）
？？？

@「どうよ？」

亮「いらねーー！！特に色欲の加護いらねーー！！」

@「何を言うモテモテだぞモテモテ！！」

亮「知るか！！もっと良い加護をよこせ！！」

@「うるせえ！！お前は色々なフラグを建てて後ろから刺されてろ！！」

亮「ナイスボートになんかなってたまるかーー！！」

前話のアンケートの４は傲慢との戦闘です
この話はガチバトルになる予定
作者は戦闘シーン下手だけどね（笑）

誤字、間違い、料理の紹介などが有ったら感想板まで！！

修学旅行ももうすぐだ！！（前書き）

@「受験生だから更新が遅くなりそうだぜ・・・」

亮「リアルを優先しろよ」

@「そうするよ。遅くなったらすまんな」

亮「受験がんば～」

修学旅行ももうすぐだ！！

やほ、亮だよ

今日も元気に店をｙ「りょ～う～」どした？

「エヴァちゃんどした？」

木乃香ちゃん達は修学旅行の準備で忙しいらしいぞ

「わりゃちは～ふういんが～とけなきゃ～いけにゃいんだ～」

成る程、だからやけ酒をしてるのか・・・

「１５年間行けてないのか？」

「そうりゃ～」

ふむ。それは可哀想だな・・・

「マスターはこの時期、何時もパンフレットを読んで楽しむのが趣味らしいです・・・」

「ちゃぢゃまる～よげいなごどはいうにゃ～」

ふむふむ

修学旅行は学生の楽しみだからな

俺も沖縄に修学旅行で行った時は楽しかったな・・・良し

「エヴァちゃん。これを食べろ」

「にゃんだこれは～」

「お摘まみだよ」

酔いやら何やらがすっ飛ぶ仕様さ（笑）

「にゃ～」

【ムシャムシャ。ゴックン、ボンッ】

【シュ～～～】

「§¢@◎◆※▼！」

「良し。効いたな」

後は学園長の説得だ

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「って事でエヴァちゃんの外出許可を下さい」

「何を言っておるのじゃ・・・」

てか、もう封印解けてるし（笑）

「エヴァちゃんの封印を解きました。エヴァちゃんを修学旅行に連れててってあげて下さい」

「ふぉ？」

ん？

「なんじゃと？」

「エヴァちゃんの封印を解きました」

登校地獄だけですがな（笑）

「・・・」

「・・・」

「・・・ふぉ」

「はい？」

「ふぉふぉふぉ

おふおふおふお

「ななめ４５。！」

「グフォ」

良し、完璧。確実に入った

「ふぉ？ワシはいったい何をしておったのかのう？」

「ちょうどエヴァちゃんの外出許可を出そうとしてたとこですよ（笑）」

「ふぉ？そうじゃったか・・・」

何人かの魔法先生が何か言ってきそうだが無視すれば良いよな？

（知るか）

「ふぉふぉふぉ（はて、本当になんの話をしておったかのう？）」

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「・・・で？」

これはどういう状況だ？

「マスターは店主さんに買い物に付き合ってもらいたいそうです」

「茶々丸！余計な事は言うな！」

修学旅行の準備の為か？

まぁ別にそれは良いんだけどな・・・

「買い物に行くにしても速すぎるわ！！」

現時刻：ＡＭ３：００

今、色が警備から帰ってきたとこだぞ！！

「ふん。なら、時間まで料理でも出せ」

「ふ～自分勝手過ぎだろ・・・」

金を出してくれるから文句はないがな

「ほい。新作」

「何時も思うが作るの速くないか？」

「こんなもんよ」

じっくり時間をかけて作る物は別荘に行って短縮

普通に作れるもんは厨房で作る

実際、厨房に術式書いて時間を遅くする事も出来るがな・・・

「で、これはなんだ？」

「自分の記憶を走馬灯の様に見る事ができる料理」

その名も【逝って見るシチュー】だ！！

「・・・それは大丈夫なのか？」

「俺は平気だったぞ？」

見終わった後涙が止まらなくなったのは仕様だ

（それは走馬灯を見てか？）

ああ、あまりにも酷い地獄だった・・・

「・・・」

【ゴクッ】

「・・・」

「・・・（泣）」

おっしゃ成功！

（そりゃ、走馬灯を見たら誰でも泣くわ）

ですよね～・・・

「ヒックヒック」

「・・・あれ？」

なんで直ぐ泣き止まないん？

「母様、父様・・・」

「・・・」

・・・あ、あれ？あれ？

（お前は触れてはいけない乙女の聖域に踏み込んでしまった様だな・・・）

・・・とりあえず

「すいませんでした！！」

ＤＯ☆ＧＥ☆ＺＡ

（見事なまでのジャンピング土下座だな（笑））

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「もういい、昔の話だ」

「ホントすんません！」

考えたらエヴァちゃんは見た目と違って６００歳は生きてんだった

そんな長寿者が走馬灯見たら駄目だよな色々と・・・

「もういい。顔を上げろ」

「本当にすみません！」

常連客と最初の客は大事にしろって言われてたのに俺って奴は・・・

「お前の誠意は伝わった、今日の買い物に付き合ってくれればいい」

「何処までも付いて行きます閣下！」

実際、それだけじゃいけないレベルの罪をやっちまった気がする・・・

（誠意を見せろな？（笑））

オーケー京都男児の誠意見せたるわ

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「マスター、そんなにはしゃがないで下さい」

「は、はしゃいでないわ！」

イヤ、どう見てもはしゃいどるがな

（あっちへトコトコこっちへトコトコ）

見た目通りだから良いのか？

「何をしている亮、速く来い！」

「へいへい」

付き合うと言った手前、放置しちゃいけないよな・・・

（それをしたらお前は鬼だ）

（笑）（笑）

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「・・・」

「・・・」

「どうしました？マスター、店主さん」

イヤ・・・ね

「・・・尾けられてる」

「・・・だな」

尾行にしては下手くそすぎる

てか・・・和美ちゃんとさよちゃん?何で尾行してるんですか?

「エヴァちゃん?」

「・・・」

無視していいか・・・関わるとめんどくさくなりそうだし・・・

この時俺はまだ事態の重要性を理解してなかった

理解したのは事が起こってからだった・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

和美ｓｉｄｅ

これは面白い事になってるわね・・・

「まさか、エヴァンジェリンさんと店主さんのデート現場に遭遇してしまうとわ・・・」

茶々丸さんも居るけど、あれはデートと言って良いでしょ?!

今度の新聞のネタが決まった!

「尾けるよさよちゃん!」

「へ?・・・えーー!!」

何を驚いてるの?ネタがあったら尾ける、これ常識でしょ!?

「亮さんじゃ直ぐにバレますよ~・・・それに・・・」

それに?

「もう気付かれてますよ・・・」

「へ?」

あ、店主さんと目が合った

「・・・（パクパク」

何か口パクをやってるわね・・・何々

「あんま尾けないどいて？って言ってますよ？」

「・・・」

こんなに面白そうなネタを見逃さなきゃいけないなんて・・・

「そうだ！」

「どうしたんですか？」

クックッ。ネタを自分から作るのも新聞記者よ！

「？」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｌ－－－☆ｌ－－－☆ｌ－－－☆ｌ－－－

「・・・」

「どうした？」

「イヤ・・・ね」

なんか背中に寒気を感じるんだよな～・・・

（それを人はフラグと言う）

まさか～そんな事、あるわけないじゃないか～・・・

「あ、りょ～兄や～」

「あ、おはようございます」

「お、木乃香ちゃんと薬味君？」

まさかの木乃香ちゃんと薬味君に遭遇

「・・・（チッ」

「こんな所でどうしたんだ？」

「修学旅行の準備と、明日菜の誕生日プレゼントを買いに来たんや～」

ほう？明日菜ちゃんが誕生日とな？

「それはめでたい」

何かプレゼントを考えとくか・・・

「りょう兄～はエヴァちゃん達とお買い物？」

「まぁそんな所だな」

（人はそれを荷物持ちと呼ぶ・・・）

うるせえよ

「一緒に行かへん？」

「俺は別にいいが・・・」

エヴァちゃんは・・・

「・・・」

嫌そうですね（笑）

「すまん。エヴァちゃん達の荷物持ちをしてるからパスだ」

「そうか～・・・りょう兄、耳貸してな～」

ん？なんだ？

「・・・浮気は駄目やえ～♪（ボソッ」

「・・・へ？」

何？浮気？

「じゃ～な～りょう兄♪」

「へ？・・・おう」

・・・？何言ってんだ木乃香ちゃんは・・・

（クックッ。面白くなってきた（笑））

へ？何が起こるって言うの？

（・・・女は嫉妬深いんだよ）

言ってる意味は分かるが状況が理解できない

「・・・亮」

「何？エヴァちゃん？」

「お前に客だぞ」

ん？刹那ちゃんか・・・なんでそんなに殺気立ってるの？

「亮兄・・・エヴァンジェリンさんと付き合ってるってほんまなん？」

「へ？・・・ああ、おう。確かに、今（買い物に）付き合ってるぞ」

「・・・」

ん？

【チャキ】

へ？なんで刹那ちゃん刀を抜くの？俺、なんかした？

「亮兄の～・・・」

「刹那ちゃん、まっ」

「嘘つき！！」

【バチバチバチバチ】

ギャーー！！雷鳴剣！？

なんで俺食らってんの！？

（これが・・・ギャグ補正効果だ）

ちょ！久々にまともに攻撃食らった！

マジ痛い！！

（痛いですむのか・・・）

「待って刹那ちゃん！話を聞いてk「百烈桜華斬！！」アベシッ！！」

（亮選手ぶっ飛んだ！！）

「亮兄の馬鹿ーー！！このちゃんなら兎も角、なんでエヴァンジェ

リンさんと・・・」

「ちょい、ちょい待って。頭を整理するから・・・」

なんだ?何かやってはいけない事をしたか?

先程の言葉から木乃香ちゃんならいいと言う事だろ?

買い物に付き合うのになんでそこまで・・・付き合う?

(気が付いたか(笑))

まさか、付き合ってると勘違いしてるのか?

・・・あり得なくもない

「刹那ちゃん!俺の話を聞いてくれ!」

「イヤや!亮兄の話なんて聞きとうない!」

oh!先ずは誤解を解かなければ・・・

「俺は誰とも付き合って無い!!」

「極大　雷鳴・・・」

おいぃぃぃぃ!それは食らったら洒落にならないマジで!!

「けn「そこまでにしておけ桜咲、亮が不問だ」止めないで下さい!」

「まったく。人の話は聞け、亮は私の買い物に付き合っていただけだ」

「・・・へ？」

有難うエヴァちゃん！もう少しで闇魔様にまた会うとこだったよ！

「へ？それじゃあ先程の付き合うと言うのは・・・」

「亮は私の買い物に付き合っていると言っただけだ」

「・・・」

【ダッ】

あ、刹那ちゃんが顔を赤くして逃げた！！

「ふん。まだまだ青いな（ボソッ」

「助かったよエヴァちゃん。埋め合わせは今度するよ・・・」

だから今は・・・

「追いたいのだろう？顔がそう言ってるぞ」

「仰る通りです・・・」

「なら、追ってやれ。私に構わずな」

ホントすまん。埋め合わせは後日する

「何時か私がその位置を手にいれてやる（ボソッ」

「？・・・んじゃ有難う！！」

刹那ちゃん待ってーー！！

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

エヴァｓｉｄｅ

ふん。行ったか・・・

「良かったのですかマスター？」

「ん？何がだ？」

「マスターは店主さんとの時間をとても楽しんでいる様に見えました」

ふん。別にこの程度なら問題もない

「埋め合わせはしてもらうつもりだからな」

「そうですか・・・」

さて、何をしてもらおうか？血を好きなだけ貰おうか？それとも・・

・

side out

今日は和美ちゃん♪

「・・・何故ここに連れてこられたか分るか？」

「ええ～と～・・・」

刹那ちゃんがあの時来たのは和美ちゃんに言われたからしいからなくっくっくっ。言い訳は聞かんぞ・・・

「遺言はあるか？」

「た、たんま！証拠！証拠は！」

そう言ってる時点で犯人と言っている様なものだが・・・良いだろう

徹底的にやろうじゃないか

「さよちゃん♪こっち来て」

「すみません和美さん（泣）」

「さよちゃん・・・」

はっはっは。言い逃れできまい

「さあ、罰ゲームとしてこれを食え」

「？普通のカレーですよね・・・」

「食べれば分かる」

「じゃあ・・・」

【ムシャムシャゴックン。バタッ】

「か、和美さ～ん（泣）」

はっはっは。俺の辛い修行を体験する事ができる料理その名も【とても辛いカレー】だ！！

【ぶくぶく】

「か、和美さんが泡吹いてる（泣）」

凄い威力だすばらしい！！

（大丈夫だよな・・・）

知らん

（おいいいいいいいいいいいいいい！！）

おワり（笑）

シリアス版の文化祭予告←

色々あった文化祭

「りょ～兄～」

「ん？どうした木乃香ちゃん」

何事も無く無事に終わる

「なんにもあらへんよ～」

「おいおい。そりゃないだろ（汗）」

・・・筈だった

「貴様が『リョウ』か？」

「ん？そうだが・・・」

【ビュン】

「！何すんだ！？」

「此処でお前には死んでもらう」

狂い始める世界

「畜生！なんなんだよ！」

「知らなくていい。お前はただ死ぬだけだ」

襲い来る数々の凶敵に

「お兄さん？死んでくれね？」

「お前に恨みはないが死んでもらう」

「消えてくれ、俺達の為に」

亮は大切なモノを失う

「なんで・・・なんでだよ！！」

「りょ～兄・・・泣かんといて～な・・・」

「こんなのありかよーー！！」

狂った世界（ものがたり）を戻せるのは

「だれだよ・・・あんた・・・」

『おいおい。俺は何時もお前の近くに居たろ？ああ、この姿じゃ初めてか？』

主人公（りょう）のみ

『聞くぜ主人公。このまま何もせず生きるか・・・大切なモノを守って死ぬかだ』

「そんなの・・・聞かなくても分かるだろ？」

亮は抗う

『制限時間は文化祭の3日間。その間で戦力を強化、最後の別れをしてきな』

「おいおい。俺はまだ死ぬ気は無いぜ」

運命（シナリオ）から

「色は悪魔で手を貸してくれる奴等を、白は魔法世界の魔法生物を集めるだけ集めてきてくれ」

「分った・・・」

「御意」

「マスター。私は何かありますか？」

「姫にはな・・・」

決意を胸に

「りょう兄？」

「ん?どうした?」

「りょう兄は何処へも行かへんよんね?」

「・・・ああ」

亮は戦う

「何処にも行かないよ。何処にも・・・な」

「・・・」

「いや~すげ~な・・・」

「多いね・・・」

敵の数・・・

「まるで羽虫の様ですね」

「数が多ければ戦が勝てるわけでは無い！！」

およそ１００万

「でもってこっちもすげ～な」

「悪魔の方は８万、魔法生物は２万ですか・・・」

味方は１０万

「さ～て・・・おっぱじめるか」

亮は抗いきることができるか

【ズドン、メキョ、ガアアアア、ギャーー】

「どけ！！俺は前に進む！！」

人Ｆｉｎａｌ
物語

目指すは最高の料理
終演・主人公・

「お前は・・・」

『久しぶりですね、お兄さん♪』

修学旅行ももうすぐだ！！（後書き）

@「どうよ？」

亮「やはり、俺にはシリアスが似合わない」

@「まあね。俺も書いてると俺には向かないなって分かる」

亮「で、文化祭はどんな感じにするつもりなんだ？」

@「普通にハッチャケル！！」

亮「ｏｈ・・・」

@「次回からは修学旅行編だ。まあ・・・頑張れ」

亮「？なんでだ？」

@「ネギまを読んでれば分かるが、あのイベントがあるからだ！！」

亮「？まあ、警戒しておこう」

@「（かっかっか。亮もこれで従者をＧｅｔ！！）」

今回の料理はグラムサイト２様の《食べてると昔のつらかった修行風景が蘇るカレー》を改造して《食べると辛い修行を体験できるカ

レー≫銘々、【とても辛いカレー】でした

考えてくれたグラムサイト2様、ありがとうございました

誤字、間違いなどを見つけたら感想板まで
考えた料理などがありましても感想板までお願いします！！

今回は朝倉好きの人、ごめんなさいーー！！

皆は修学旅行だよ！へ？俺も行くのか？！ｂｙ亮（前書き）

@「題名通りだよ」

亮「料理人が中学生の修学旅行についていくんですか（笑）」

@「まあ、テンプレ・ドンマイ・許してちょんまげ」

亮「ここはギャグでなんとかしようよ！！」

@「実はお前が走って新幹線に並ぶというネタが有ったんだが・・・」

亮「テンプレばんざい！！」

皆は修学旅行だよ！へ？俺も行くのか？！ｂｙ亮

「って事で今回、京都の観光ガイド役を務めるさせてもらう青木亮だ。このクラスではけっこう知られてるから知ってるよね？」

エヴァちゃんの見張り役ですね分かりますん

学園長に脅されたでござる・・・

てか、何故こうなったし・・・そこまで詳しい事を俺は知らんぞ・・・

あ、店は休業中にしといた

エヴァちゃんはメッチャはしゃいどる

「りょ～兄～」

【ドゴッ】

「グエ」

木乃香ちゃん・・・ステミタックルは痛い

「皆さ～ん。電車に乗りますよ～」

「「「「「「は～い」」」」」」

ふう。ガチで疲れそうだな・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「で？何故エヴァちゃんは此処に？」

俺が乗ってるのはクラスと違う車両（指定席）なんだが・・・

「ふん。私が何処に居ようが別に良いだろ？」

「まぁ良いんだが・・・」

此処、一応指定席だから他の人が来るよな・・・

「りょ～兄～」

「亮兄・・・」

お、木乃香ちゃんに刹那ちゃんも来たか・・・

「しゃ～ねえな・・・認識阻害結界でも張っとくか（ボソッ」

（お前、この席の人が来たらどうする気だよ（笑））

知らん。なんとかなんだろ

あ、結界は母さんの札で張っといた。持ってて良かった

（無責任（笑））

他人と身内なら俺は身内をとる（笑）

「で、なんでエヴァちゃんがここにいるんや～？」

「ふん。私が何処に居ようと勝手だろ」

「りょ～兄～は私のもんや～」

ハイハイ。木乃香ちゃん、抱き付いてこない

「／／／」

ハイハイ。刹那ちゃん、顔を赤くして抱きつこうとしない

「私だって・・・」

ハイハイ。エヴァちゃん、真似して抱きつこうとしない

あるぇ？なんかエヴァちゃんがさりげなく入ってない？

（おめでとう。両手に華じゃないか（笑））

ハイハイ。バロスバロス。この状態じゃ完全にロリコンと呼ばれるな・・・

《ロリコｎ《言わせねえよ！！》っち》

いつの間に念話を覚えたし・・・

（契約した時にじゃね？）

クソ！世も末ｋ「「「「「キャーー！！」」」」」

・・・何事だ！

「私達の車両です！！」

うおい！着く前から厄介事かよ！！

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

蛙の唄が～

（聞こえてくるよ～）

【【【【【【【【【【【【【【ゲロゲロゲロゲロ】】】】】】】】】】】】】】

「「「「「「「「「キャーー！！」」」」」」」」」

ハハハ、カオス！蛙祭りかよ！

「これは式紙ですかね・・・？」

「多分そうだろ・・・」

嫌がらせに式紙使うなよ・・・

「刹那ちゃん。手分けして滅殺」

「分かりました」

お掃除お葬除♪

蛙は食えるが式紙って食えるのか？

「ひやぁーー！！」

【ガシッ】

「ちょ！糸目っ娘、首をホールドすんな！」

「拙者は蛙が苦手で御座るよ～」

【ギュ～～～】

知らんがな！ちょ、マジきまってるきまってる！

「きゅ～～～」

「ガハッ！死ぬかと思った！」

気絶してくれるのが後数秒遅かったら確実に殺られてた

【【【【【【【【【ゲロゲロゲロゲロ】】】】】】】】】

・・・今、笑ったか？

【【【【【【【【【【ゲロゲロゲロゲロ】】】】】】】】】】

「お前等、俺を笑ったか？」

許さんぞ貴様等！

母さん直伝の式紙返しだ！

「す～～～」

【喝！！】

【ゲロ！？】【ゲロッ！】【ゲゲロ！？】

【ポンポンポンポンポンポン】

うげ～これすると喉が痛くなるからしたくなかったのに～・・・

（言葉で式紙って返せるものなのか・・・）

母さんが言うに気合いがあればなんでも出来るらしい

（ないない（笑））

「あれ～？・・・蛙さん居なくなっちゃった？」

「あれだけ居たのにね～？・・・」

良し。俺は自分の車両に帰る

（蛙だけに？（笑））

やかましいわ。たく、道中不安がいっぱいだ・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「で、此所が清水の舞台だ。清水の舞台から飛び降りるつもりで、なんて言葉があるが、飛び降りたら普通は御陀仏する高さだから飛び降りんなよ」

「「「「「は～い」」」」」

元気で宜しい

「実際、この清水の舞台から飛び降りて生き残った人は多数居るらしいが、良い子は真似するな。悪い子もな」

「店主さん飛び降りてよ～」

いやいや。飛び降りんな言った本人が飛び降りてどうすんねん

・・・舞台の端に移動して・・・

「良いか！押すなよ！絶対に押すなよ！」

「（フリだ）」

「（フリだね）」

「（押して良いのかな？）」

「（何やってんだあの人は・・・）」

「店主さ～ん」

む、見た目小学生の娘じゃないか？確か双子だったよな・・・

「えい♪」

「オスナユウタヤロウガ～～！！（棒」

清水の舞台から突き落とされる～

「だが甘い！」

秘技・壁走り

「ただいま～」

「「「「「「「「「お帰りなさ～い」」」」」」」」」

「（いやいや待て待て。誰かツッコメよ！）」

ん？千雨ちゃんが頭を抱えているが何かあったか？

「駄目だろ人を押したら～俺以外だったら犯罪だぞ～」

「ごめんなさ～い」

「（おかしい、何か大切な事を忘れてる気がする・・・）」

（不問だな・・・）

誰が？

（常識を持ってる人がだ）

・・・ドンマイ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

そして、俺は無事にホテルに居る

へ？何か飛んでないかって？

そんなバカナ

（酒騒動が在ったが、亮が美味しい思いをしただけだしな（笑））

べ、別に美味しくなんかなかったわい！

（ほう？両手に花束ではなかったか？羨ましいのう。羨ましいのう）

いやいや、相手は中学生だぞ・・・

（この頃の女子は初行為を中学生平均で終わらせるらしい・・・）

そりゃ気が早いこって・・・

《俺はロリコンじゃないからな！！》

《ちっ》

姫は何処からか俺を見てるのか・・・

（知らん）

「あ、ガイドさん。そろそろお風呂に入ってきては？」

「あ、どうも」

先の件もあるし、温泉にでも入ってゆっくり考えるか・・・

（ゆっくりしていってね！）

先生に言われるがまま温泉へ～・・・なんで混浴やねん

（知るか）

まぁ良いか。教師と生徒の風呂ぐらい別れてるだろ

（・・・）

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「あ～～生き返る～～」

この言葉は良くも悪くもガチで使うから困る

（実際、ガチで使えるのはお前だけだよ）

ガチで使う奴が居たら恐いわ（笑）

「うわ～おっきい～」

む、薬味君も来たか

「温泉に入る前に身体を洗え。それがマナーだ」

「あ、木乃香さんのお兄さん。分かりました・・・」

実際、外国ではシャワーしか無かったからな

風呂に久々に入ったのは麻帆良に来た時だったりする・・・

（京都に一度帰ってきた時入らなかったのか？）

急いで麻帆良に向かったからな・・・

「あの～・・・」

「ん？どうした？」

「木乃香さんのお兄さんは魔法関係者ですよね・・・」

「ん。まあな」

てか前から思ってたがまどろっこしいな・・・

「亮で良いぞ。木乃香さんのお兄さんじゃ長いだろ？」

「分かりました。で、亮さんは魔法使いなんですか？」

あ？俺が魔法使い？

「なんで？」

「学園長が困った事があったら亮さんに言えと・・・」

学園長・・・あの人、俺に丸投げしたな？

どおりで魔法先生が薬味君しかいない筈だ・・・

「・・・俺は普通の料理人だよ。裏を知ってるね」

「そうですか・・・」

（普通の料理人（笑））

五月蝿いわ

「なんか有ったのか？」

「実は・・・」

ーーー☆ーーーカクカクシカジカーーー☆ーーー

マルマルウマウマと

刹那ちゃんが関西のスパイね～・・・

「俺も関西出身なんだが？」

「あ・・・」

関西と仲が悪いね～学園長も人が悪い

・・・詠春さん、まだ纏めきれてないのか？

「じゃあ、桜咲さんは・・・」

「木乃香ちゃんと仲良くしてる時点で大丈夫だろ？」

刹那ちゃんも中途半端にアドバイス言わないで全部言っときゃ良い

のに・・・

【ガラッ】

「せっちゃ～ん♪」

「こ、このちゃん。押さないで・・・」

「Ｏｈ・・・」

（噂をすれば影）

「な、なんで木乃香さん達が?!（ボソボソ」

「兄貴、これは噂の混浴って奴ですぜ（ボソボソ」

「あんまし声出すとばれるぞ（ボソッ」

（で、隠れて何をするつもりだ?（ニヤニヤ）

何も。後少し温泉に入ってるつもりだが?

「クックックッ。それにしても役ｔ【ガシッ】だ、旦那?」

「排除」

【ビュン】

「そんな殺生なあぁぁぁぁぁ・・・（キランッ」

（馬鹿が・・・無茶しやがって）

「カモくうぅぅぅぅぅん！」

あ、そんなに声出したらバレｒ「そこに居るのは誰だ！」だよね～

「へ？へ？」

「出てくれば斬る！出てこなくても斬る！」

選択肢が無いとな！刹那ちゃんめやりおるな・・・

（言ってる場合か？）

「出てこないか・・・なら斬る！」

「へ、ちょっと待っ！」

まったく、手間のかかる薬味君だ

「斬岩剣！」

「真剣白刃取り！」

決まっ・・・

【ツルッザクッ】

「・・・（キリッ」

「・・・へ？」

これが・・・ギャグか・・・

（駄～目だこりゃ）

「だ、大丈夫ですか？」

「メッチャいてえ（笑）」

「りょ、亮兄？」

ちょいちょいタンマ、少ししたら治るから・・・

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

ふう。タオルが無かったら即死だった

（タオルは偉大だな）

ホントだよ・・・

「刹那ちゃん、いきなり人に斬りかかったら駄目だぞ。今回は俺だったから良かったが・・・」

「すみません・・・（シュン」

分かれば良いんだよ

「で、なんでりょ～兄は此処におるん？」

「此処は混浴だ」

生徒と教師が同じなんて・・・間違いがあったらどうするんだ！

《ロリコン！！》

しまった！阻止できなかった！

《（　ー_ー）》

うわ、なんかうぜー顔が頭に浮かぶ！！

「あ、ネギ君も居ったんか～」

「あう～・・・」

さて、遊びも止めて

「刹那ちゃん、敵が来てる。木乃香ちゃんを頼んだ（ボソッ」

「！分かりました（ボソッ」

宜しい。木乃香ちゃんを頼むぜ

「んじゃ、俺は出るな」

「え～、りょ～兄と久しぶりにお風呂入れたのに・・・」

木乃香ちゃんも成長してるんだから男に肌を見せちゃいけないぜ

「何時か一緒に入れるだろ？」

「あ～ん、りょ～兄のいけず～」

好きに言っとけ（笑）

んじゃ、片付けに行くか

「よ」

「・・・久しぶりだね」

「こんな形で会いたくはなかったがな・・・」

なぁ・・・フェイト

皆は修学旅行だよ！へ？俺も行くのか？！ｂｙ亮（後書き）

亮「次回は？」

@「ネタ満載・ボケ満載・ギャグ満載の三本だ！」

亮「過度な期待は御法度だぜ」

@「てか、駄文に期待する人も居ないか（笑）」

亮「そうだな（笑）」

@「目指すは？」

亮「完結！」

@「理屈は？」

亮「ねじ込む！」

@「道理は？」

亮「ふっ飛ばす！」

@「こんな馬鹿な主人公だが、この作品は大丈夫か？」

亮「大丈夫じゃない、問題だ（キリッ」

@「それじゃあ」

亮「また次回！」

感想、間違い、質問は感想掲示板へ！

オリジナル料理を考えてくれた方も掲示板へどうぞ！！

大丈夫だ問題ない（キリッ（前書き）

亮「本当に大丈夫か？」

@「・・・多分」

亮「おい」

@「ちょっと今話はネタを入れすぎた感。だが反省も後悔もない」

亮「少しは反省しろよ・・・」

大丈夫だ問題ない（キリッ

「君には此処で固まっててもらうよ」

「ご勘弁願いたいね～・・・」

フェイトの力量は未確認だからな～

まぁ強い事は分かってるんだが・・・

「話し合いで解決してくれない？」

「近衛　木乃香をこちらに渡してくれるなら良いよ」

ああ・・・それじゃ無理だ

「残念だが、渡せないな・・・」

「そうかい・・・本当に残念だ」

【ヒュ】

後ろから攻撃・・・ね

「よっと！」

「・・・バレていたのか」

俺には分身は全くといっていい程きかねえよ

「なら・・・」

【ヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュ】

「よっ、はっ、そっ、ぬっ、まっ、へいっ！」

リズムに乗れってか？まぁ嫌いじゃないが・・・

数撃ちゃ当たるとでも・・・

？・・・木乃香ちゃんが動いてる？

「もしかして・・・足止めか？」

「・・・速いね、まさかもうバレるとは」

木乃香ちゃんがホテルを離れるわけがないからね～

それに、ペンダントにＧＰ◎付けといたから・・・

（何時付けたし・・・）

・・・今朝

（用意周到だなおい！）

まぁそれは置いといて・・・

「行かせてくれない？木乃香ちゃんを盗られる訳にはいかないんだ」

「それは無理な相談だね」

ですよね～（笑）

「んじゃ、凹って行かせてもらいますか」

「できるかい君に？」

ハッハッハッハッハッハ

・・・もう勝負ついてるから

「影よ！」

はい。フェイトの足、拘束♪

「何!?」

気付かなかったろ?魔力も何も使ってない純粋な影だからな～

・・・色の加護パナイ

「お前の敗因は口を開けた事だ」

「な!」

「喰え!」

はい、口に流し込みました

「くっ・・・これは・・・まさか!」

「おう、俺の母親の料理だ。再現するのに苦労したんだぞ」

俺の能力だと自動的に美味い方にもってっちまうからな・・・

「母親だと・・・じゃあ・・・」

「ああ。俺の母親は

飯まずだ」

【ズドンッ】

「それも飛びっきりのな・・・って聞こえてないか」

分身は少なくとも感覚を共有させてるからな。一人が飯まずを食らったら全員に影響が・・・

（・・・）

・・・笑えよ

（乙）

さて、刹那ちゃんも追ってるだろうし急ぎますか

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

刹那ｓｉｄｅ

気を緩み過ぎた

亮兄が敵を片付けてくると言っていたから完全に油断していた

この桜咲　刹那、一生の不覚！

「桜咲さん！」

「神楽坂さん、ネギ先生・・・」

どうして此処に居るんだろう？

「一緒に木乃香を助けるわよ！」

「皆で助けましょう！」

「・・・有難うございます」

敵は今、亮兄を足止めしてる筈
なら、大部分の戦力は亮兄が引き受けてくれている筈だ
このちゃんは絶対に取り戻す！

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「追い詰めたぞ、術者！」

「あんさんもしつこいな～」

変なサルを出したり、水で押し流そうとしたり、もう許さん！

「斬る！」

「おお、恐いわ～」

術者に私が斬りかかりに行くと

「御札さん御札さん、ウチを逃がしておくれやす」

【ボッ】

御札から火が出て、術者の前に広がる

「京都大文字焼き！」

スピードをつけすぎた、避けきれない！

私は止まろうとするが火は既に目の前へと迫っていた

当たｒ【ズゴンッ】

当たった

「こ、木乃香ちゃんといい、刹那ちゃんといい、俺にタックルをするのが流行ってるのか？」

目の前に火は既に無く、亮兄が腰を痛そうに擦っていた

「あ、あんさん何をしたんや！」

「？火を消しただけだが何か？」

亮兄は何を聞いてるんだと首を傾げている

「く～あの新人、自分から足止めするとか言って失敗しおったな・・・」

術者が顔を歪めると

「まぁ相手が悪かったな。木乃香ちゃんを返してｍ【ドンッ、ガキーン】！」

亮兄は咄嗟に私を突き飛ばし、襲撃してきた敵の攻撃を防いだ

side out

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

←から三人称になります

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

亮は影から出した武器を持って敵の攻撃を防ぐ

亮を見た誰もが目を見張った

亮の出したそれは・・・

剣と言うには余りにも細く

刀と言うに余りにも短く

武器と言うには余りにも

・・・野生的だった

そう、それは・・・・

・・・葱だった

「「（（えーー！！））」」

その場に居た者の心が一つになった

・・・つまり、何が言いたいかと言うと

（良し。明日から葱を育てよう）

「（なんでやねん！！）」

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

やっぱり、普通が一番

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

咄嗟に葱を出しちゃったぜ♪

（で、その葱の名は？）

何か武器に使えたから、刃葱と名付けよう

「お兄さんおもろいな～」

「有難うよ、眼鏡娘。で、刀を退けてくれない？」

「そんな事言わずにウチと殺り合おうや～」

【ガキーンガキーン】

コイツ・・・もしかして刹那ちゃんと同じ神鳴流か！？

「ざ～んが～んけ～ん」

「なんの！」

耐えてくれよ刃葱！

「青木流・第四の太刀・卯月！」

下からの斬り上げと上からの斬り下げがぶつかり合う

【ガキーーーーン】

「お兄さん、剣の腕もおもろいな～」

「そりゃ、どうも」

今のうちに刹那ちゃんは木乃香ちゃんを取り返してくれれば良いんだが・・・

「くっ！」

「どないした？あんさんの力はそんなもんかいな？」

【ウッキー、クマ～】

なんだありゃ？猿と熊か？

「無視しないでくださいな～」

「ちっ！」

刹那ちゃん一人じゃ無理そうだな

なら、少し本気を出してやるよ・・・

「・・・ネッギ葱にしてやんよ！」

「ほへ？」

葱真剣奥技

「葱の千切り！」

【ガガガガガキーンキーン】

「飛べや！」

「あ～れ～」

【ドゴンッ】

良し。猿と熊にストライク！

「！百花繚乱！」

「うぎゃーー！！」

良し。向こうも終わったな

「あいたたた～。やられてもうたわ～」

「くっ！引きますえ月詠」

おう。帰れ帰れ

そして出来ればもう来るな

「分かりました～。お兄さん、次は真剣でやりましょや～」

そう言い眼鏡娘と女は逃げて行った

「・・・お断りだ」

「このちゃん？」

「う～ん・・・あれ？どないしたんせっちゃん？」

む、木乃香ちゃんが起きてしまったか・・・これは拙いな

「木乃香ちゃん、これは夢だ。次は現実で会おう、俺も待ってる」

「なんや夢か～それじゃあ、お休みな～」

【・・・ｚＺＺ】

ふう。木乃香ちゃんが素直で良かったぜ

「・・・」

「どした？」

「何か忘れている様な・・・」

ん？忘れてる事なんてあるか？

「・・・あ」

「どした」

「ネギ先生達の事を忘れてました・・・」

ん？何処に行ったんだ？

ーーーー☆ーーーーその頃ーーーー☆ーーーー

「ゲホ、ゲホッ。あのお猿女、次は絶対ぶっ飛ばしてやるんだから！」

「あう～水が～・・・」

ネギ達は原作と違い流されてしまいました

理由？それは刹那が木乃香しか眼中に無かったからです

大丈夫だ問題ない（キリッ（後書き）

@「って事でネギ達の活躍無し（笑）」

亮「酷いな。確かここで明日菜ちゃんの破魔の剣の初お披露目じゃなかったか？」

@「まあ、別に良いだろ。すぐに使う機会がくるし」

亮「まあ、良いなら良いが・・・」

@「それより次は皆さんお待ちかねのあの話だ！亮、覚悟しとけ」

亮「俺はここで『覚悟完了！』とでも叫べば良いのか？」

@「作者が原作知らんからしなくていい」

亮「さいですか・・・」

感想、質問、誤字・間違いなどがあったら感想板まで！！

色々な人の感想待ってます！

@「そういや、そろそろユニーク１０万突破しそうだったな・・・」

亮「まさかの！？」

読んでくれてる方、こんな駄文を読んでくれてありがとう！！

亮の受難　前（前書き）

@「くそ！いとこに借りたスパロボのせいで話が進まねえ！！」

亮「おいおい。勘弁してくれよ・・・」

@「いや～でも、グレンラガンは良いよね」

亮「俺のドリルは天を貫く！！ってか？」

@「そうそう。もう小説なんて後で良いかって・・・」

亮「俺の怒りが有頂天を超えちまったよベイベー・・・」

@「ちょ、ま、話し合おう、対話は人間にゆるされた崇高なｍ「ハイスラー！！」ギャー！！」

亮「追撃のグランドバイパー！！」

@「おま、わからんネタをニコニ○から持ってくるな！！」

亮「・・・青木流最終奥義（自称）」

@「待て！その技は！！」

亮「無月！！」

@「ギャーーーーーーーーーーーーーー！！」

作者がログアウトされました

亮「ふう。では本編をどうぞ←」

亮の受難　前

現在、二日目の夜～

へ？昼はどうしただって？

俺はエヴァちゃんの観光に付き合ってただけだよ～？

薬味君はなんか告白されたそうだけどね～

「って事で刹那ちゃん。俺は詠春さんの所へ忠告しに行ってくるよ～。今日はアイツ等も来ないだろうしね」

「何故そう言えるんですか？」

「ん～・・・実力差かな～」

敵さんも俺の実力がわかったろうし、今日は戦力集めだろうからな

俺を止めるには鬼千匹は持ってこいってな

「んじゃ、一応の為に木乃香ちゃんを宜しく～」

「分かりました」

んじゃ行ってきま～す

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

さよside

「第一回！ラブラブキッス大作戦！」

「「「「「イエーーイ！！」」」」」

アワアワ。和美さんが変な企画を始めてしまいました～（泣）

「ルールは簡単！先生にバレない様に隠れながらネギ先生の唇を奪うだけ！」

「「「「「イエーーイ！！」」」」」

アワアワ。ネギ先生に知らせた方が良いんでしょうか・・・

「ねえねえ朝倉。一緒に来た店主さんでも良いの？」

「「「「「！」」」」」

店主さん？もしかして亮さんの事でしょうか？

「え～っと・・・どうなの？（ボソッ」

「一応大丈夫・・・だぜ？（ボソボソ」

「大丈夫よ！」

「「「「「「！」」」」」」

「それじゃあ、店主さんを狙お！」

アワアワ。亮さんが巻き込まれてしまいました・・・

「それじゃあ、ラブラブキッス大作戦。１１時から開始よ！」

「「「「「「「「イエーイ！！」」」」」」」」

アワアワ。亮さんに知らせないと・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

ふ～。詠春さんと酒を飲んでたら遅くなっちまったぜ・・・

まぁ刹那ちゃんから連絡が来てないから心配は無いと思うが・・・

「あ、亮さん」

「お？薬味君か、どうした？」

「えーっと、見回りをしようと思って・・・」

ほう。それは感心感心

「感心するが、今日は来ないと思うから早めにあがれよ。多分、明日は大変だからな・・・」

「分かりました」

そして薬味君。パトロールは良いが、この下の魔方陣の心配は良いのかい？

【シュバッ】

あ。行っちゃったよ・・・まぁ刹那ちゃんにでも聞けば良いか？

「亮さ～ん」

「む。さよちゃんか・・・」

慣れてない浴衣で走ると転ぶぞ？

「それで・・・どした？」

「じ、実は・・・」

ーーーー☆ーーーーカクカクシカジカーーーー☆ーーーー

マルマルウマウマとな

じゃあ、外の魔方陣は仮契約の魔方陣だな・・・

「どうしましょうか・・・」

「イヤ、どうしましょうって・・・」

子供の遊びに付き合うのも大人ってもんでしょ？（笑）

「んじゃ、班全員出てくる人を教えてくれ」

「？分かりました・・・」

クックックッ。俺の唇は簡単にはやらんぞ（笑）

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

夕映ｓｉｄｅ

フフフ。絶対にのどかを優勝させてやるですよ・・・

「ネギ君のファーストキスは私達がもらうよ！」

「おーー！！」

明石さんと佐々木さんは警戒した方が良いですね・・・委員長と潰しあってくれたら良いんですけど・・・

「む～ネギ坊主を取るか、店主を取るか・・・迷うアルよ」

「ふむ。拙者も店主殿と闘ってみたいでござるな・・・」

あの班は大丈夫そうですね・・・

「ホオッホッホッ。ネギ先生の唇は阻止してみせますわ！」

「なんで私が・・・でも店主さんなら・・・（ボソボソ」

委員長を警戒すれば大丈夫そうですよね？・・・

「店主さんの唇を奪いに行くぞー！」

「お、お姉ちゃん・・・」

アチラも大丈夫・・・

・・・あれ？

「ゆえ～」

「心配ないですよのどか。私が必ず貴方をネギ先生の所へ連れて行くです」

と言うより、心配する必要は殆ど無さそうです・・・

【それじゃあ、第一回！ラブラブキッス大作戦スタート！】

「行くですよのどか！」

「う、うん」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「わり～ごはいね～が～？」

こんな夜中に起きてる悪い子は、なまはげがお仕置きしたる～

「む！居たネ！ハイーッ！」

最初は中国娘か・・・名前は古ちゃんだっけ？

「その唇、頂くアルよ！」

「やらせはせん！やらせはせんぞーー！！」

第三次枕大戦（サード・マクラズウォー）を制覇したこの俺が中学生相手に負けるわけにはいかないのでな！

「ハイハイハイッ！」

「無駄無駄無駄！」

中学生にしては中々やるが・・・その程度では第一次枕大戦（ファースト・マクラズウォー）も勝てはしない！！

「見せてあげよう。枕の雷を・・・」

行くぜ！

「枕の雷《インドラの矢》！」

【ズドンッ】

「アル～～」

ハッハッハ。直線上にいる敵を全て吹き飛ばす俺の枕真剣奥義の一つさ

「で、次は君か？」

「御相手してもらうでござるよ！」

「来い！」

【ヒュヒュヒュヒュ】

糸目娘は枕を分身させて投げてくる

「甘い甘い甘い！」

その技は第二次枕大戦（セカンド・マクラズウォー）の時に見切っている！

「見せてやろう。圧倒的戦力差と言うものを・・・」

「む！」

枕に栄光あれ！

「マク嵐！」

【ヒュヒュヒュ

「ネギ君の初キスは私が貰うのーー！！」

「まき絵！抜け駆けは許さないよ！」

「させませんわ！」

なんか、委員長さんと明石達は猛烈なバトルを繰り広げてるし・・・

ああ～・・・もう部屋に帰ろ

【ボフッ】

ん？なん・・・だ・・・

「わり～ごはいね～が～」

「で、でｔ【ガシッ】モガモガ」

へっちょっ。店主さん何すんだ！

「こっちこ～い」

ちょっ！何処に連れて・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「くおらっ！お前達！こんな時間になにしてんだ！」

「ギャー！新田！」

「お前達はロビーで朝まで正座だ！」

「誰か助け・・・」

・・・あれ？

「ふ～。ギリギリセーフ」

「もしかして・・・助けてくれたんですか？」

「ん？まぁ一応な」

なんで助けてくれたんだ？

「なんで？」

「気分。俺的に千雨ちゃんがこんな事に参加してるのがなんで？なんだが・・・」

イヤ、私だってやりたくなかったから・・・

「無理矢理参加させられました」

「それはお気の毒に・・・」

さっさと部屋に帰って寝ろよと言うと、店主さんは歩いていく

・・・今なら後ろ向いてるからいけるんじゃないか？

【ソ～】

「・・・」

「・・・」

「せい！」

【ブンッ、スカッ】

「残念。それは残像だ」

ですよね～

「後ろから攻撃するのに掛け声をつけるのは愚策だな。次は頑張れ」

「次なんてないですよ」

てか、やりたくない

「そうかそれは残念だ・・・んじゃ、俺から参加賞をあげよう」

「へ？」

【チュ】

・・・へ？

side out

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

唇かと思った？残念おでこでした（笑）

「・・・」

【ボンッ】

うはｗｗｗ、爆発した

「なななななな、なんなんなん」

「まぁ落ち着け。参加賞だ参加賞」

まぁ出るのはスカカードだと思うけどな

「イヤ、なんで・・・」

「まぁ常連客っつう事のサービスだ」

まぁ気分だけどな。久々に枕大戦（マクラズウォー）をしてテンションが上がってるんだ

「まぁ唇はもっといい人が出来たらしてやりな。女の子の最初は特別だろ？」

「・・・ズルイ（ボソッ」

「ん？なんか言ったか？」

「なんでも無いですよ！」

うお！千雨ちゃん不機嫌？

「そんじゃま～歯～磨いて寝ろよ？」

「・・・」

無視ですか。そうですか・・・さて、次の所行くか・・・

ん？

「あ、亮さん」

「?薬味君の型紙か?」

それにしても、作りが雑だな。これじゃあ変な行動をとりかねないぞ・・・

「実は僕、亮さんの事が・・・」

あ、うん。とりかねないじゃない。今、とってるわ（笑）

「すk「ダウトーー!!」【ゴンッ】ホギでした」

【ボフン】

男からの告白ほどおぞ気の走るものは無いな・・・

てか、ホギって・・・

「キャーー!!」

おいおい。やな予感がするぜおい・・・

亮の受難　前（後書き）

@「って事で、亮は受難してねえな！」

亮「復活早いな。ってか、本編の俺は俺であって、俺じゃねえ！！」

@「それじゃあ、今回発動したスキルを見せてあげよう」

スキル：女たらし

亮「・・・」

@「このスキルはアスモデウスの加護から来るスキｒ「アイツのせいかーー！！」イエス（笑）」

亮「許さん！！」

@「俺への八つ当たりは勘弁な」

亮「ちょっとアイツ殺してくる」

@「どうやって魔界に行く気だよ（笑）」

亮「魔界など・・・気合で行ける！！」

@「いや、無理ｄ【ブオン】・・・は？」

亮「ふ。魔界の扉ぐらい片手間で開けないとな・・・」

@「いやいやいやいや」

亮「んじゃ、いってきま～す」

【シュン】

@「・・・（アスモさん、死ぬなよ）」

亮の受難　後（前書き）

@「いや～、親にパソコン止められて、投稿にも一苦労だ・・・」

亮「大丈夫なのか？」

@「下手をすれば受験終了まで投稿できなくなるかもな。その時はホントすんません」

亮「俺的には諦めんなよ！って感じだが、まあ、小説よりもリアル優先だな」

@「ホントすまん。更新が無くなったら、親に止められてると考えて下さい」

亮の受難　後

夕映ｓｉｄｅ

のどかの悲鳴が聞こえて来てみましたが・・・

「あう～」

いったい何が在ったのですか・・・のどかが目を回しているです・・・

「は！ネギ先生は！」

のどかが入っていく時には確かに居たはずです

居ないと言う事は、開いている窓から逃げたと言う事ですか・・・

「あう～」

・・・とりあえず、のどかを起こさないと始まらないですね・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「覚悟ーー！！」

「か、かくご～・・・」

こんにちは、亮です

現在、ちびっこ双子に勝負を仕掛けられています

「残念だが、君達二人では俺の足元にも及ばない」

てか、先程の悲鳴がとても不安です

「フッフッフッ。僕達には楓姉から習った忍法があるんだぞ！」

「・・・」

「行くぞ！」

「・・・どうぞ」

てか、忍法っておい・・・

「忍法、分身の術！」

「とう！」

二人が並んで後ろから一人が出てくる

・・・双子だから出来る芸当だな

「・・・おお。凄い凄い（棒」

「・・・」

・・・へ？今、ツッコム所だったの？

「どうだ、まいったか～」

「・・・」

お～い、一人恥ずかしがってるぞ～

「行くよ！史伽！」

「う、うん・・・」

「「やーー！！」」

・・・へ？当たれと？これを当たれと？

てか、反撃しちゃいけない雰囲気？見た目的に

「オリャオリャーー！！」

「え、えーい！！」

【ポカポカ】

・・・現在の状況←

（。＿。）
（。＜д＞）。（　）
（。＜д＞）。＿＿

弱いもの苛めじゃないよ!!

「ど、どうだまいったか・・・」

「お、お姉ちゃん無理だよ～」

身長差がありすぎて届かないな・・・そうだ!良いこと思い付いた!

「今回はこれでお開きにしないか?」

「フッフッフッ。僕達に恐れをなしたか」

はいはい。参りました参りました

「唇はあげられんが、麻帆良に帰ったらある必殺技を教えてあげよう」

「「必殺技?」」

「ああ。必ず殺す技で必殺技だ」

さて、食い付くか?見た目通りなら・・・

「むむむ。必殺技か・・・気になるな～・・・」

「お姉ちゃん、それで良いんじゃない？」

計画通り（ニヤリ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

なんとか双子を部屋に帰した

さて・・・これからが戦争だ

「「「「亮さん・・・」」」」

「くたばれーー！！」

【【【【凹凹凹凹】】】】

「ハギでした」

「ロギでした」

「ゲギでした」

「ンギでした」

【【【【ボフン】】】】

はぁ～・・・間違えすぎだろ薬味君・・・

【トコトコ】

はぁ～まだ居るの・・・か？

「どうも・・・バキです」

・・・（゜Д゜）

・・・（　゜Д　゜）？あれ？

「行きます・・・」

待て、可笑しい。お前薬味君の身代わり型紙だよな

なんで薬味君より強くなってんの？

「ふんっ！」

鞭打！？

「よっ！」

当たらなければどうと言う事は無い

「避けるか・・・なら・・・」

お願いだから速く還って

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

夕映ｓｉｄｅ

「夕映さん・・・僕、貴女の事が・・・」

「な、何を言って・・・」

ネギ先生はのどかに告白されたのですよ・・・それが何故・・・

「・・・夕映さん」

「・・・だ、駄目です！」

【ドンッ】

それをしたらのどかへの裏切り行為になるです

【ニョロ～ン】

「な！」

う、腕が伸びたです！

「あ、伸びてしまいました」

な、なんなんですかコイツは！

「夕映さ～ん」

「こ、来ないで下さい！」

だ、誰か助け・・・

「チュ～」

「鉄拳制裁！」

【バキッ】

「ネギでした」

【ボフン】

き、消えたです・・・

「はぁ～。これで全部か・・・大丈夫か？」

「あ、貴方は・・・」

確かガイドの・・・

「ん？君は確か地下図書館に居た娘だよな・・・」

「助けてくれて有難うです。なんでここに居るんですか？」

「薬味君の尻拭い」

ネギ先生は何をやっているのですか・・・

「あれ？ゆえ？ネギ先生は・・・」

「む、のどか、起きたのですか」

此処に居ないと言うことはネギ先生は何処へ・・・

「もしかして、その娘が薬味君に告白した娘か？」

「そうです」

「ゆ、ゆえ～／／／」

何を今更恥ずかしがっているのですか・・・

「なら、ロビーに行ってみな。今から行けば薬味君が帰ってくるところだと思うぞ」

「む、有難うです。行くですよのどか！」

「ま、待って～」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

さて、薬味君が使った型紙は全て消し終わったな

これでやっと眠れるぜ・・・

「だからエヴァちゃん達とやり合う気は無いんだよ・・・」

「だからとはなんだ、だからとは・・・」

最後の6班はエヴァちゃんと茶々丸ちゃんのペア

もう疲れました。精神的に・・・

「すいません店主さん・・・」

「茶々丸、謝る事は無いぞ。これから力づくでコイツの唇を奪うのだからな」

やれるもんならやってみろ・・・と、言いたいところだが・・・めんどくさい

「行け、茶々丸！」

「Ｙｅｓ。マスター」

めんどくさいから枕真剣最終奥義だな・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

エヴァｓｉｄｅ

クックック。普段ならこんな馬鹿げた騒ぎには加わらないが、亮が

相手なら別だ

私の前に跪かせて唇を奪ってやる

・・・そして仮契約を・・・

「ふっ、はっ、よっ！」

「・・・」

【ブンッスカッ、ブンッスカッ】

やはり普通の攻撃では当たらんか・・・

「氷の射手五本（ボソッ」

【ヒュヒュ】

「ちょ、エヴァちゃん！それはセコくね！？」

知るか！日本の諺にも勝てば官軍と在るだろうが！

「すみません店主さん・・・」

「イヤイヤ、茶々丸ちゃんは謝らなくて良いからね」

ふはははは。さあ亮、私の前に跪け！

「使いたく無かったがしょうがない・・・枕真剣最終奥義」

いったい何を使うつもりだ？

「「「・・・」」」

【シ～ン】

・・・何も起こらん

「攻撃しても良いですか？」

「良いよ。もう使ってるからね」

いったい何を使っているというんだ？

「では・・・行きます」

【ブンッスカッ、バタッ】

・・・は？

「良し。後はエヴァちゃんだけだ」

「待て、いったい何をした？」

私の見た限り、可笑しな行動をとっていなかった、なのに茶々丸が倒れた

・・・どうなってる？

「何、過去からの攻撃が来ただけさ」

「過去からの攻撃・・・だと・・・」

いったいどう言う事だ？

「枕真剣最終奥義名・・・時を駆ける枕」

「時を駆ける枕？」

「そ。エヴァちゃん、始まる前にこの位置で俺が何をしたか分かる？」

始まる前だと・・・確か枕を振って・・・まさか！？

「分かった？」

「まさかあの時、未来へ攻撃したというのか・・・」

「ピンポン。正解」

そんな非常識な！

「実はねエヴァちゃん。この奥義はね・・・」

クッ、攻撃してくるか！

【ブンッスカッ、ゴンッ】

「なん・・・だと・・・」

「これ・・・過去にもいくんだわ」

数秒前の私を殴っ・・・たか・・・

ｂｌａｃｋ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

アイアムチャンピオン！

【ラブラブキッス大作戦終了！】

ん～・・・向こうも終わったらしいな

これでゆっくり眠れる・・・

「亮さ～ん。お疲れ様で～す」

「む。さよちゃんか・・・有難う」

お茶を持ってきてくれたのは嬉しいが気を付け・・・

【ツル】

「キャ！」

「ちっ！」

浴衣じゃ走りにくいから慣れてないと簡単に転ぶとあれほど言って・・・

【ズルッ】

って、足下に枕!?

せめて、さよちゃんの下になる位には・・・

【ゴンッ、チュ】

「「・・・」」

【ピカ～】

ーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

和美ｓｉｄｅ

【まさかの!さよちゃんと店主さんがゴール!】

さよちゃんもやるわね。店主さんを押し倒すなんて・・・

【これにて第一回ラブラブキッス大作戦は完全終了!食券は私が総取りだ!】

さて、逃げるとしますか

「カモっち、逃げるよ！・・・カモっち？」

あれ？いない？

【チリ～ン】

へ？鈴の音？

【チリ～ンチリ～ン】

な、なんか嫌な予感が・・・

「ね、姉さん・・・」

「か、カモっち！？」

なんでカモっち毛皮が剥がされてるの！？

しかもこんがりおいしく焼かれてる！？

「逃げるんだ姉さん、鬼がく・・・る・・・」

「カモっちーー！！」

いったい誰がこんな事を・・・

【チリ～ン】

ま、また鈴の音!?

【チリ～ンチリ～ンチリ～ンチリ～ンチリ～ンチリ～ンチリ～ンチリ～ンチリ～ン】

どんどん近づいてる!?

【チリ～ンチリ～ンチ】

・・・止まった?

【ギギ～】

扉が開いて・・・

「わり～ごにはお仕置きだ～」

「な、ナマハゲーー!!」

side out

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

京都のあるホテルに新しい怪談が生まれた

曰く、眠らない悪い子に鈴の音が聞こえ

目の前に鬼が現れると・・・

「ガタガタガタガタ」

まぁ悪い子にはそれ相応の罰が必要だよな

皆もあまり夜更かしするなよ?

『畜生。抜けられたか』

めんどくさい

『これでまた運命（シナリオ）が狂い出しちまうな・・・』

これも遺伝子のせいかね～・・・

まぁアイツならなんとかなるだろ

頑張れよ・・・＊＊

亮の受難　後（後書き）

@「んな感じで、亮の最初の仮契約者はさよになりました（笑）」

亮「ｏｒｚ。どうしてこうなった・・・」

@「おいおい。俺はちゃんと伏線をはっておいたぜ？」

亮「どこにだ！！」

@「まあ、前話のある一文なんだがな・・・←」

おいおい、慣れない浴衣で走ってると転ぶぞ・・・

亮「→・・・考えためっちゃ考えた」

@「実は上が亮とさよが仮契約をする伏線だったのだ！！勘が良い読者の方は分かっていただろうか？」

亮「まあ、余計な事をそうそう書くはずないもんな・・・で、最後の何？」

@「んなもん、敵キャラフラグに決まってんだろ」

亮「めんどくさ・・・」

@「まあ、ネタばれはこれ位にして・・・アンケートとるよ！！」

亮「今回のアンケートは？」

@「下の5つから好きな物を選んでくれ！！」

1. 第一次枕大戦（ファーストマクラズウォー）
2. 第二次枕大戦（セカンドマクラズウォー）
3. 第三次枕大戦（サードマクラズウォー）
4. 知るか！！全部やれ！！
5. そんな事より本編進めろ！！

@「アンケートは感想板に書き込んでくれ！！」

亮「感想、質問、誤字も待ってるぞ」

@・亮「「それじゃあ、また次回会おう！！」」

シネマ村だよ。全員集合!?（前書き）

@「もはやノリと勢いしかない・・・」

亮「諦めんなよ!!」

@「考えれば考えるほど話がこんがらがる・・・」

亮「やばい。これはけっこう重症かも・・・」

@「カラカラカラ」

亮「実際、こんな笑い方する奴が居たら怖いよな（笑）」

シネマ村だよ。全員集合！？

修学旅行も残すこと後2日となりまして、俺は今日も元気です

さて、薬味君は詠春さんになんか手紙を届けに行くらしいし

俺は木乃香ちゃんを無事に本山へ向かわせるのに集中しようかね～？

「刹那ちゃん、準備は？」

「大丈夫です、できてます」

んじゃ、木乃香ちゃんを連れて本山に向かうとしますか

街中で仕掛けてこないと嬉しいんだけどな～・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

まぁ無理だよな（笑）

【ヒュヒュヒュヒュ】

まぁ街中じゃあっちも本気で仕掛けてこれないのが不幸中の幸いかね～

「亮兄（ボソッ」

「どうした？（ボソッ」

「シネマ村に行きましょう。あそこなら逃げ切れるかもしれませんし・・・（ボソボソ」

シネマ村ね～確かに今から近くて隠れやすい所だが・・・誘導されてね？

まぁ、相手の策略に乗るのもまた一興か・・・

「りょ、りょう兄にせっちゃん走りすぎや～」

「ご、ごめんこのちゃん・・・」

「もう少し我慢してくれ、目的地はもうすぐだ」

「桜咲さんと店主さんは何処に向かってるの？」

てか、なんで他の奴等もついてきてんの？ついてこなくて良いからね？

マジで

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「わ～せっちゃん似合ってる～」

刹那ちゃんは新撰組か・・・似合ってるね～

「こ、このちゃんこそ・・・」

木乃香ちゃんは見事な着物の着こなしだな～

何回もお見合いさせられてたせいか？

「俺は？」

「「え～っと亮兄は・・・」」

駄目か？・・・代官様

「の、ノーコメントで・・・」

「え～・・・」

つまらん。非常につまらんぞ！！

「似合ってるえ～りょう兄～。まるで悪人や～」

有難う木乃香ちゃん。だけど感想が俺の精神を突き刺すよ・・・

「まあまあ、お代官様。ここはこれで許して下さいよ」

「む、越後屋、御主分かっておるのう・・・」

確か木乃香ちゃん達と同じ組のパルちゃんだっけ？

「して越後屋、何故この場に参った」

「それは私めのレーダーがこの場に面白い事があると申したからでございます」

「ふむ。なら仕方ないのう・・・」

実際、ここまで人が居たら遊び位しかできないから大丈夫だろ

「越後屋、御主も悪よのう・・・」

「お代官様こそ・・・」

「「ハッハッハ」」

ヤバい。なんか楽しい（笑）

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

刹那ｓｉｄｅ

何故か亮兄とパルさんが意気投合してしまった・・・

「りょう兄何か楽しそうやね～・・・」

「そ、そうですね・・・」

それが良いか悪いかは別にして・・・

【ガラガラガラ】

ん?

「どうも～神鳴流で～す」

こ、コイツは!?

「貴様は・・・」

「お嬢様を借金の代わりに戴きにきました～。さぁ速くお嬢様を渡しなさ～い」

借金?コイツは何を言っているんだ・・・

「せっちゃん。これ、お芝居や。お芝居」

お芝居・・・なる程、お芝居に見せかけてこのちゃんを拐うつもりか・・・

「させない!このちゃんは私がまm「貴様!ワシが狙っていた娘を横取りするつもりか!!」へ?」

何を言ってるの亮兄?

「そのつもりですが何か～?」

「許さん！娘が欲しければワシを越えて行け！！」

な、なんか話がややこしく・・・

「クス。りょう兄、お代官様に成りきってるんやね～」

「・・・そうやね」

なんか・・・どうでも良くなってきた・・・

「それじゃあお代官様～決闘です～。私が勝ったらお嬢様はもらいます～」

「ふむ、良かろう。腰を長くして待っておれ」

そこは首だと・・・

「それまで娘を頼むぞ侍よ！！」

「へ？あ、はい！」

ここで私に振るんですか～（泣）

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

さて・・・ノリでやっちまった（笑）

どうするかね～・・・

「越後屋よ。良い手はないか？」

「お代官様、私兵を動かしてみてはいかがかな？」

私兵ね～・・・

「今、ワシの私兵は別件に行っていておらんのじゃ・・・」

「なら私めの私兵を動かしましょうか？」

パルちゃんの私兵？クラスの人かな？

「頼むぞ、越後屋」

「お任せ下さい」

木乃香ちゃんの事は刹那ちゃん、頼んだぜ！

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「遅かったな、貴族の小娘よ」

「お代官様が早すぎるのではおまへんか～？」

まぁ暇ですし（笑）

「では越後屋よ、ワシは小娘を相手するゆえ、雑魚は頼むぞ」

「お任せあれ」

え～っと居るのは・・・あれ？千雨ちゃんなんで居るの？

「なんで居るの？（ボソッ」

「私としてはなんで店主さんが代官様をやっているのか分からないんだが・・・（ボソボソ）」

「それは聞かないでくれ（ボソッ）」

さて、観客もいる事だし・・・始めるか

「貴族の小娘！あの娘が欲しくば、ワシの屍を越えてゆけ！！」

「分かりました～力づくで奪い盗るといたしましょう～」

いざ、尋常に・・・

「「勝負（～）！！」」

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

千雨ｓｉｄｅ

元々、店主さんが普通では無いのは知ってたが・・・

【ガキーンガキーンガキガキガキーン】

凄いな～斬りあってるな～・・・

それについていってるあの女も凄いが・・・

「長谷川さん！貴女も手伝って下さい！」

「へいへい。分かりましたよ～」

現在私達は、あの女が出した不思議生物と闘っている

・・・弄ばれているの間違いかもしれないがな

「キャーー！！今、お尻触られた」

「うわ～んこの生き物、変な動きするよ～」

うん。弄ばれているだな

そういや、朝に店主さんから変な紙貰ったな～・・・使うか？

ーーーー☆ーーーー回想ーーーー☆ーーーー

「おはよう千雨ちゃん！昨日はよく眠れたかな？」

「はい・・・眠れました」

眠れなかったよ畜生ーー！！

「それは良かった。んじゃ、これあげとくよ」

「？なんですかこれ？」

渡されたのは文字が書かれた紙

「まぁ守り紙だ。危ないと思ったら使ってくれ」

「それ以外では？」

「悪用しなければ遊びにでも使ってくれ（笑）」

で、紙をどうやって使うんだ

「使いたい時にはね・・・」

ーーーー☆ーーーー回想終了ーーーー☆ーーーー

確か・・・

「怨。だっけ？」

【ボフン】

うわ！爆発した

「・・・」

「・・・」

いた・・・ち？

「私を喚んだのは貴女か？」

「へ？あ・・・はい・・・」

鼬が喋った！？何これ、不思議動物！？

「ふむ・・・青木の者では無し・・・亮殿に私を渡されたか？」

「は、はい・・・」

なんか偉そうな鼬だな・・・

「なら良し、喚ばれたなら役目を果たそう。で、敵は何処に？」

「へ？」

敵？へ、何、コイツ戦闘力あるのか？

「それじゃあ・・・アイツ等お願いします・・・」

「下級妖怪か・・・承知した」

そう言い鼬は走っていく

お～い、踏まれるぞ～

【ボフン】

あ、なんかあの不思議生物の近くを鼬が通ると不思議生物が消えた

【ボフンボフンボフンボフン】

何をしているか分からないが凄い・・・

「私の名前は鎌鼬。青木に仕える１０８の式の一体なり。汝らごとき雑魚が私を止められると思うな！！」

なんかスゲ～

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

お～お～千雨ちゃん、鼬を早速使ったのか～

「お兄さ～ん、余所見するとは余裕やね～」

「ハッハッハ。それほどでもない」

模造刀もよく持つな（笑）

後数回打ち合ったら折れそう・・・

【バキンッ】

はい、折れた！お約束どうも有難う！

「逃げる」

「逃がしまへんよ～」

クソ～、武器無しの相手に斬りつけてくるなよ～（泣）

「武器を出させろ～」

「嫌です～」

そんな殺生な～・・・なら・・・

「真剣白刃取り」

【パシッ】

「うそ～」

「所がドッコイ、コレが現実、コレが現じつーー！！」

そのまま池に叩き落とす！

「あ～れ～」

【ドーン】

ふう・・・一人退場

さて、木乃香ちゃん達は・・・

【おい見ろよ。侍が姫様連れて城を登ってるぜ】

本当かそこの通行人Ａ！よく見つけた！

・・・って、へ？城？

ーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

刹那ｓｉｄｅ

「動いたらあきまへんな～。少しでも動いたらその身体に穴があきますえ」

「クッ」

「せっちゃん・・・」

抜かった。まさかあの様な強力な式を連れているとは・・・
このままではこのちゃんを無事に連れては行けない・・・
「さぁ！お嬢様を此方に渡しぃ！」
「誰がお前達などにこのちゃんを渡すか！」
弓を放つ式を還せれば勝機はある
どうにかこのちゃんを亮兄の所へ・・・
【ビュ～】
「わ！」
【！シュバッ】
風に押されてこのちゃんが動いたので、命令を受けていた式が矢を放つ
「やらせるか！」
私が刀で矢を逸らそうとするが・・・
【ガキーン】
駄目だ！逸らしきれない！
このままじゃこのちゃんに当た・・・る

「あぁーー！！」

やらせるものか！届・・・け！

【ズクシュ】

「あ・・・」

亮・・・兄

「たく・・・世話がやけるな」

避けないのも疲れるのね・・・

そう言い亮兄は・・・落ちていった

「りょう兄！！」

このちゃんが亮兄を追いかける様に落ちていく

「私は・・・また・・・守れないのか・・・」

シネマ村だよ。全員集合!?（後書き）

@「少しシリアル風に書いてみた」

亮「どこが?」

@「いや、ほら・・・最後の方とか・・・」

亮「矢が刺さったぐらいで人が死ぬかよ（笑）」

@「は・・・へ?ほら、城から・・・」

亮「もうちょっと高くないと骨も折れないな・・・」

@「・・・」

亮「にこにこ」

@「亮?」

亮「ニコニコ」

@「?」

亮「【ガタガタガタガタガタ】」

@「!ドクター!ドクター!亮が痙攣を!!」

感想、質問、料理を何時までも待ってます！！

前のアンケートの続きですが、下の３つから選んで下さい！！

1．第三次枕大戦
2．全部書け！
3．本編進めろ！！

急いで書いているので雑で申し訳ない！！
では、また次回！！

そろそろ京都編が終わりそうかな？（前書き）

@「思った事があるんだ・・・」

亮「どうした？」

@「なんかこのこの頃、ノリがボーボボっぽい所があるなって」

亮「は？意図してやってたんだろ？」

@「・・・」

亮「へ？へ？」

そろそろ京都編が終わりそうかな？

イヤ～なんかノリで落ちたけど、実際あんまし傷は深くないんだよねこれが（笑）

刹那ちゃんが減速させてたし

で・・・

木乃香ちゃんも一緒に落ちてきちゃってどうしましょう？

俺はこの高さ程度なら落ちても痛いで済むけど、木乃香ちゃんはそうは行かないよな～・・・

ここは・・・跳んじゃう？

「てな訳で怨」

木乃香ちゃん、少し魔力を使わせてもらうよ

【パ～】

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

刹那ｓｉｄｅ

下に落ちたこのちゃんと亮兄から魔力の光が見える

あれがこのちゃんの魔力？

「・・・（パクパク」

魔力で回復した亮兄が私に向かって何かを言っていた

唇を読むと・・・

よ・こ・の・や・つ・を・か・た・づ・け・ろ

・・・今なら口を開けて亮兄達を見ているからやれるか？

「雷鳴剣！」

「しまた！」

【ズガッン】

雷鳴剣が敵に直撃し、敵が吹っ飛ぶ

「覚えてなはれやー！」

そう言い敵は彼方へと飛んでいった

「お疲れ刹那ちゃん」

いつの間にかに亮兄が横へときている

「亮兄・・・」

「ん？どうした？そんな顔して？」

私は結局、亮兄に頼ってばかりだ・・・

「・・・」

【ポフン】

「・・・亮兄？」

突然頭に手を置かれ撫でられる

「刹那ちゃんは頑張っているよ。だから、そんな顔をするな」

「亮兄・・・」

撫でられているのは気恥ずかしかったが、とても懐かしかった

「さて、んじゃ本山に向けてひとっ走りだ」

「はい！」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

そして俺と刹那ちゃんと木乃香ちゃんは本山に向かった・・・筈なんだが・・・

「なんでパルちゃん達が居るの？ねえ、どうして？」

「すみません。私が未熟なばかりに・・・」

この頃の携帯は便利だね。やろうと思えば相手の場所も直ぐに分かっちゃう

「和美ちゃ～ん？」

「イヤイヤ店主さん、別に良いじゃないですか。もう敵はおっぱらったんだから・・・」

その油断が危ないんだ

もしここでフェイトの奴が来たら、俺は皆を守りきれる気がしない

・・・本気を出さない限りな

「木乃香～」

「あ！明日奈や～」

本山を登っていると、先に登っていた薬味君達が来た

・・・なんであの告白少女が居るんだ？

「なんで告白少女が居るの？」

「（告白少女？）いえ何でも、助けてもらったとか・・・」

刹那ちゃんに聞いたら答えが返ってきた

・・・ここまで来たら本山の方が安全だよな・・・

「お～しお前達、本山の入口はもうすぐだ～」

「「「「は～い」」」」

さてはて、詠春さんは俺の忠告を聞いていてくれたかな？

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「「「「「「「お帰りなさいませ、木乃香お嬢様」」」」」」」

何人かが口を開けている

まさか関西呪術協会が歓迎的だったのに驚いているのか？

それとも木乃香ちゃんがお嬢様と呼ばれてるのに驚いているのか？

「やあ、ようこそ関西呪術協会へ」

「久しぶりや～とう様～」

木乃香ちゃんが詠春さんに突撃する

「ハハハ、久しぶりだね木乃香。刹那君も木乃香の護衛ありがとう」

「・・・いえ、長もお変わりなく」

そして詠春さんが俺の方を向く

「亮君も護衛ありがとう。忠告通り、結界を強めておいたよ」

「・・・なら、大丈夫そうですね」

まだ心配だが、俺が母さん達の所に行くまでの時間はとれるだろ・・・

「では皆さんもお疲れでしょう。今日はゆっくりしていってください」

「「「は～い、お世話になりま～す」」」

さて、俺も準備しないと・・・

刹那ｓｉｄｅ

それから色々あり、皆は楽しんだ様だった

私も本山なら大丈夫だろうと高をくくっていた・・・だから気付かなかった

アイツ等はまだ諦めていなかったと言うことに・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

可笑しいと気付いたのは風呂からあがった後

廊下を歩いて居た時に気が付いた

「？・・・人の気配が無い？」

そう使用人も居るはずの屋敷に人の気配があまりにも気薄だった

「・・・このちゃん！」

私は廊下を駆け抜け、このちゃんが居る部屋まで走る

【ガラッ】

「！これは！」

部屋は石像だらけになっていた

その石像も見たことのある顔ばかり

「・・・宮崎さん、朝倉さん、早乙女さん」

私は廊下を走る

「「！」」

そして角でネギ先生と接触した

「刹那さん！」

「ネギ先生！このちゃんは！」

ネギ先生に聞いても知らないらしい

クソ！やられた！

【キャーー！！】

「神楽坂さん！？」

「明日奈さん！？」

私とネギ先生が声が聞こえた風呂の方向に走る

クソ、亮兄が居ないだけでこの失態か！

私は心のなかで自分を叱咤した

side out

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「・・・どうやら俺が帰ってこれるまで持ちきれ無かった様だな」

俺の眼前には人の気配が無くなっている屋敷があった

「誰か生き残りは・・・」

気配を探っていると奥の方に微かな気配を感じる

俺がそっちの方に行ってみると・・・

「・・・詠春さん」

「亮君か・・・すまない、忠告をうけてながらこの様だ」

そこには石化しかけの詠春さんが居た

「木乃香ちゃん達は・・・」

「木乃香は連れ去られた。刹那君達は追っている」

「そうですか・・・」

十中八九フェイトにやられたな

あの中で結界を破れる奴は見たところ居なかったし・・・

「木乃香ちゃんは必ず助け出します」

「頼んだよ・・・」

そう言い終えると詠春さんは完全に石化した

「さて・・・」

いっちょ総力戦と行きますか

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

刹那ｓｉｄｅ

私達は今、ネギ先生が作り出した結界の中でどうするか話し合っていた

「って事で桜咲の姉さん、兄貴とやっちゃってくだせい！」

「イヤ・・・でも・・・」

いくら緊急事態だとしてもネギ先生と仮契約は・・・

「この状況じゃそれが一番成功率が高い作戦なんですよ！」

「うう・・・でも・・・」

作戦は簡単に言えば、私とネギ先生がこの場で仮契約をして戦力アップをすると言うものだ

亮兄が居ればこんなに迷う事は・・・

「ほれ、ブチュッと行っちまえ！」

「ちょっと！刹那さんも嫌がってｒ「いえ、いいです。やります」ちょ！刹那さん！？」

ここで迷っていてどうする！このちゃんを守る為なら好きでない人とのキスの一つや二つ！

「ネギ先生、失礼します」

「え・・・あ、はい」

私とネギ先生の距離が縮まっていく

「「「「・・・」」」」

そしてその距離が０になる寸前

【ズガンッ】

「「「「！」」」」

私達の横に何かが落ちてきた

「ふう。追い付いた、追い付いた。で・・・何やってんの？」

「「「「・・・」」」」

ここは見てもらいたく無かったと殴る所だろうか？

それとも何故もっと速く来なかったかと殴る所だろうか？

【バキッ】

「・・・なんで殴るの刹那ちゃん（泣）」

「タイミングが良すぎたからです」

とりあえず亮兄を殴ってみた

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

刹那ちゃんが不良になってしまった、泣きたい

「てか旦那、何処から入ってきたんすか？」

「上」

それ以外に何処があると？・・・あ、下があったか

「まぁ旦那が来たら桜咲の姉さんも文句は無いだろ？」

「はい。では亮兄、失礼します」

「へ？何がｄ【チュ】・・・は？」

いきなり刹那ちゃんがキスしてきて、周りが光ったと思ったらカードが出てきた

何を言っているか分からないと思うが、俺にも訳が分からねえ

キングクリムゾンとか時間短縮とかそんなもんじゃないもっと恐ろしい展開を俺は感じたぜ・・・

「・・・では行きましょう」

「まぁ待て、説明をしてくれ。話はそれからだ」

「・・・」

刹那ちゃんがそっぽを向く

あるぇ？これが俗に言うツンデレって奴か？

そろそろ京都編が終わりそうかな？（後書き）

亮「なんか本編の俺、ツッコミ不在でネタがカラ回ってるって感じだな」

@「お前もそう思うか？俺もそう思う」

亮「てか、刹那ちゃんの俺への対応雑になってきてね？」

@「お前、年頃の女の子だぞ？理解してやれよ・・・」

亮「・・・そんなもんなのか？」

@「知るかよ。俺、姉妹居ないし」

亮・@「「・・・謎だよな」」

女心は難しいと悟った亮であった・・・（ちゃんちゃん

では、アンケートの結果発表・・・

二回目のアンケートは・・・結局一人しか答えてくれなかったぜ（笑）

姫「皆さんもこの小説を飽き始めてるんですよ。言わせないで下さい恥ずかしい」

・・・え～姫から毒舌が入ったところで
結果は結局第三次枕大戦だけやることになりました
てか、３っつも書くとなると投稿が何時になるやらとかでやめました・・・
で・・・実はもう枕大戦の方は８割がた完成しております
ですので、京都編が終わったあたりに投稿しようと思います
姫「それまでこの小説が続いていたらですけどね」
・・・しくしく
亮「っておいーー！！作者泣かせるな！！」
姫「いちいち長すぎるんですよ、さっさと終わらせて本編書きなさいこののろま」
・・・では、また次回・・・
亮「んじゃ次回も見てくれよ！」
姫「作者が駄目駄目でどうなることやら・・・」
・・・姫がもう自動的に動いてるから俺でも止められない・・・

シリアスを書こうと思ってたらギャグになっていた。何を言って（以下略（前書

@「シリアスって無理だね（笑）」

亮「まあ、お前はギャグを書く方が好きだろ？」

@「だけど少しは入れたいんだよ・・・」

亮「文章力を上げろ」

シリアスを書こうと思ってたらギャグになっていた。何を言って（以下略

「さて、木乃香ちゃんを助けに行くとするか」

「「「はい！」」」

へ？説明はどうしたかったって？そんなのカクカクシカジカ、シカクイムーブで理解したは

「俺が周りの敵を蹴散らして刹那ちゃん達はその間に脱出」

「私達はこのちゃんを追う・・・ですよね」

そうそう。まぁコイツ達程度なら数分で片付けられるだろ・・・

「んじゃカウント用意」

「はい。3、2・・・」

俺は紅桜を出し構える

そういや、この頃青木流剣術をまともに使ってないから使うか？

「1・・・」

「青木流・第壱の太刀・・・」

コイツだけが気無しで広範囲の技なんだよな・・・

「０！」

「睦月！！」

竜巻が解除されると同時に紅桜を横に振り切る

【ドオォォォォン】

俺の描いた剣軌が目の前の鬼どもをバラバラに斬り裂いた

「行きます！」

目の前の敵が居なくなったので薬味君と刹那ちゃん、明日奈ちゃんが飛び出す

「行かせるｋ【ブシャ】ガアァァァァ！」

「お前等の相手は俺だぜ鬼ども」

さて、鬼狩りと行きますか？（笑）

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

刹那ｓｉｄｅ

亮兄が強いのは分かっているが、あの数を一人で大丈夫か？

「桜咲さん。今は木乃香を追いましょ」

「・・・そうですね」

今は亮兄よりこのちゃんを追う事に集中しよう

【ヒュ】

「！」

【ガキーン】

上空から襲いかかってきた敵の刀を受け止める

「桜咲さん！？」

「先に行ってください！片付けてから私も追います！」

神楽坂さん達にそう言い、私は襲撃者に相対する

「ざ～んが～んけ～ん」

「くっ！」

【ガキーン】

そいつは亮兄と戦っていたあの神鳴流の使い手だった

「貴様か・・・」

「先輩でしたか～。お相手お願いしま～す」

クッ！時間が無いと言うのに・・・

「ひゃっかりょ～ら～ん」

「百花繚乱！！」

直ぐにコイツを倒してこのちゃんを追う！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「はい、ラスト」

【ブシャ】

「兄ちゃん強すぎるわ」

良し。最後の鬼も還ったし、刹那ちゃん達を追うか・・・

【ヒュ、ガキーン】

あるぁ？まだ居た？

「・・・」

「おいおい、新手の敵か？」

俺に何かを投げてきたのはフードを被った怪しい奴だった

「・・・お前が“主人公”か」

「はい？」

なんて言ったコイツ？

【ヒュ】

「危ね！問答無用かよ！！」

フードの奴はナイフの様な物を投げてくる

そっちがその気ならこっちも行くぞ！

「青木流・第参の太刀・・・」

叩き斬る！

「弥生！！」

「！」

【ズガガガガ】

高速の縦斬りを俺は繰り出す

そいつは横に跳びまた何かを投げてきた

【ガキーン】

「食らわねえはんなの！」

「・・・」

そいつは小細工が効かないと分かったのか・・・

・・・いきなり踊りだした

「～♪～♪」

「・・・」

「～♪～♪」

「・・・（汗）」

えっと・・・攻撃して良いのか？

（良いんじゃないかな？）

うお！いきなり話しかけてくるな！

応えが来るとは思わなかったから心臓がひっくり返りそうになったわ！

（ごめんごめん。次からは気お付けるよ）

・・・で？良いの？攻撃して？

（もう儀式は終わったみたいだけどな）

は？儀式？

「・・・」

「・・・」

「・・・（汗）」

お、大きくなっとる・・・まさか巨大化の魔法を使ったのか！？

（イヤ、あれは魔神化だ）

魔神化！？なにそれカッコイイ！

「ウオォォォォ！」

そいつは魔力がもの凄～くこもった拳を振り落としてくる

・・・あれ？軽くピンチ？

【ズゴゴゴゴゴーン】

拳が落ちた場所からもの凄い風が発生し周りを吹っ飛ばした

おいおい、風圧だけで飛ばされるのは親父以来だぜ（笑）

（勝てるか？）

いけるかな～・・・

「卯月！」

【ガキーン】

斬ったら金属音がする（笑）

「ガアァァァァ！」

「ちっ！」

【ズガガガガーン】

洒落にならねえ！

「ウオォォォォ！」

【ズガンズガンズガンズガン】

連打攻撃！？

「危ね！危ね！危ねーー！！」

当たったら一撃で御陀仏だぞ！？

（がんばってくれ）

こんちくしょう！！

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

刹那ｓｉｄｅ

【ガキーンガキーンガキーン】

「ら～いめ～いけ～ん」

「クッ！」

強い！ふざけている様に見えて的確に此方の不意を突いてくる

【ピカ一ン】

「なんだ！？」

突然このちゃん達が行った方向に光が現れた

「あ～。千草さんの儀式が成功したみたいですね～」

「まさかあれが！？」

長に聞かされていた“リョウメンスクナノカミ”！？

「はい～。それより続きをしましょうよ～」

こんな奴に構っていられない！次で終わらせる！

亮兄、力を借ります！

「アデアット！」

【ピカ一】

名前は天叢雲（あまのむらくも）

名前の通りなら剣が出てくるはず・・・

【ポン】

「・・・」

「・・・鞘？」

出てきたのは・・・鞘だけだった

「「・・・」」

とりあえず・・・

「アベアット」

【ポフン】

今は使えないと言う事は分かった

「ざ～んが～んけ～ん♪」

「斬岩剣（泣）」

亮兄の・・・馬鹿ーー！！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

・・・今、なんか理不尽な怒りを買った気がする

（気のせいだろ？）

それは良いとして、どうするかな・・・紅桜も斬れるか刺せるか出来ないと能力使えないし・・・

（こんな時には？）

増援・・・エヴァちゃん来てくれないかな～・・・無いな

【ドンッドンッ】

「ガアァァァ！？」

何処かから銃弾が飛んで来た！？まさかの増援！？

「やぁ店主さん。苦戦してる様だね」

「真名ちゃん・・・今、君が女神に見えた」

イヤ、ガチで女神だよ君

「フッ。報酬は餡蜜１０個で頼むよ」

「１０でも２０でも奢っちゃうよ！動き、数秒止められる？」

「任せろ」

【ドンッドンッ】

真名ちゃんの弾丸が敵に当たると敵が何かに拘束される

「うは！術式が込もってる弾丸？」

「そんなところ・・・さ！」

【ドンッドンッ】

更にそれを重ねて動きを完全に止める

これなら・・・いける！

「青木流・第伍の太刀・・・」

（おいおい、普通の剣術で大丈夫なのか？）

こいつは防御力無視の不通の技だよ

・・・出すのに数秒完全に止まらなきゃいけないのが欠点だけどな

「“皐月”！！」

【ザクッ】

（見た目がメッチャ○突！）

違う、零式なんて付かない！！

「生気を“吸え”紅桜！」

【コオォォォォォ】

紅桜が俺の言葉に呼応して光る

「ガアァァァァ！？」

「チェック」

拘束が解けた魔人さんが紅桜を抜こうとする

「おいおい、俺と父さん以外が紅桜を触ろうとすると・・・」

「ガアァァァァ!?」

生気が吸いとられます（笑）

（勝負あったな）

ああ・・・

「チェックメイトだ」

【バタンッ】

倒れた奴は元の大きさに戻っていた

「・・・」

「おっと、死ぬ前になんで狙ってきたか教えてもらおうか?」

紅桜をフードに隠れていても見える様にちらつかせる

「・・・居ない・・・」

「何?」

なんて言ってるんだコイツ?

「神など・・・居ない・・・」

そう言いそいつは消えていった

神など居ない？どゆ事？てか何で消えた？

（・・・）

「う～む・・・」

・・・謎だ

「刹那達を助けに行かないのかい？」

「・・・あ」

てかスクナの封印が解かれてるじゃん！

急がんと木乃香ちゃんが危ない！

「すまん！先行く！」

【ダッ】

急げーー！！風になれーー！！

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

真名ｓｉｄｅ

フフ、女神みたいだ・・・か・・・そんな事言われたのは初めてだよ

「私の出番が1つも無かったネ・・・」

「あ」

古が居た事を忘れていた・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

急げ急げ急げ急げ急げいそ・・・

「あれ～お兄さんじゃないですか～」

のーー!!

「邪魔だ戦闘狂!」

【バキッ】

「あう～」

(戦闘狂ぶっ飛んだーー!?)

ふう。いきなりだったからつい癖で蹴っちまったじゃねえか・・・

「って刹那ちゃん、何をこんな所で油売ってんの？」

「・・・」

へ？ちょ刹那ちゃん？なんで刀振り上げてんの？なんで気を溜めてんの？

「亮兄の・・・」

は！デジャブ！？

てか、これ奥義だよね？

一回だけ見せてもらった事あるよ！極大　雷鳴剣だよね！？

「ばかーー！！」

【バチバチバチ】

「まだごのオヂがよーー！！」

チビれるーー！！

（・・・乙）

ひ、ひどいん・・・

シリアスを書こうと思ってたらギャグになっていた。何を言って（以下略（後書

@「てか今日ハロウィンだな・・・」

亮「もう子供じゃあるまいし、お菓子が欲しいなんて言うなよ?」

@「言わねえよ・・・今日友人に『トリック・アンド・トリート』って言われたんだ・・・」

亮「は?普通は『トリック・オア・トリート』だろ?どういう意味だ?」

@「・・・『イタズラするからお菓子をくれよ』」

亮「やんねえよ!!てか強制!?」

@「皆も親に言ってみよう!!」

亮「言うなよ?絶対に言うなよ!!」

@「フリですね分かります」

感想、質問待ってま～す

京都編が終わったら使うと思うんでオリジナル料理も募集中

テストは一発本番タイプだ！！ｂｙ作者（前書き）

亮「・・・題名の意味は？」

@「特に無い（笑）」

亮「だんだんとネタも無くなってきたな・・・」

@「それを言うなよ・・・」

てか、ギャグで避けるってのはあるけど、ギャグで当たるのは珍しくない？

（そうか？けっこう在るような・・・で、お前は何を言ってるんだ？）

イヤ、俺の能力・・・

（んな事より妹分をはよう助けに行けや）

おっとそうだった

「と言う事で刹那ちゃん、飛んで木乃香ちゃん助けてこい！」

「へ！？イヤ、でも皆に見られｒ「気にするな♪」気にします！！」

おいおい、まさか羽を見られたら嫌われるとでも思ってるのか？

「私が化けｍ「刹那ちゃん」・・・」

「それ以上言ったら木乃香ちゃんも俺も怒るよ」

まったく、まだ羽を見せるのはコンプレックスなのか・・・

「刹那ちゃんは確かに半妖だよ？でもだからって人間じゃない訳じ

ゃ無いだろ？」

「それはそうですけど・・・」

「それにね・・・」

「それに？」

てか、これって俺が言うより自分で気付いて欲しかったんだけどな・・・

「刹那ちゃんのクラスメイトはそれぐらいで刹那ちゃんを軽蔑しないだろ？」

「！」

てか、ロボットに吸血鬼、元幽霊に魔人も居たら普通気にしないだろ・・・

（あのクラスが可笑しいだけだ）

さいですか

「そうか・・・そうですよね・・・」

「覚悟決めたら・・・」

【ガシッ】

「へ？」

「行ってこーーい！！」

【ブオン】

「キャーー！！」

（砲丸投げ！？）

今日は何時もより遠くに飛んでいきます（笑）

さて、俺の方も準備しとくか・・・

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

刹那ｓｉｄｅ

先程のお返しですか亮兄・・・

良いですよ別に、踏ん切りもつきました

でも、女のコを投げるのは男としてどうなのかと私は思いますけどね・・・

「これで終わりだよ」

「「・・・」」

あ、神楽坂さんとネギ先生がピンチですね

今の私の状況も中々ピンチですけど・・・どうでもいいです

「雷鳴剣！」

翼を出して急降下をしながら攻撃する

「何！？」

白髪の少年が慌てて避けた
上から落ちてくるのは予測してませんでしたか？

「桜咲さん・・・それ・・・」

「・・・すみません。これが私の正体です」

神楽坂さん達が驚いた顔をする

・・・上から落ちてきた事と私に翼が生えている事、どちらの事に驚愕してるのだろう・・・

「・・・成る程、半妖か」

「ええ」

攻撃した相手が直ぐに私の正体を言ってくる

だが、私は貴方を相手している時間は無い

「神楽坂さん、ネギ先生、少し時間を稼いで下さい。私が飛んでこのちゃんを助けに行きます」

「分かったわ！」

神楽坂さんの応えを聞くと私は空を飛ぼうとする

「あ、桜咲さん」

「？」

「とっても綺麗な羽ね！」

「！・・・ありがとうございます」

私はこのちゃんに向かって羽ばたいた

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

・・・おし、刹那ちゃんが木乃香ちゃんの確保に成功

これよりファイナルステップに移る

（んな計画無いだろ）

いんだよ。面白いから

「で、私達はあのデカブツを痛めつければ良いのか？」

横のエヴァちゃんが話しかけてくる

さっき呼んでおいた（笑）

「うん。頼んだよ」

「まったく・・・貸し一だからな・・・茶々丸、行くぞ」

「ｙｅｓマスター」

良し、俺も準備を再開しないと・・・

「店主さん仕事はないかい？まだ契約は続いているよ」

「ん？それじゃあ、この御札をあのデカブツを囲む様あそこと、あそこに置いてきてくれる？」

「ん、分かった・・・」

「私も行くアルよ！」

それができたら準備完了

後はエヴァちゃんがスクナを痛めつけてくれれば・・・

（お前は何を企んでるんだ・・・）

面白い事（笑）

（なら良い（笑））

ーーー☆ーーーエヴァちゃん無双ーーー☆ーーー

流石エヴァちゃん。強い

スクナが粉々じゃまいか

（で、お前は何がやりたかったんだ？）

見てればわかｒ【ゴガアァァァァ】

オーケー準備完了（笑）

「何！復活しただと！？」

「エヴァちゃんご苦労様～。後は俺の役目だからどいといて～」

さ～て、スクナ。青木家の“式神”になってもらおうか？

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

エヴァｓｉｄｅ

私の魔法で完全に死んだはずのスクナが生き返った
方法は分からんが、多分亮が何かを仕掛けたんだろう・・・
「で、何をする気だ？」
「ん？ちょいと家の式神になってもらおうと思ってね（笑）」
式神にする・・・と言う事は・・・使役するつもりか！？コイツを！？
『グオォォォォォォ』
復活したスクナが雄叫びをあげる
私が倒した時はまだ完全に召喚される前だったから楽だったが
完全に召喚されたコイツは私も骨が折れるぞ
「さ～て・・・久々の全力全開だ」
亮の雰囲気が変わる
そこに居たのは何時ものおちゃらけている亮ではなく、真剣な顔の亮だった
・・・カッコイイ
「気・魔力完全解放！！」

side out

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

更にここから・・・

「左に魔力、右に気・・・」

ぶっつけ本番！

「・・・合成！！」

【ブオッ】

うお！今ゾクッと来たよゾクッと！

「・・・咸卦法も使えたのか？」

「いや、初めてだが？」

高畑先生のを見た時からやってみたかったんだよね～

（あれ簡単に出来るもんだっけ？）

やる気があればなんでも出来る。本気でやれば世界が変わる！

（変わらねえよ）

「んじゃまぁ、復活した所悪いけど一気に行きますか」

紅桜の溜めてた全てを開放

俺の得意な“殲滅”だ

「青木流・第拾の太刀」

“神無月”

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

薬味ｓｉｄｅ

『グオオオオオオ』

復活した巨大な鬼雄叫びをあげる

それを亮さんは笑いながら見ていた

そして亮さんの中から出てきた圧倒的“力”

それは周りの空気を凍らせて、見ている僕を震わせた

『グオォォォォォォ』

それを見て巨大な鬼が口に何かを溜め始める

多分、刹那さん達が使っていた“気”と言う物だろう

それを見て亮さんが笑みを深める

『オォォォォォォ』

巨大な鬼が口から気を放射しようとするところで

・・・亮さんが動いた

「・・・（パクパク」

亮さんは遠くに居るので僕には声が聞こえない

だけど、亮さんが刀を持っていた事から何か技を使うという事は分かった

『ウオォォォォォ！』

巨大な鬼からレザー状の気が発射される

僕が今使う事が出来る古代魔法の何十倍の威力もある攻撃が亮さんに迫る

そして亮さんに後数メートルと言う所で・・・

“消えた”

「・・・へ？」

横から明日奈さんの間の抜けた声が聞こえる

何が起こったのか僕にも分からない

レザーが突然消えた・・・跡形もなく

『・・・』

巨大な鬼も驚愕したのかレザーを撃ち止めている

【ピキピキ】

何処からか何かに皹が入る音が聞こえ・・・

『グオオオオオオ！！』

【バリーン】

巨大な鬼がエヴァンジェリンさんの魔法を食らったみたいに粉々に砕けた

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

・・・良し。使役は出来たな

（イヤイヤ、粉々に砕けたけど！？）

俺が倒した事に意味があるんだよ

現に札に文字が書かれてるだろ？

（・・・）

まぁこれで俺の前鬼ができたし次は後鬼だな

（・・・もう好きにしろ）

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「木乃香ちゃん～。大丈夫？」

「りょう～兄～。大丈夫や～」

下に降りて木乃香ちゃん達と合流

イヤ～、スクナは強敵でしたね

「ってネギ！あんた手！」

「あ、はい。あの戦いでやられちゃいました」

薬味君の手はフェイトの攻撃が当たったのか石になっていた

まぁ、スクナも封印した事だし、救護の人も直ぐ来るだろう

「暢気だな～」

「「「「ハハハハ」」」」

皆で笑って一件落着。あれ?何かを忘れている様な気が・・・

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

フェイトｓｉｄｅ

まさかスクナが使役されるとは・・・それにあの魔力

青木　亮・・・ここで始末しておかなければ後々危険すぎる

【ニュル】

「ハハハハハ」

笑っている隙に終わらせる

「ハハ・・・！」

見つかったか。けど・・・

「石の槍」

狙いは君じゃない

「！危ない、木乃香ちゃん！」

「へ？」

【グシャッ】

そう。狙いは近衛　木乃香

僕が彼女を狙えば君は盾になる

今日それが分かったよ

「ゴホッ・・・バレバレってか？」

【バタン】

いくら君が化物みたいに強くても、心臓に当たれば死ぬだろ？

「貴様ーー！！」

「・・・真祖が相手じゃキツイからね。ここは退かせてもらうよ」

一番の危険人物が始末出来たのは大きな成果だね

【ポチャン】

「・・・フェイ・・・ト」

「！」

驚いた。まさか心臓に当たっていなかったのかな？

「美味しいコーヒーを・・・淹れて・・・待ってるぞ」

消える僕に向かって彼は血を吐きながら言う

「・・・君が死んでなかったらね」

【ドプン】

期待しないで待っているよ

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

あ～・・・カッコつけてる場合じゃないな・・・

マジ限界

「亮兄！」

「亮！」

「りょう兄！」

「亮さん！」

おいおい・・・そんなに揺らすなよ・・・気が・・・遠・・・・く・・・な・・・・る・・・・

テストは一発本番タイプだ！！ｂｙ作者（後書き）

@「って事で、亮は今回お休みな」

姫「情けないですね。あの様な子供に負けるとは・・・」

@「そう言うなって。フェイトは原作でも強敵なんだから」

姫「強敵に負ける様じゃ駄目なんですよ」

@「可哀想に（笑）んじゃ、今回の亮の技でも紹介しますか」

『神無月』
使用者：亮
詳細：気・魔力を使い腕を最大限まで強化して相手を斬る技
本当は喰らった相手が細切れになるだけだが、亮が使った結果喰らった相手は塵も残さず消し飛んだ

@「そろそろ修学旅行編が終わって料理が出せそうだ」

姫「そもそも、料理を出すという小説だったはずなのに初心は何処へ行ったのですか？」

@「え～っと・・・気休め？」

姫「死んでください」

@「ちょ！マシンガンはなし・・・ぎゃーー！！」

修学旅行編終了！！（前書き）

@「面接終わったーー！！」

亮「良かったな～」

@「これで自由の身だーー！！」

亮「・・・受かればだがな」

@「・・・ひゃっほーーーーー」

作者がログアウトしました

亮「・・・まあ、大丈夫だろ。指定校推薦だし。んじゃ本編←」

修学旅行編終了！！

「・・・」

目を覚ますと、見た事のある天井が目に入った

・・・知らない天（井では無いよな？）

・・・何故邪魔をする

（人の言おうとするネタを潰す。これほど楽しい事は無い）

せ、性格わり～

【ギュ】

「・・・ん？」

起きようと思ったら起きれない

金縛りに掛けられている様だ

「・・・」

左に刹那ちゃん、右に木乃香ちゃん、上には・・・

「む、起きたか」

・・・何故、真名ちゃん・・・

「降りてくれね？」

「む、美人が上に乗っていたと言うのに反応が乏しいな・・・」

「イヤ、洒落にならんからそれ」

（まさかお前、イn）

断じて違う！！

「しょうがない、寝顔を見れただけで良しとしよう」

そう言い真名ちゃんは部屋から出ていった

・・・脱出劇はカット！！

ーーー☆ーーー亮、脱出中ーーー☆ーーー

脱出に必要なのは慎重な行動とスピードだな

「ふ～、良い朝日だ」

「なんだ、起きたのか」

部屋の外に出ると、エヴァちゃんが酒を飲んでいた

「・・・未成年の酒飲みは禁止だぞ」

「私は既に大人だ！！」

まぁ、恒例のボケは一先ず置いといて

「昨日、俺が気絶した後の話を聞かせてくれ」

「ふん。茶々丸」

「イエス、マスター」

茶々丸ちゃんの回想が始まった

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「亮！」

「亮兄！」

「りょう兄！」

「亮さん！」

敵の魔法で貫かれた亮さんはそのまま気絶してしまいました

「え、エヴァンジェリンさん！回復魔法は！」

「私は回復魔法を覚えていないんだ！」

マスターとネギ先生は驚き慌てて、まったく役に立ちませんでした

「・・・」

「このちゃん？」

すると突然、近衛様が立ち上がりオコジョ妖精に言いました

「うち・・・やるわ」

「な、何をっすか木乃香の姉さん」

「うちの力でりょう兄を助ける！」

木乃香様は並々ならぬ決意と共に亮さんにキスしました

ーーー☆ーーー☆ーーー☆ーーー

「ｗｈｙ？」

やべ、驚きのあまり英語が出ちまったぜ

「仮契約の為です」

「・・・ああ、成る程」

嫌ね、んな言い方されたら木乃香ちゃんが可笑しくなったかと思っ

たじゃん

（愛の力で奇跡は起こる（笑））

奇跡も何もねえよ

「それで俺は助かったと」

「はい。でなければ、今頃亮さんは土の中です」

嫌々、葬式が先だろ

（問題そこ！？）

「で、木乃香ちゃんと刹那ちゃんは俺の看病で今はオネムか」

「ふん、だらしない」

そう言うなって、木乃香ちゃん達はまだ中学生なんだから・・・

「りょう～兄～」

ん、噂をすれば・・・

【ドゴンッ】

ラウンドタックル！？

腰が～腰が～（泣）

「良かったわ～」

「木乃香ちゃん、死ぬ。腰が御臨終する」

「亮兄！」

あ、刹那ちゃん・・・

【ドゴンッ】

パラダイス！！

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「「ごめんなさい・・・」」

「俺が起きて喜んでくれるのは嬉しいが、タックルはマジで止めて」

（よ、色男）

お前、何時か殺す

「ん？亮君起きたのかい？」

「あ、詠春さん・・・」

木乃香ちゃん達を叱っていると詠春さんが近づいてくる

「木乃香を守ってくれてありがとう。そして、これからも宜しく頼む」

「へ？あ、はい・・・」

なんで詠春さんは嬉しそうなんだ？

「おっと、そういえば今からナギの家に行くつもりなんだが、どうだい？」

「・・・イエ、遠慮しときます」

別に見に行く利点も無し

俺は最後の京都を満喫するとしよう

「ふん。私も行かんぞ」

「？貴女は行かないのですか？」

「ナギにもう興味は無い」

「ほう、そうですか・・・」

？なんで詠春さんは暖かい目で俺を見てくるんだ？

（それはお前を変な目で見てるからだよ）

俺はノーマルだぜ？

「ふん！亮、茶々丸、行くぞ」

「イエス、マスター」

「あ、俺もですか、そうですか」

姫様、何処までもお供します（笑）

（騎士（笑））

おっとその前に・・・

「エヴァちゃん」

「ん？なんだ？」

「・・・目に隈が出来てるよ（ボソッ」

「・・・な！？」

クックックッ

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

そして俺達は、京都を満喫して麻帆良へと帰った

「りょう兄の横はうちのもんや～！！」

「何を勝手な！私が横だ！」

俺の席の横の取り合いが新幹線の中であったが、特に問題無い

へ？もう片方？それは刹那ちゃんが占領しました

「ＺＺＺ」

てか、寝てる

「私も戦いに入って良いかな？」

「真名ちゃんは俺の胃を痛くしないでくれ・・・」

てかなんで皆此処に居るの？皆の車両は隣だよな？

「うちはりょう兄と仮契約したんやーー！！」

「それがどうした！眠っているところを襲っただけだろうが！！」

「「グヌヌヌ」」

・・・そういや、さよちゃんの仮契約カードもあったな・・・これ、どうしよ？

ついでに千雨ちゃんのカスカードと思われる真っ白な何も書かれてないカード・・・

「「亮（兄）！！」」

「ん？」

「「唇寄越せ（ちょうだい）！！」」

「ちょ、馬鹿、やめろ！」

・・・ホント、平和に戻って良かった・・・のか？

（頑張れ、超頑張れ）

オマケ

久しぶりに見る我が店は懐かしく感じ・・・

「ねえよ。なんだこの呪われた家みたいな惨状は」

店は蔦で外見を全て覆われ、中がまったくと言っていいほど見えな

かった

「あ」

「ん?姫か・・・なんぞこの惨状は?」

「私が育てた魔界植物の結果ですが何か?」

「今すぐ捨ててこい。または枯らせ」

なんでんなもん此処で育ててんの!?別荘の中でやれよ!

「残念です・・・この植物が咲くと猛毒で周りを包み込みますのに・・・」

「なお悪いは!」

たく・・・これを処理するのも俺なんだろうな・・・ああ、めんど

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

「・・・で、白と色は何処に行ったんだ?」

あの変な植物の処理を終わらせ姫に聞く

・・・あの植物は強敵だった

「先程、別荘へと入っていきましたが」

「別荘に？そりゃまた何故？」

「修行をしているそうですよ？」

修行ねー・・・もしかしてアスモデウスにやられたのが悔しかったのか？（修学旅行前の話）

「んじゃ、俺は寝る。店は明日から再開だ」

「はい、マスター」

ああ、眠。結局、新幹線では寝れなかったからな・・・

ーーーー☆ーーーー☆ーーーー☆ーーーー

次の日

「あ～・・・おはよ」

「おはよう、亮・・・」

「おはようございます、主」

「おはようございます、マスター」

修学旅行前と何も変わらない朝だ

美女3人と朝食を・・・

「・・・は（。д。?）」

「・・・?」

「どうかしましたか主よ?」

ど～ういう事だ～?美女が3人に増えている～?（CV.若本）

（何そのギャルゲーみたいな展開?てか声ｗｗｗ）

とっさに出てきた（笑）

てか、あまりにも自然に居て気付かなかった!

落ち着け俺、こういう時は素数を数えるんだ

1、2、3、5、7、11、13、17、19、23、29・・・

（残念だが、1は素数じゃない）

焦ってると絶対入れちゃうよな（笑）

「で、誰だ・・・お前等」

黒髪な見た目15歳の美少女と銀髪な見た目20代前半の美女に問いかける

「「?」」

イヤ、んな何を言ってるんだ的な目をされても・・・

「マスター、分かりませんか？」

いやね、流石にこのノリで解らない奴が居たら、ソイツは可笑しいてか、二人とも俺と契約のラインが繋がってるし（笑）

「・・・色と白だよな」

「Ｊａｃｋ　Ｐｏｔ《大当たり》」

ですよね～（笑）（笑）

うは、俺の周りが美女で埋め尽くされるｗｗｗ

（あ～・・・とうとう壊れたか）

うは、バロス

修学旅行編終了！！（後書き）

システムからのお知らせｗｗｗ

フラグ、色と白の修行が回収されました

色の見た目が8→１５に変わりました。言葉で言えば幼女→美少女

白の見た目が変わりました。狼→美女

亮の能力に『声変えＣＶ若本』が追加されました（笑）（笑）

フラグ、『主従関係』が建ちました

フラグ、『契約の更新』が建ちました

ではでは

亮「待てーー！！システム作者だろ！！何処行ったーー！！」

姫「逃げられましたね」

亮「畜生ーー！！」

姫「まあまあ、それより本編の話をしましょう」

亮「何をせいと？俺には何も分かりませんが？」

姫「では、私からは・・・

色様の見た目はダンタリアンの書架の”ダリアン（アニメ）”の様になりました

白様の見た目は魔法少女リリカルなのは（A’s）の”リインフォース（初代）”の様になりました

と作者からです」

亮「分からない人はまあ、色は黒髪の美少女。白は銀髪の美女になったと考えてくれ」

姫「マスターの周りには美女と呼べる方が集まっていますね・・・」

亮「そりゃ俺、主人公だし・・・」

姫「もてない主人公達に向けて土下座して下さい」

【ゲシゲシ】

亮「ちょ、姫、蹴るな痛い」

姫「五月蝿いですよマスター。今私はマスターを蹴るのにいそがしいんです」

亮「え～・・・まあ、次回も見てくれ」

って事で修学旅行編終わりました！！
次の次ぐらいに『第三次枕大戦』を投稿します
皆さんお楽しみに（へ？もしかして忘れてる？良いや投稿投稿）
感想、質問、突っ込み、待ってま～す
あ、いつでも料理は募集してます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8654q/

目指すは最高の料理人！！

2011年11月20日19時45分発行